

### Ⅲ 定点把握対象 五類感染症(週報・月報)発生状況

## 1 週報

### (1) インフルエンザ／小児科定点

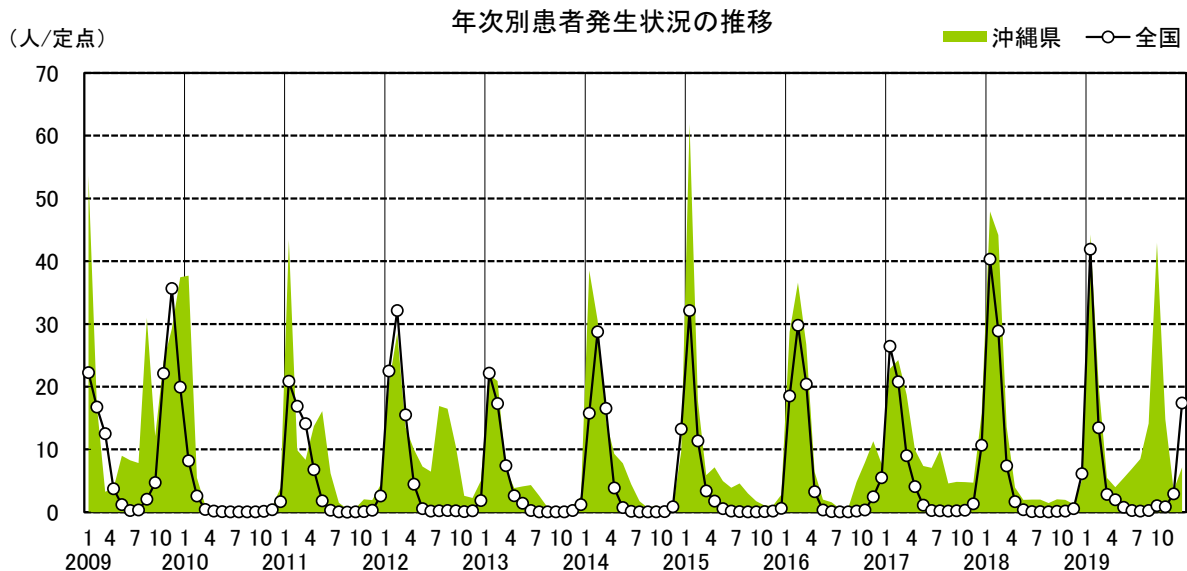
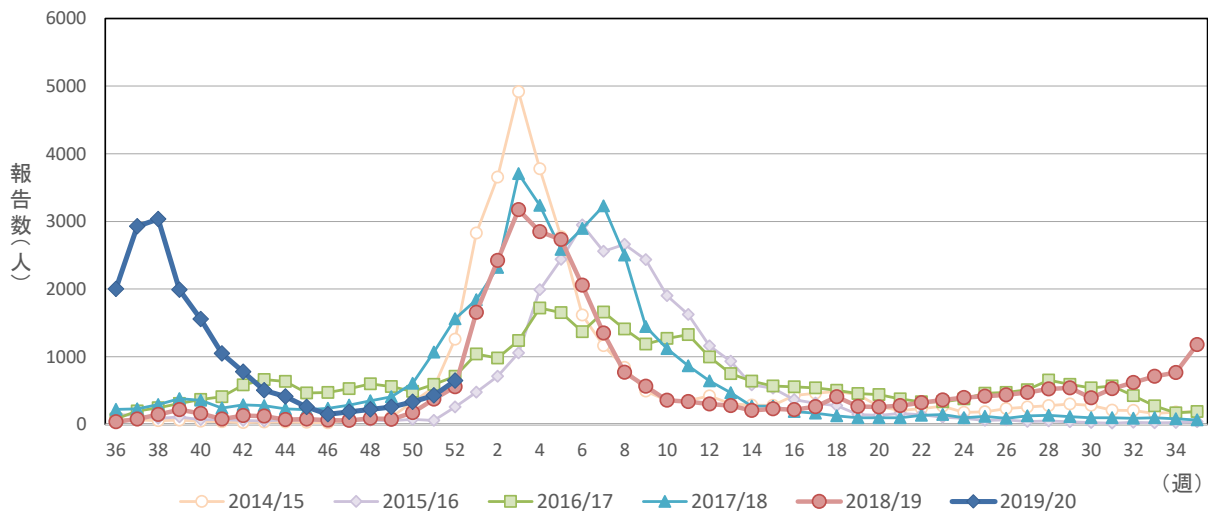
#### ●インフルエンザ

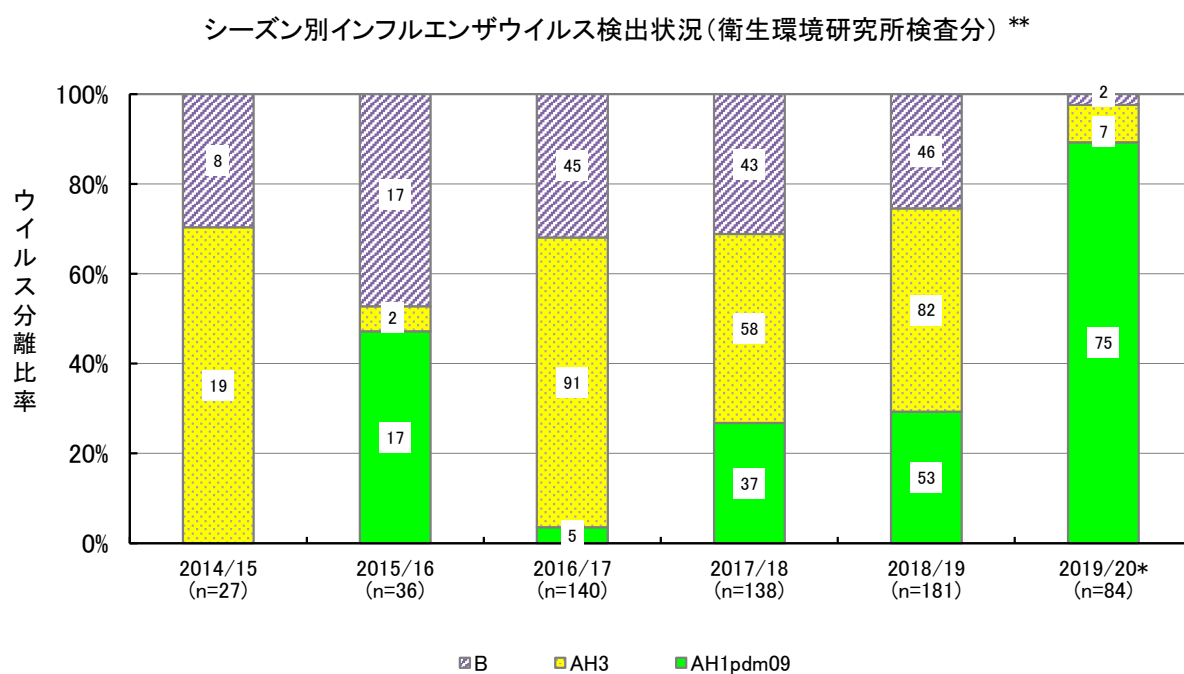
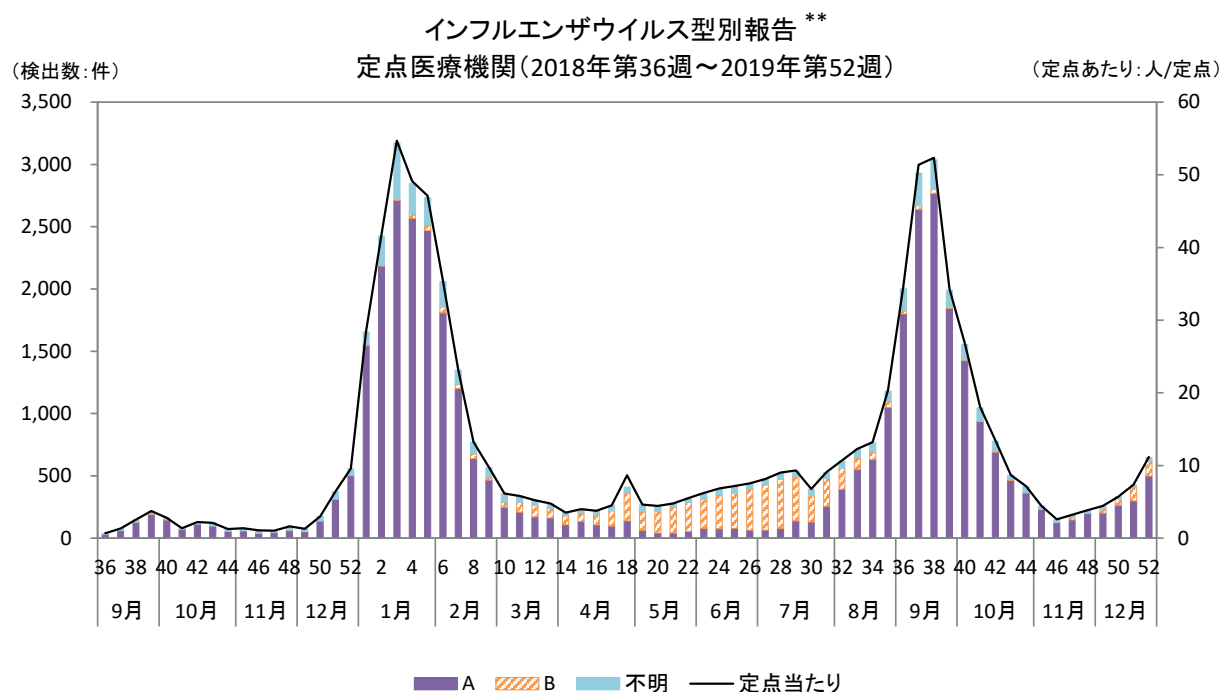
2019年沖縄県内の報告数は45,357人、定点当たり報告数は782.89人であった。  
沖縄県の2018/19シーズン（2018年第36週～2019年第35週）は、2019年第1週に28.53人と注意報レベルの基準値10を超え、翌第2週には41.79人と警報レベルの開始基準値30を超えた。2018/19シーズンのピークは2019年第3週の54.69人であった。その後、2019年第9週には警報レベルの終息基準値10を下回ったものの、流行の兆しである1.0人を下回ることにはなかった。また、2019年第32週には10.67人と再び注意報が発令され、2019/20シーズン（2019年第36週～52週）に移行した2019年第36週に34.53人となり、2008/09シーズン以来となる夏季の警報発令に至った。その後、2019年第43週に終息基準値を下回り、警報が解除された。

2019年の年齢階級別では、0歳から14歳までで、全体の49.4%を占めた。

2018/19シーズンに検出されたインフルエンザウイルスは、AH3亜型が82例で最も多く、次いで、AH1 pdm09が53例、B型46例（うち山形系統46例、ビクトリア系統0例）であった。

インフルエンザ 過去5年の流行時期の比較



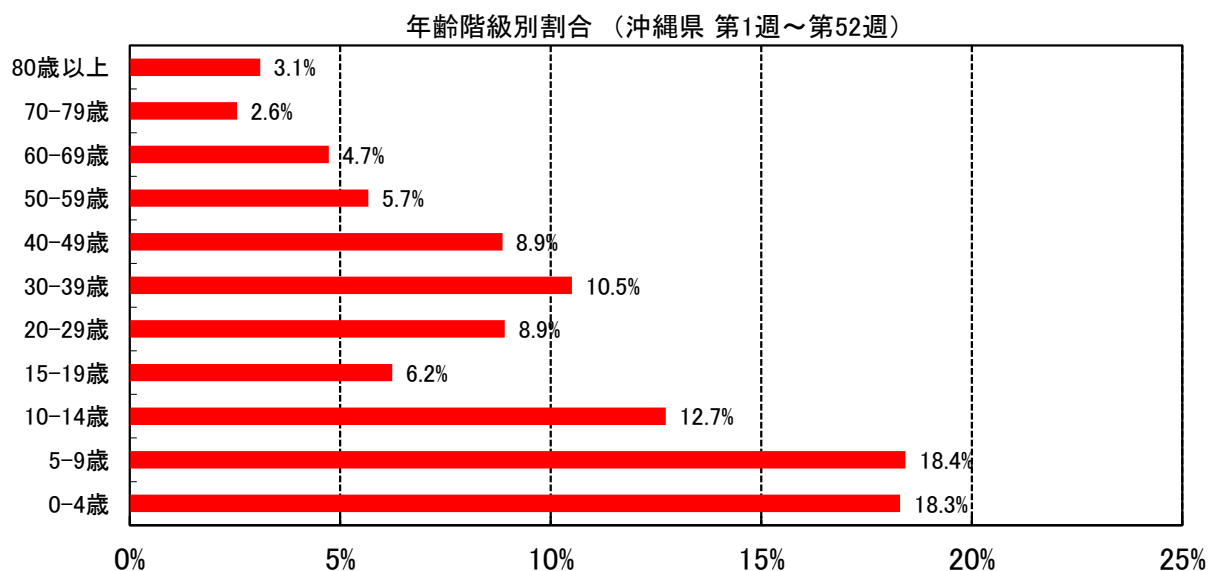
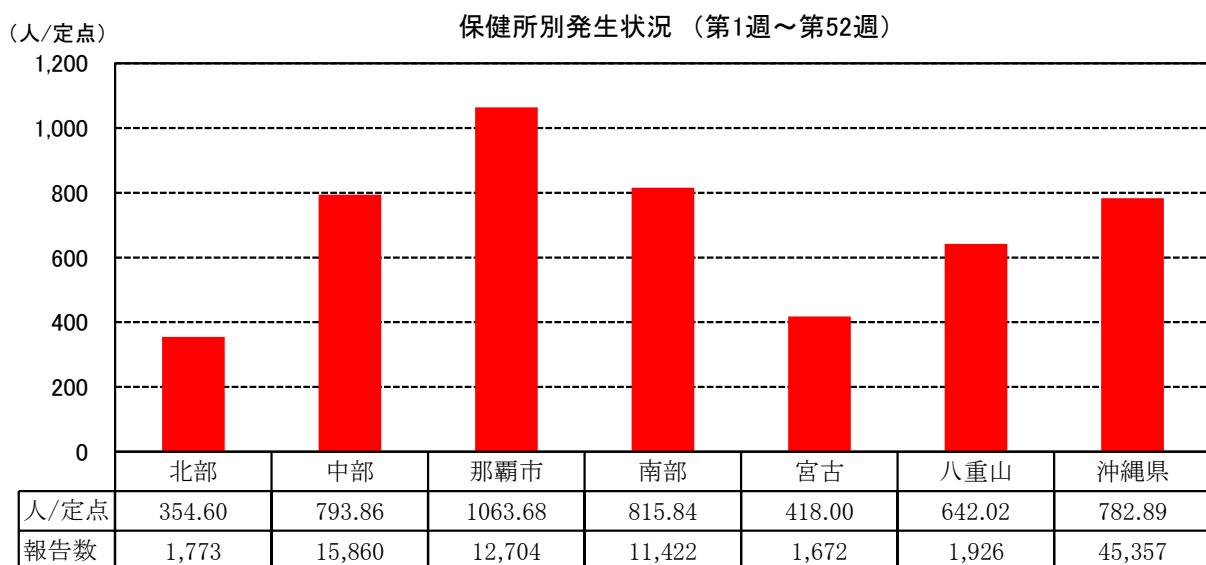
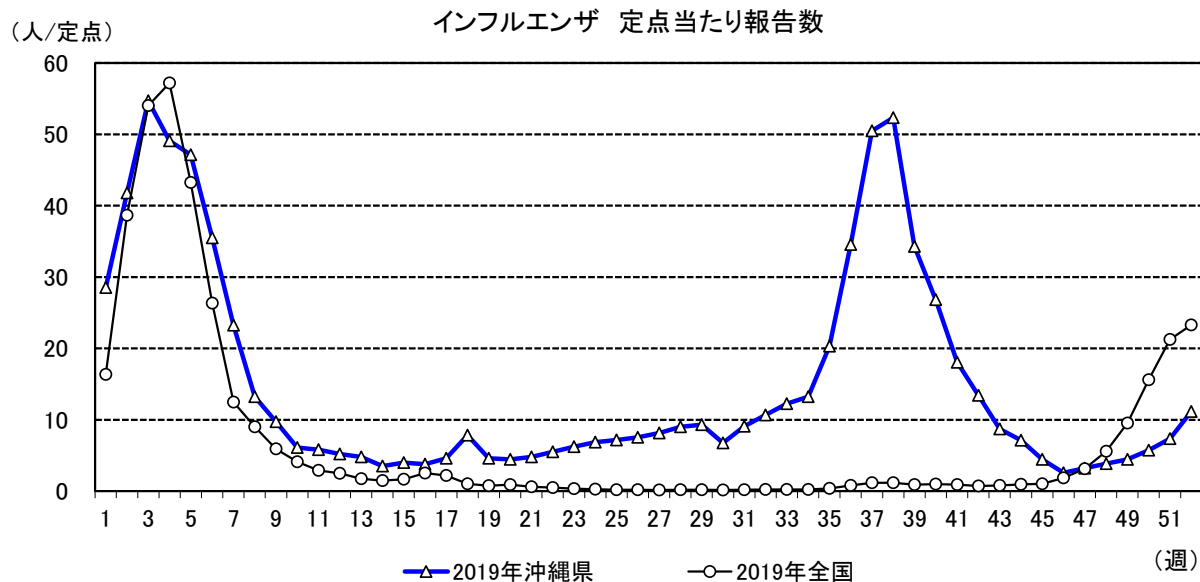


シーズン(9月～翌年8月)別の報告数合計: インフルエンザ

平均報告数 (2019/20)を除く	2014/15	2015/16	2016/17	2017/18	2018/19	2019/20*
32,559	32,386	27,896	34,462	36,915	31,137	16,733

\* : 2019年第36週～第52週の集計。

\*\* : AとBの重複感染例を含む。



# ●RSウイルス感染症

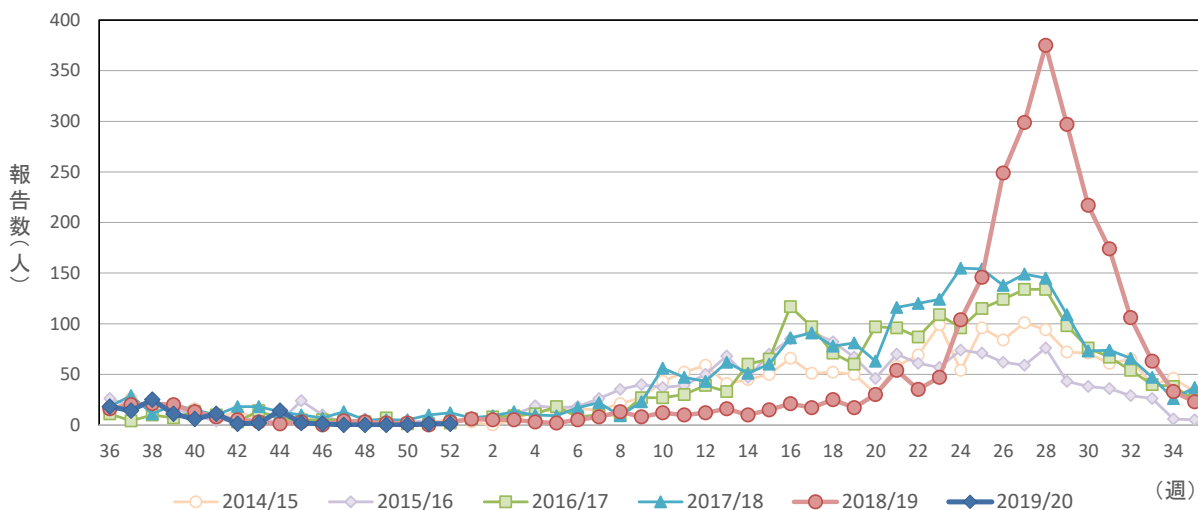
RSウイルス感染症は、RSウイルスによる急性呼吸器感染症である。生後1歳までに半数以上が、2歳までにほぼ100%の乳幼児が感染するとされている。生涯にわたり何度も感染と発病を繰り返すが、特に乳児期早期（生後数週間～数カ月間）にRSウイルスに初感染した場合は、重症化しやすいため感染しないよう注意が必要である。

2019年沖縄県内の報告数は2,569人、定点あたり報告数は75.66人であり、年々増加傾向が見られる。

沖縄県の2018/19シーズン（2018年第36週～2019年第35週）は、2019年第28週に報告数375人、定点あたり報告数が11.03人となり、医療機関におけるRSウイルス抗原検査の保健適応対象が拡大された2011年以降の週別報告数としては過去最多となった。

全国では9月に流行のピークが認められたのに対し、本県では7月にピークが認められた。

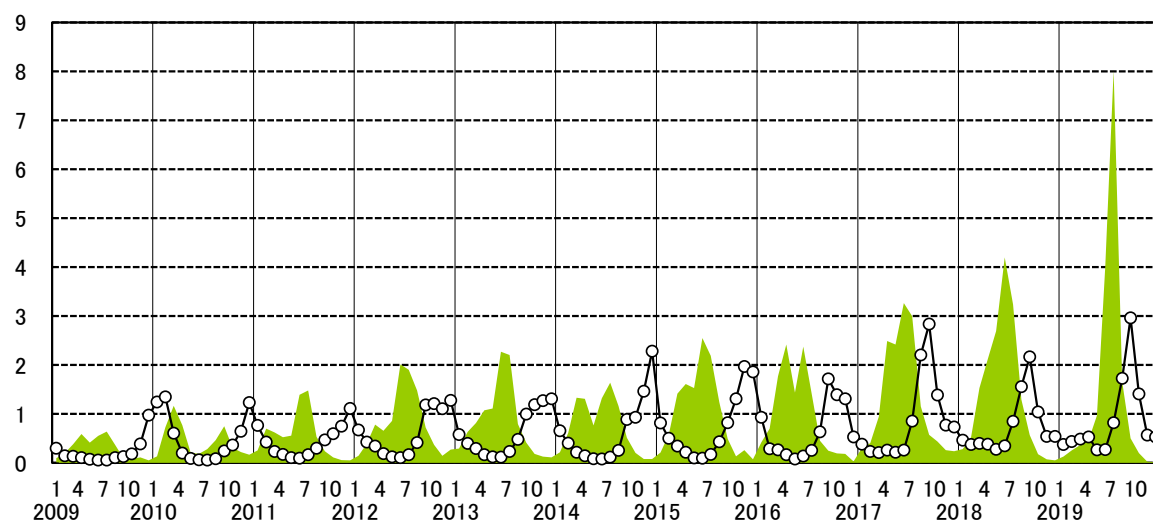
RSウイルス感染症 過去5年の流行時期の比較



(人/定点)

年次別患者発生状況の推移

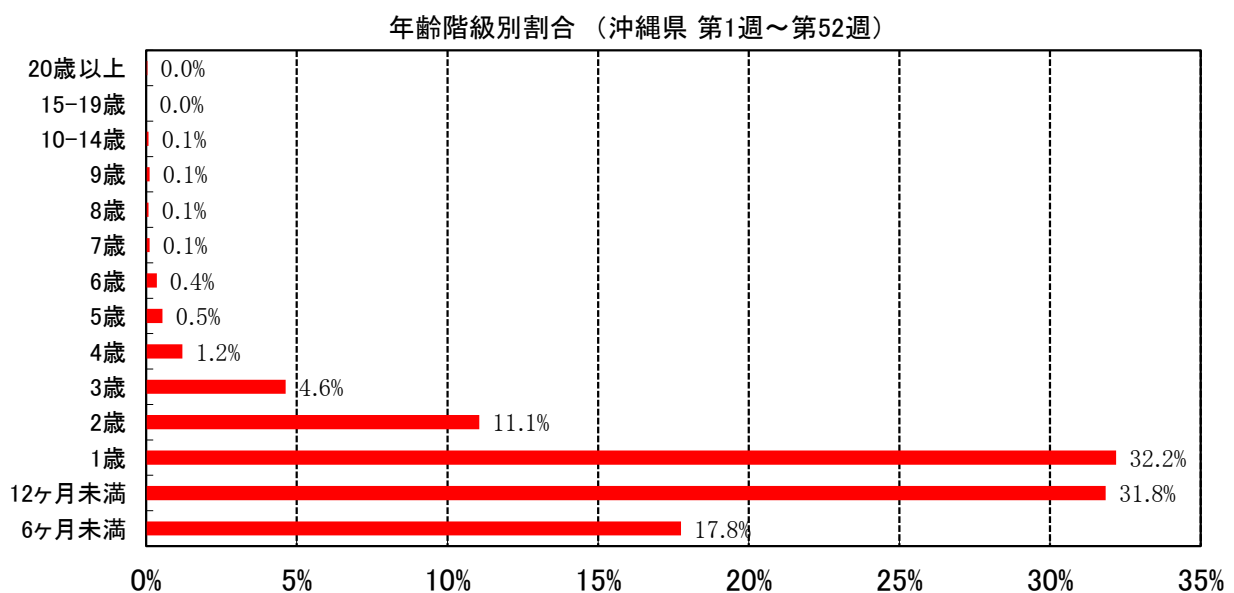
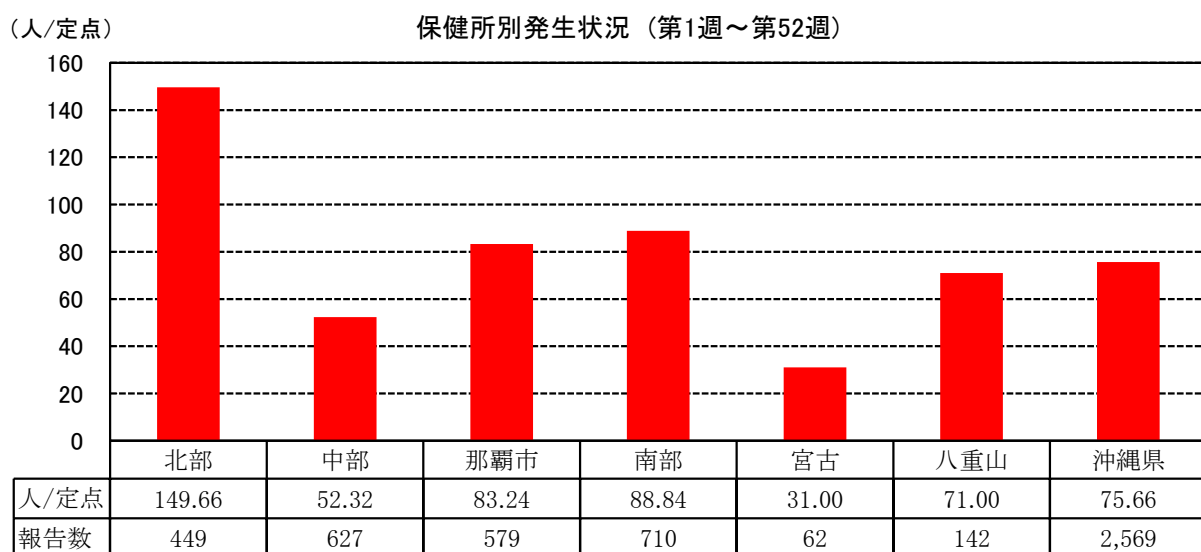
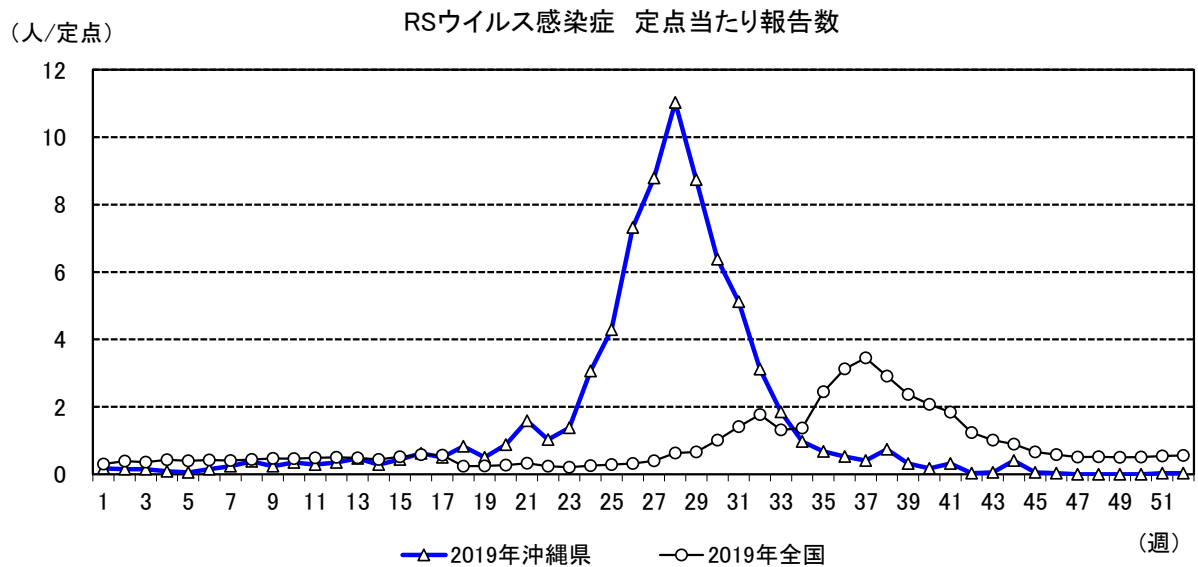
■沖縄県 ○全国



シーズン（9月～翌年8月）別の報告数合計： RSウイルス感染症

平均報告数 (2019/20を除く)	2014/15	2015/16	2016/17	2017/18	2018/19	2019/20*
2,190	1,835	1,737	2,203	2,589	2,586	107

\*：2019年第36週～第52週の集計。



●咽頭結膜熱（プール熱）

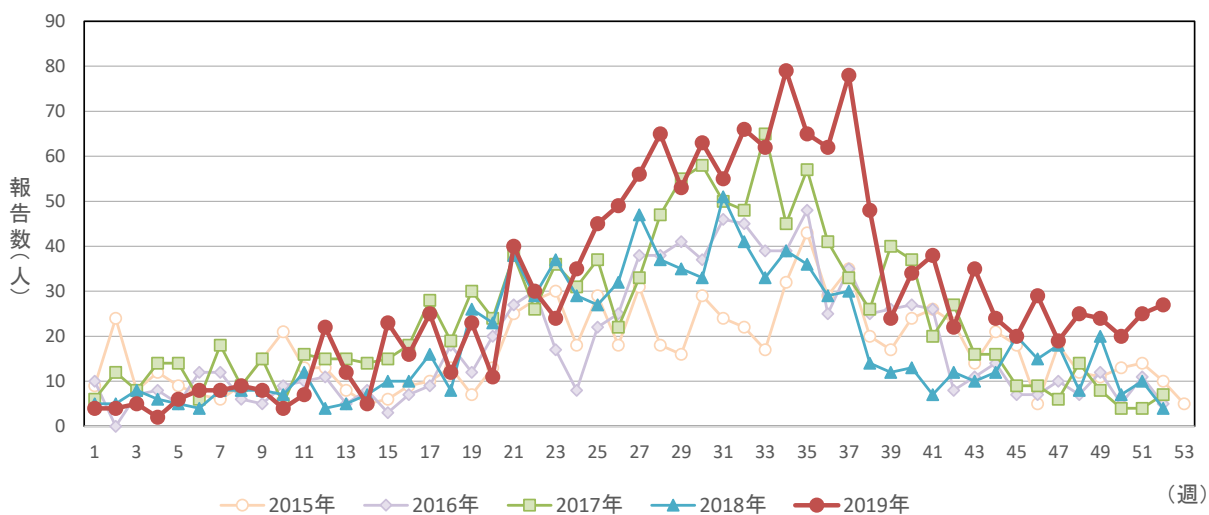
咽頭結膜熱は、アデノウイルスによる発熱、咽頭炎、眼症状を主とする小児の急性ウイルス性感染症である。プールでの接触やタオルの共用により感染することもあるため、プール熱とも呼ばれている。

2019年の沖縄県内の報告数は1,555人、定点当たり報告数は45.83人であり、過去10年で最も多かった。

全国では6月および12月にピークが認められたが、沖縄県では7月にピークが認められた。また2019年は、沖縄県、全国ともに、警報レベルの開始基準値3を上回る週はなかった。

年齢階級別では、1歳が最も多く、全体の33.6%を占めていた。

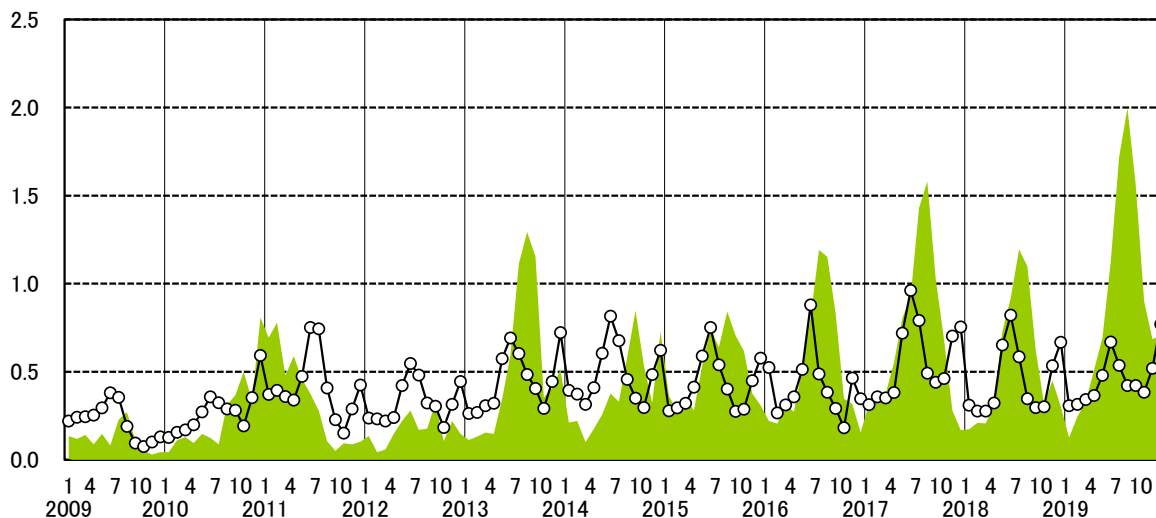
咽頭結膜熱 過去5年の流行時期の比較



(人/定点)

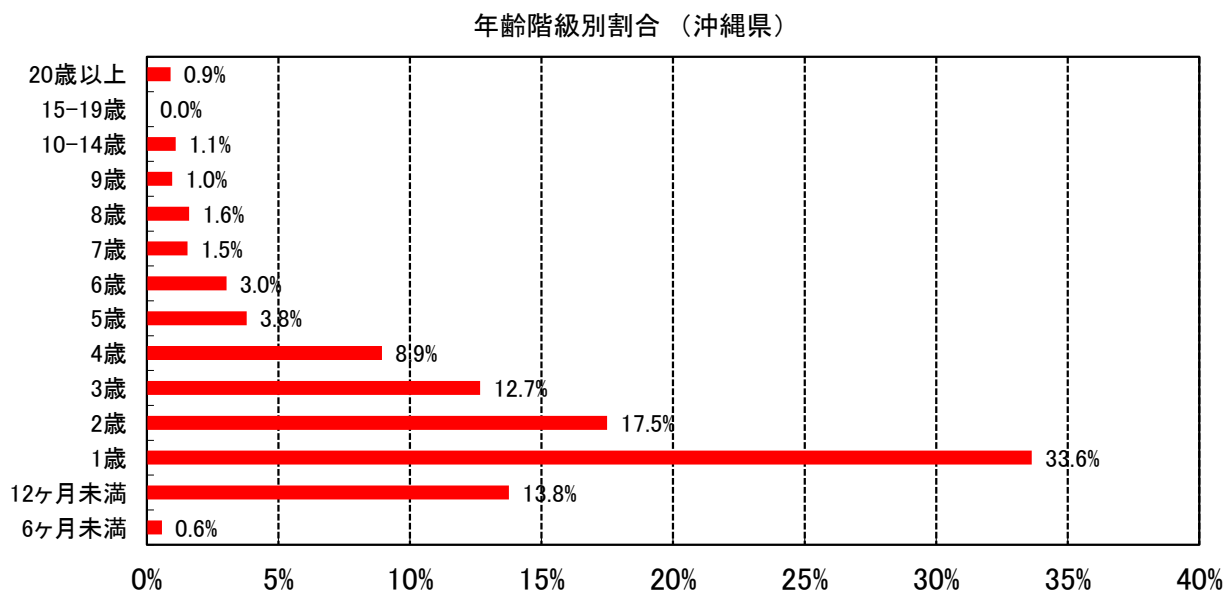
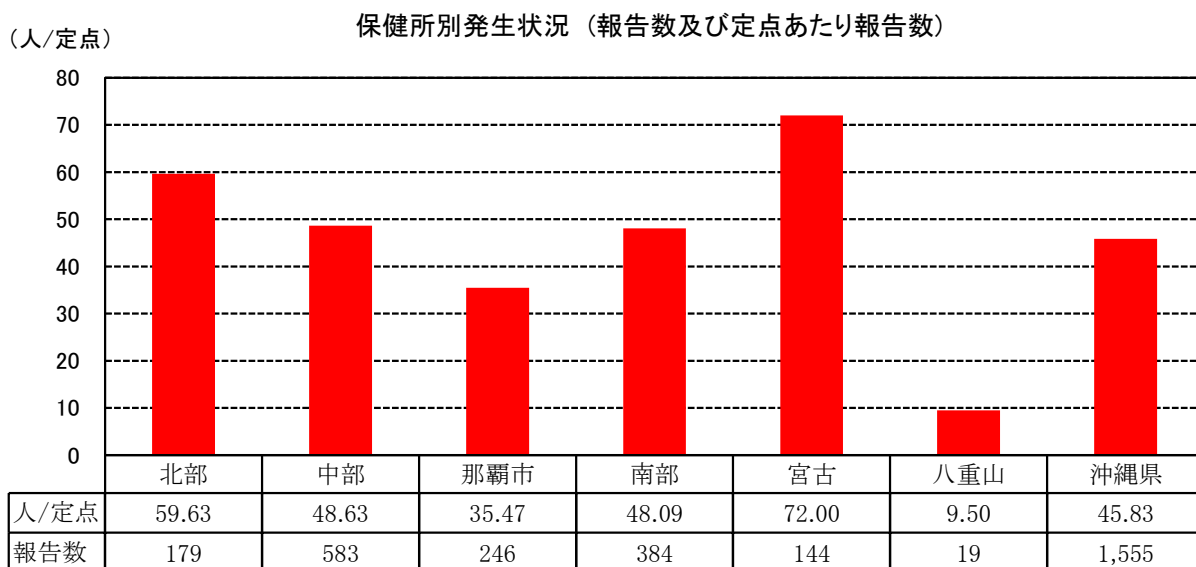
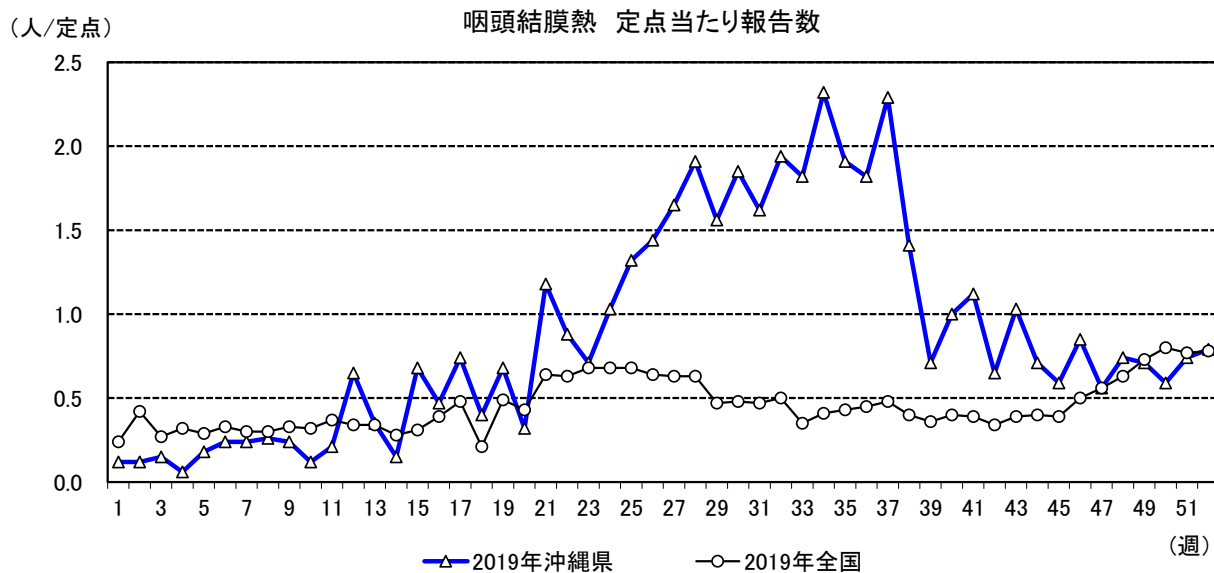
年次別患者発生状況の推移

■沖縄県 ○全国



年別の報告数合計： 咽頭結膜熱

平均報告数	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年
1, 128	912	938	1, 266	970	1, 555



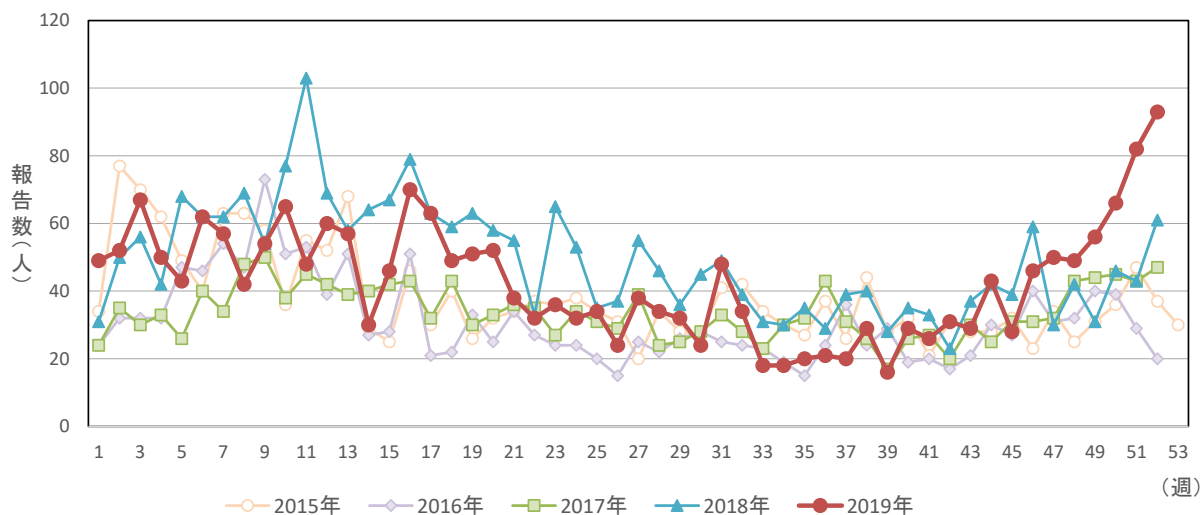
# ●A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は、いずれの年齢でも起こり得るが、学童期の小児に最も多く認められる。乳幼児では咽頭炎、年長児や成人では扁桃炎が現れ、発赤毒素に免疫のない人は猩紅熱を呈する。発疹を伴うこともあり、リウマチ熱や急性糸球体腎炎などの二次疾患を起こすこともある。

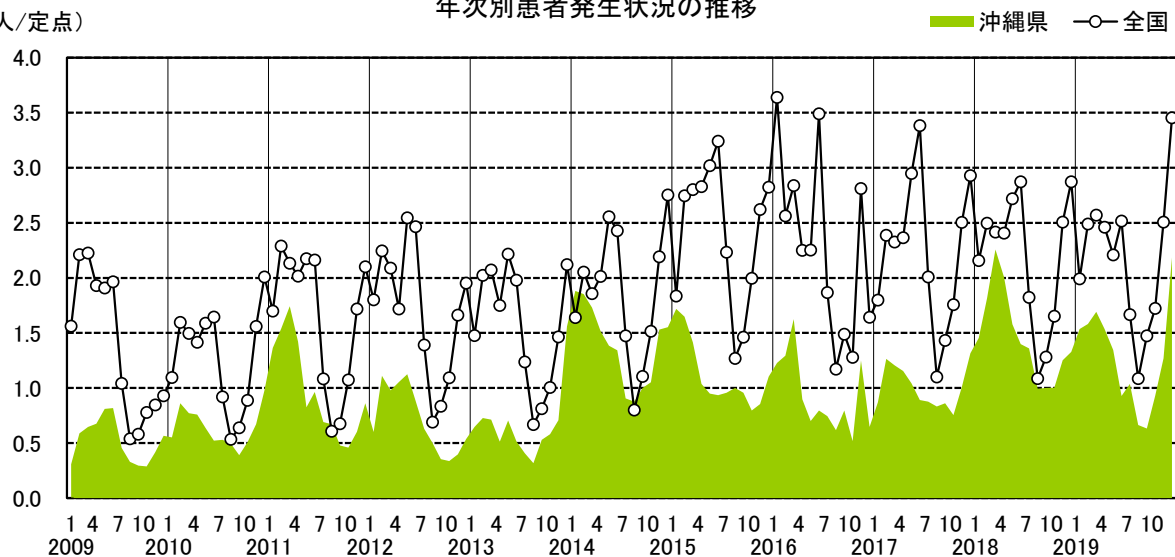
2019年沖縄県内の報告数は2,243人、定点当たり66.14人であった。また、2019年は、沖縄県、全国ともに、警報レベルの開始基準値8を上回る週はなかった。

年齢階級別では、10歳未満が多く、全体の75.6%を占めていた。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 過去5年の流行時期の比較



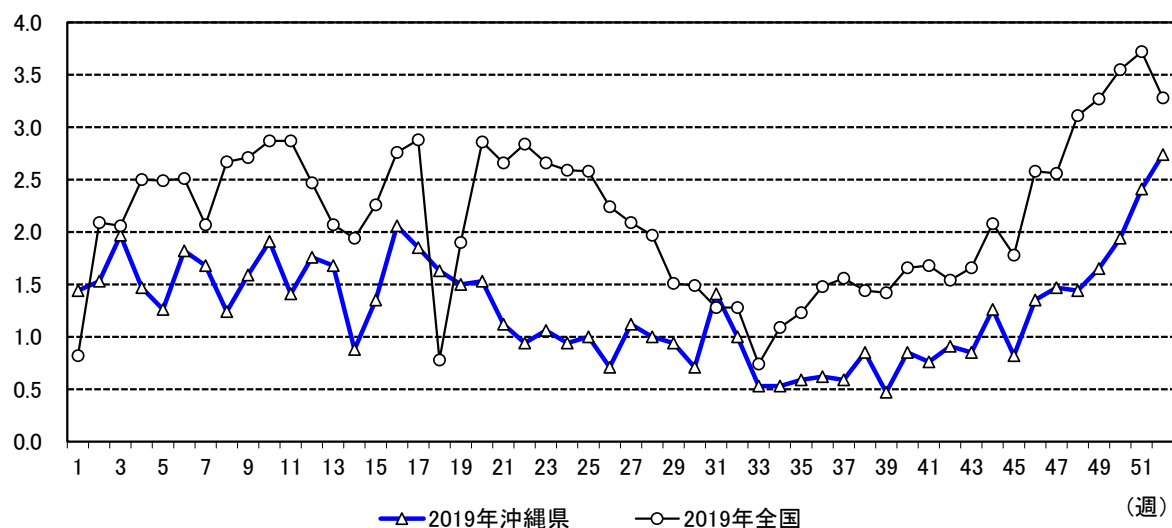
(人/定点) 年次別患者発生状況の推移



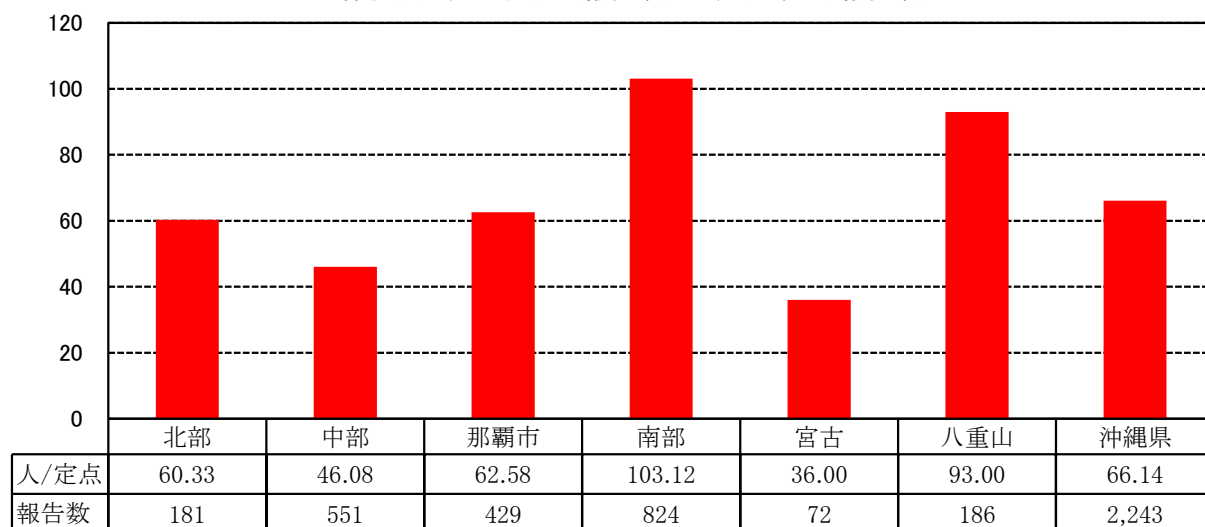
シーズン別の報告数合計： A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

平均報告数	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年
2,039	2,018	1,617	1,762	2,555	2,243

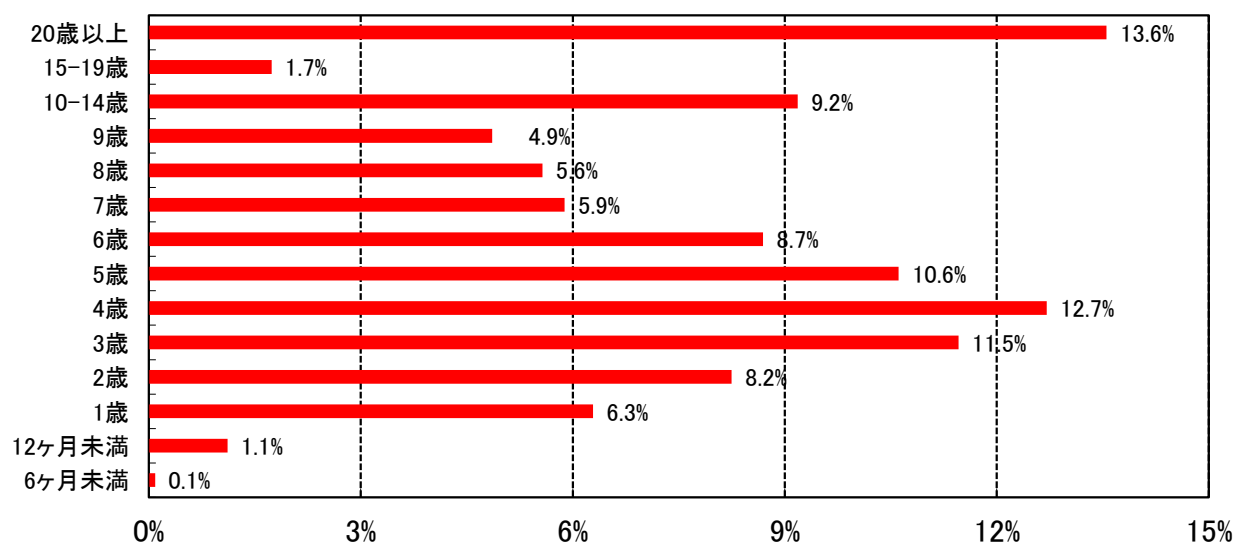
(人/定点) A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 定点当たり報告数



(人/定点) 保健所別発生状況 (報告数及び定点あたり報告数)



年齢階級別割合 (沖縄県)



# ●感染性胃腸炎

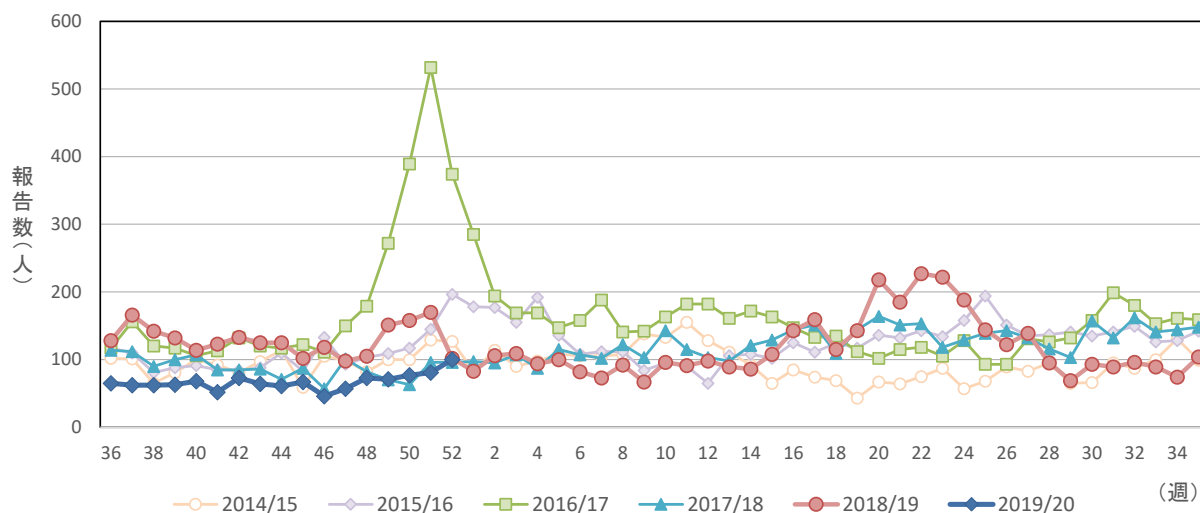
感染性胃腸炎は、多くの細菌（腸炎ビブリオ、病原性大腸菌、サルモネラ、カンピロバクター等）、ウイルス（ノロウイルス、ロタウイルス等）、寄生虫（クリプトスポリジウム、アメーバ等）が起因病原体となる。ウイルス性の流行のピークは秋から春にかけて、細菌性の流行は夏期に認められることが多い。

2019年沖縄県内の報告数は5,230人、定点当たり報告数は154.29人であった。

2018/19シーズン（2018年第36週～2019年第35週）は、沖縄県、全国ともに警報レベルの開始基準値20を上回る週はなかった。

年齢階級別では、10歳未満が多く、全体の67.5%を占めていた。

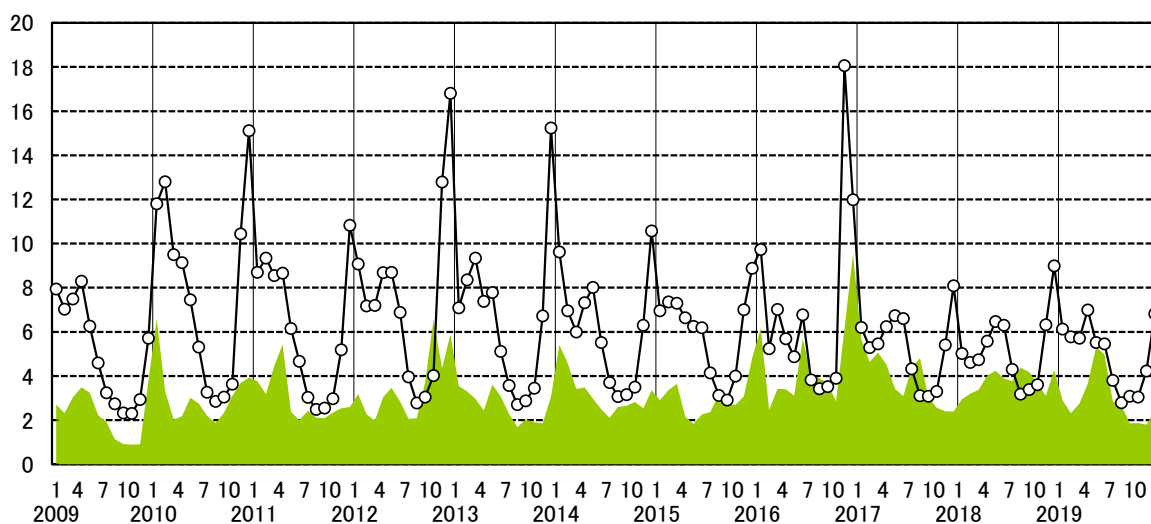
感染性胃腸炎 過去5年の流行時期の比較



(人/定点)

年次別患者発生状況の推移

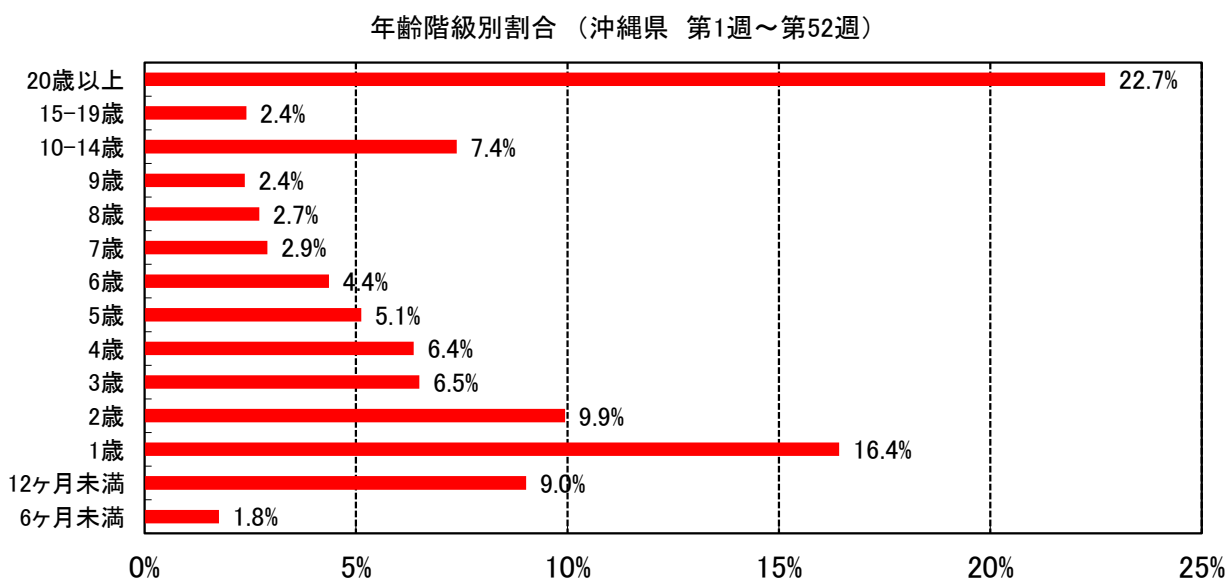
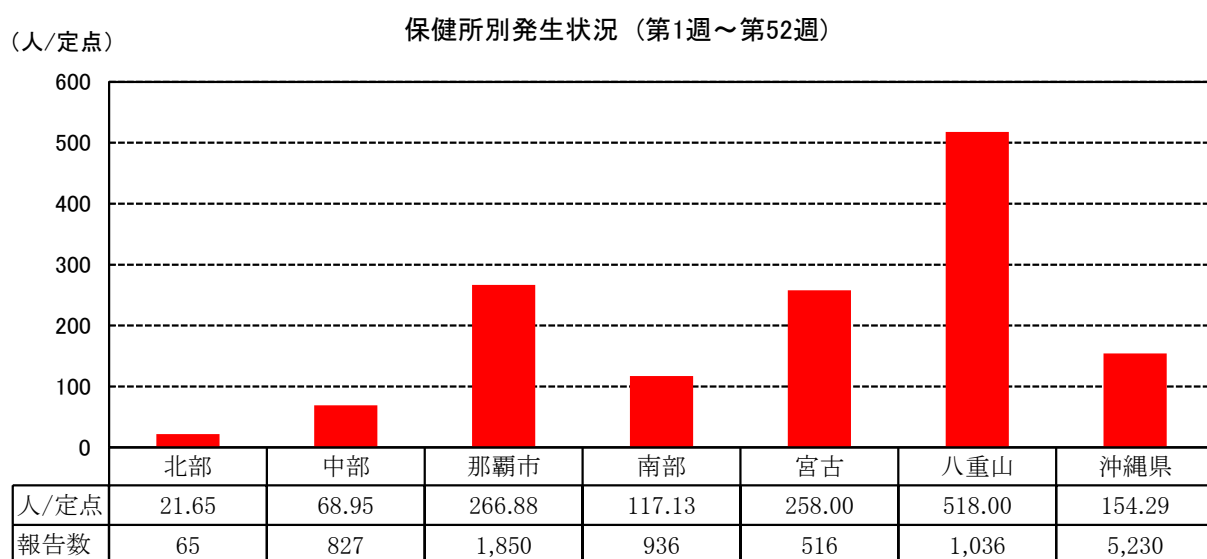
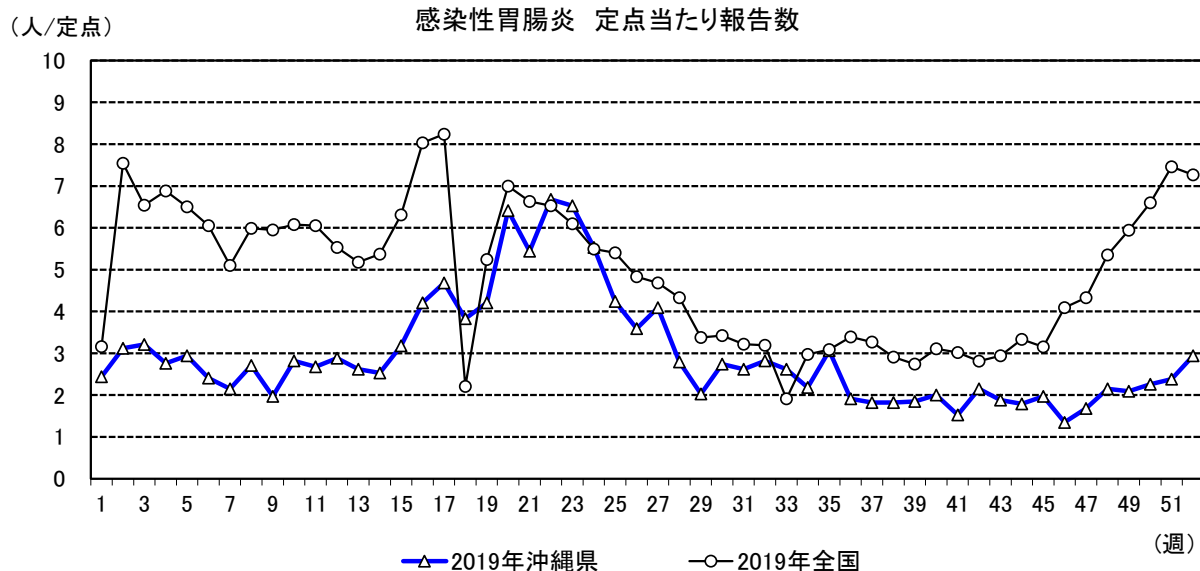
■ 沖縄県 ○ 全国



シーズン（9月～翌年8月）別の報告数合計： 感染性胃腸炎

平均報告数 (2019/20を除く)	2014/15	2015/16	2016/17	2017/18	2018/19	2019/20*
6,441	4,867	6,609	8,523	5,926	6,280	1,142

\* : 2019年第36週～第52週の集計。

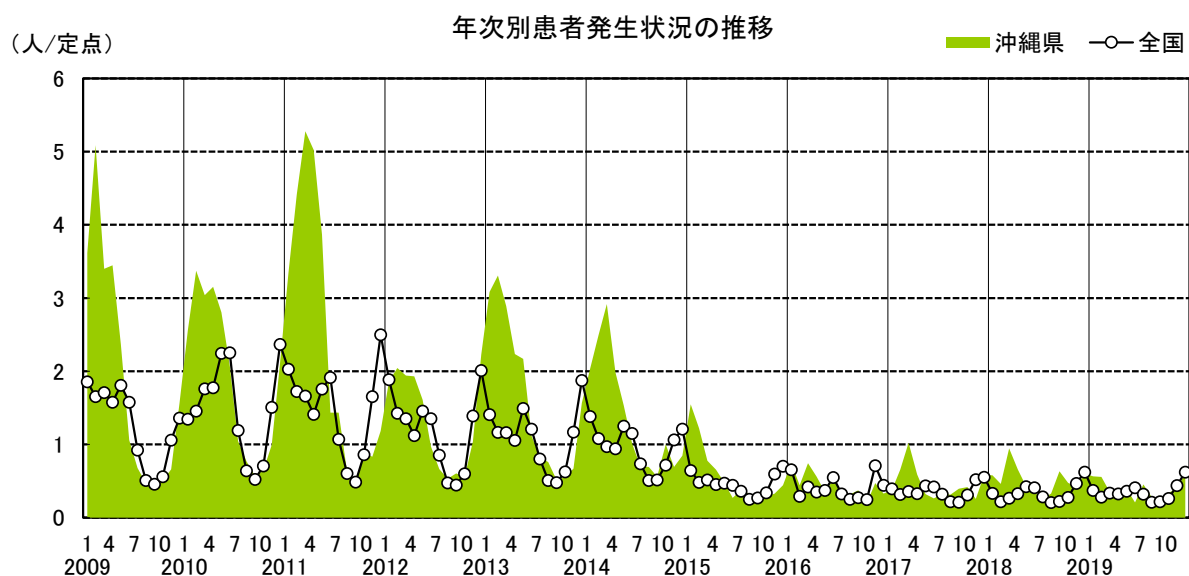
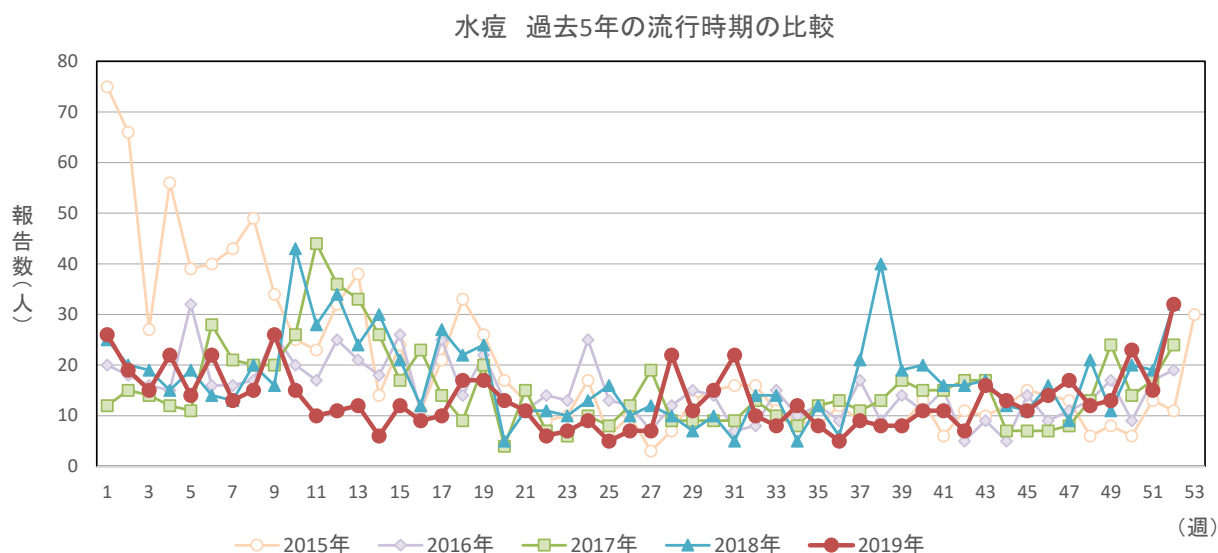


# ●水痘

水痘は、水痘帯状疱疹ウイルス（VZV）によって起こる急性の伝染性疾患である。例年12月～7月に患者発生報告が多く、罹患年齢はほとんどが10歳未満であることが知られている。

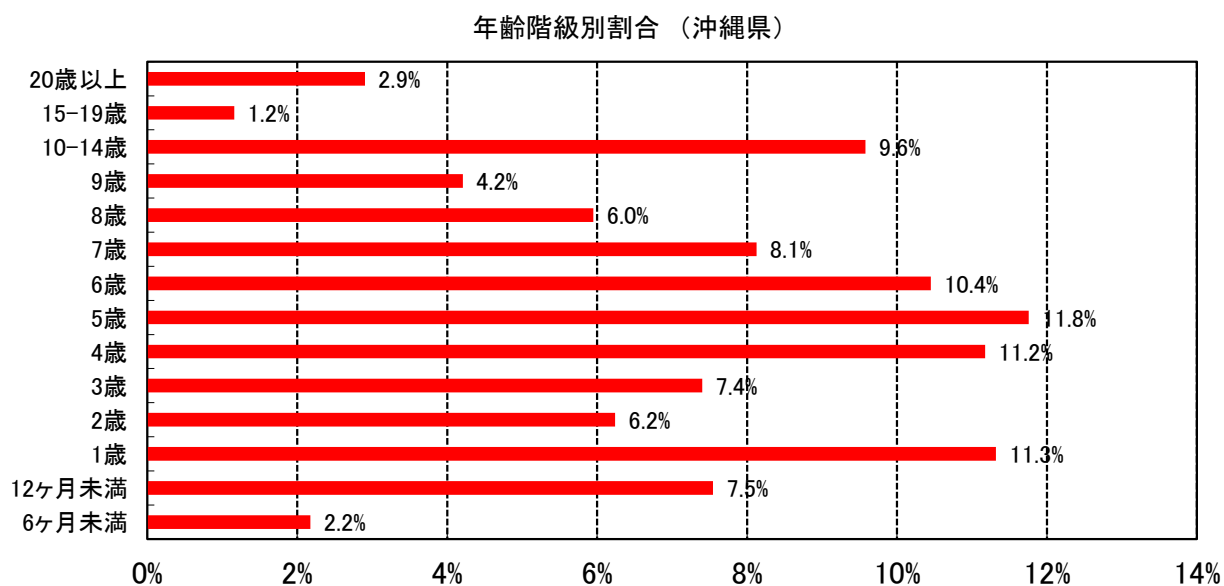
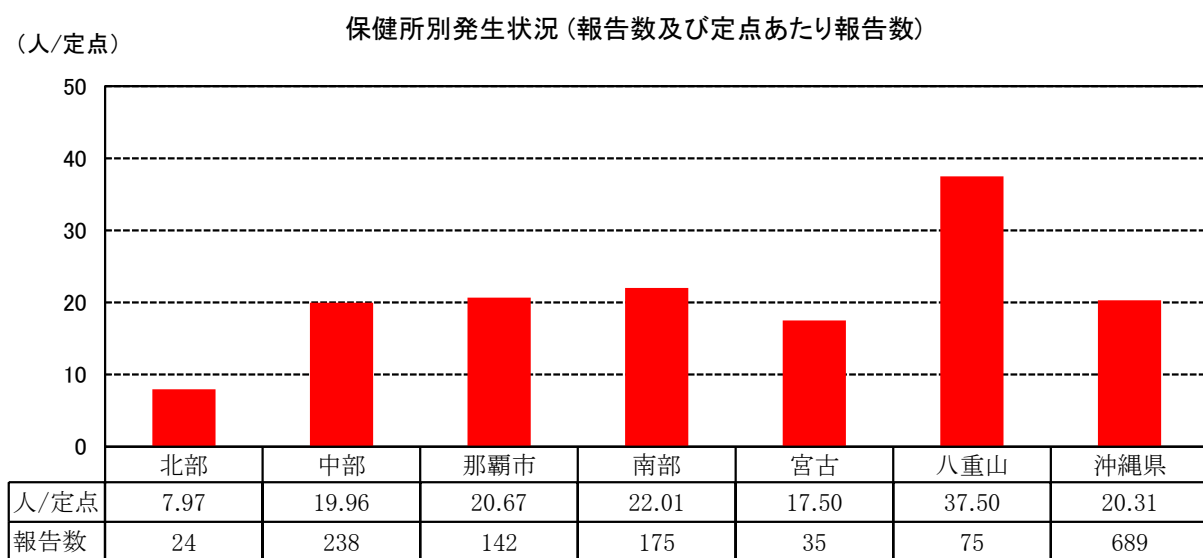
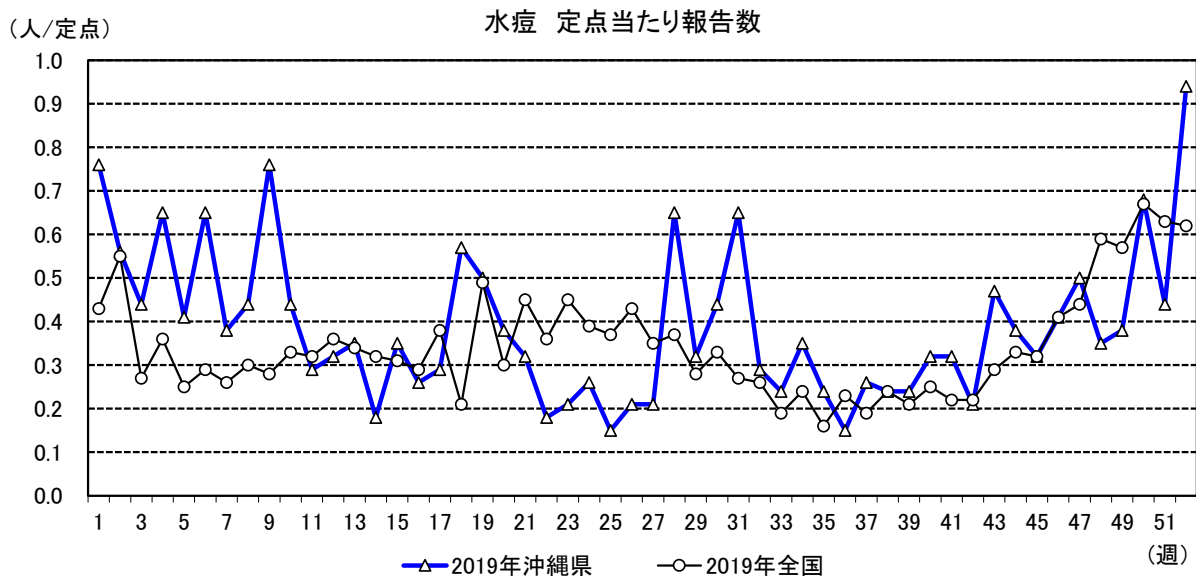
2019年沖縄県内の報告数は689人、定点当たり報告数は20.31人であった。定期予防接種の対象となった2014年10月以降、減少傾向にあり、2019年は過去10年で最も少なかった。

2019年は沖縄県、全国ともに警報レベルの開始基準値2を上回る週はなかった。年齢階級別では、10歳未満が全体の86.3%を占め、5歳が最も多く11.8%、次いで1歳が11.3%、4歳が11.2%と続いた。



シーズン別の報告数合計：水痘

平均報告数	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年
845	1,061	779	800	897	689



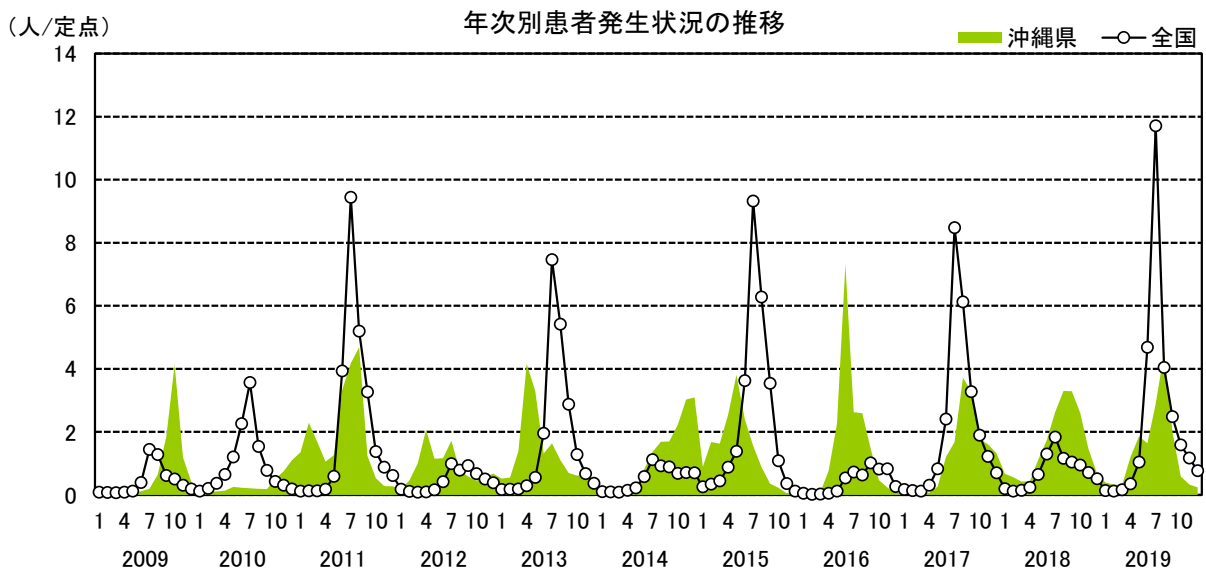
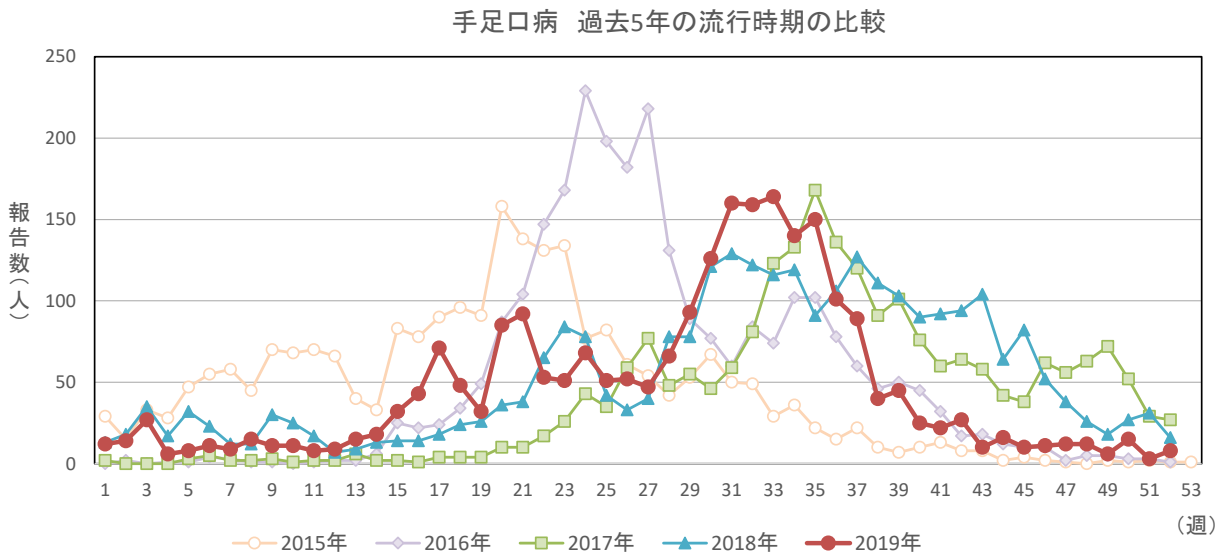
# ●手足口病

手足口病は、口腔粘膜および手や足などに現れる水疱性の発疹を主症状とした急性ウイルス感染症で、幼児を中心に夏季に流行が見られる。コクサッキーA16（CA16）、CA10、CA6、エンテロウイルス71（EV71）などが起因ウイルスである。EV71は中枢神経系合併症の発生率が他のウイルスより高いことが知られている。

2019年沖縄県内の報告数は2,409人、定点当たり報告数は71.03人であった。

2019年は、全国で警報レベルの開始基準値5を上回る週があったが、沖縄県ではなかった。

年齢階級別では、1歳が最も多く、全体の45.7%を占めていた。

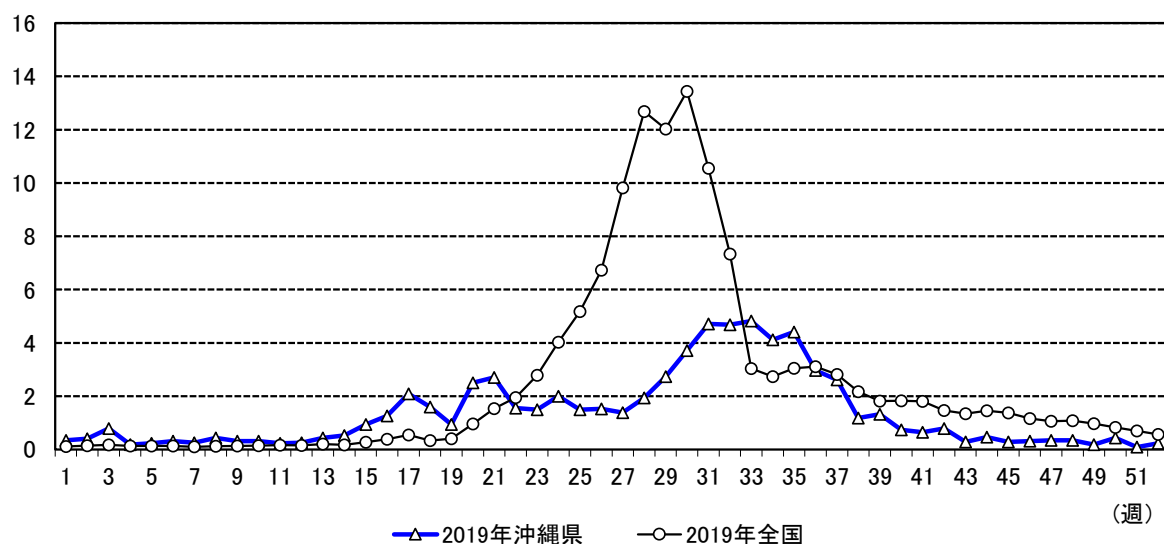


シーズン別の報告数合計： 手足口病

平均報告数	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年
2,483	2,387	2,627	2,182	2,810	2,409

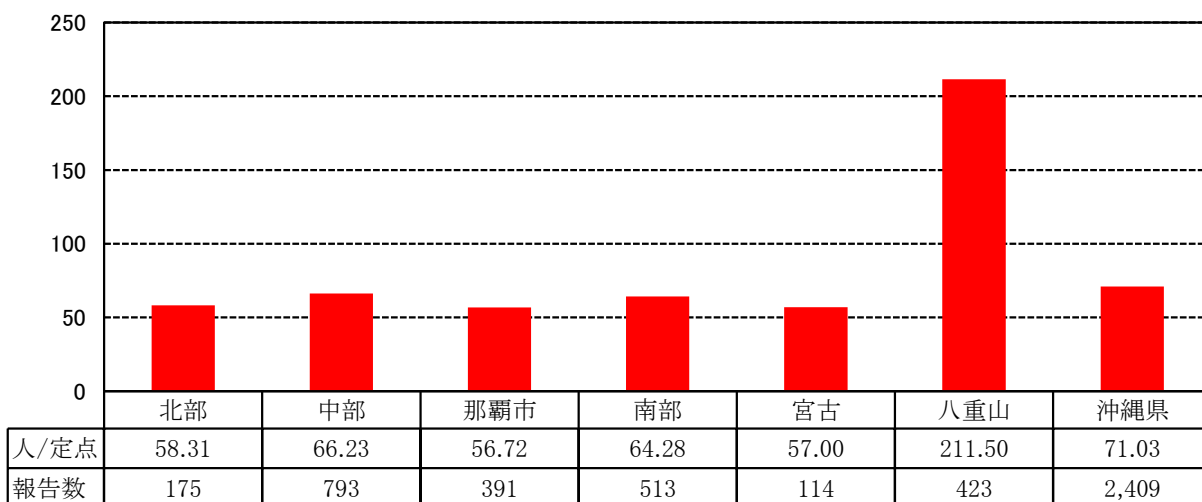
(人/定点)

手足口病 定点当たり報告数

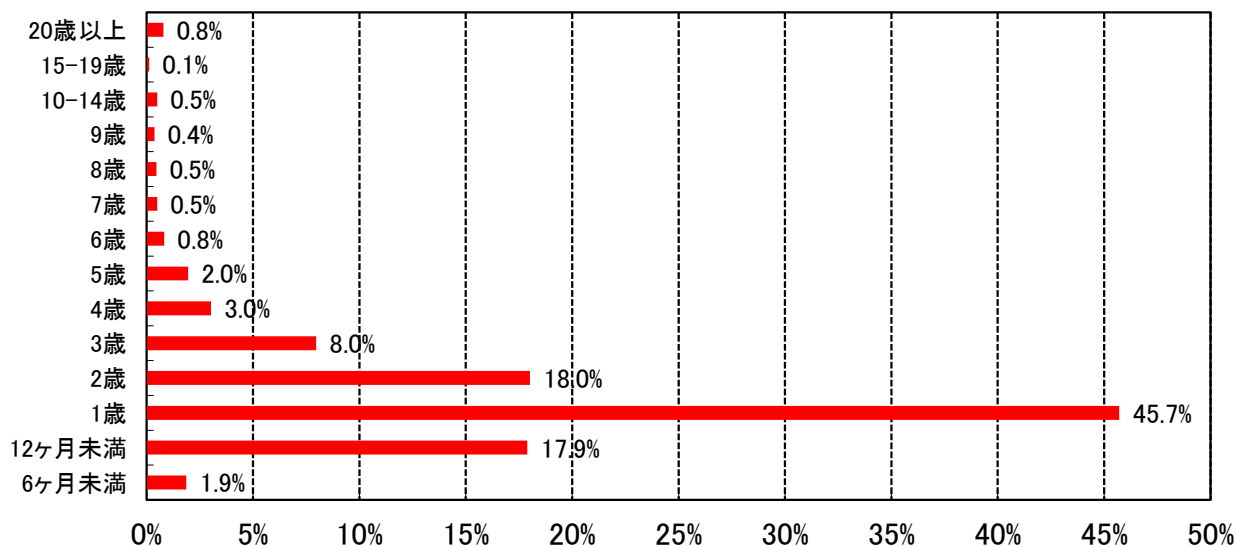


(人/定点)

保健所別発生状況（報告数及び定点あたり報告数）



年齢階級別割合（沖縄県）



# ●伝染性紅斑

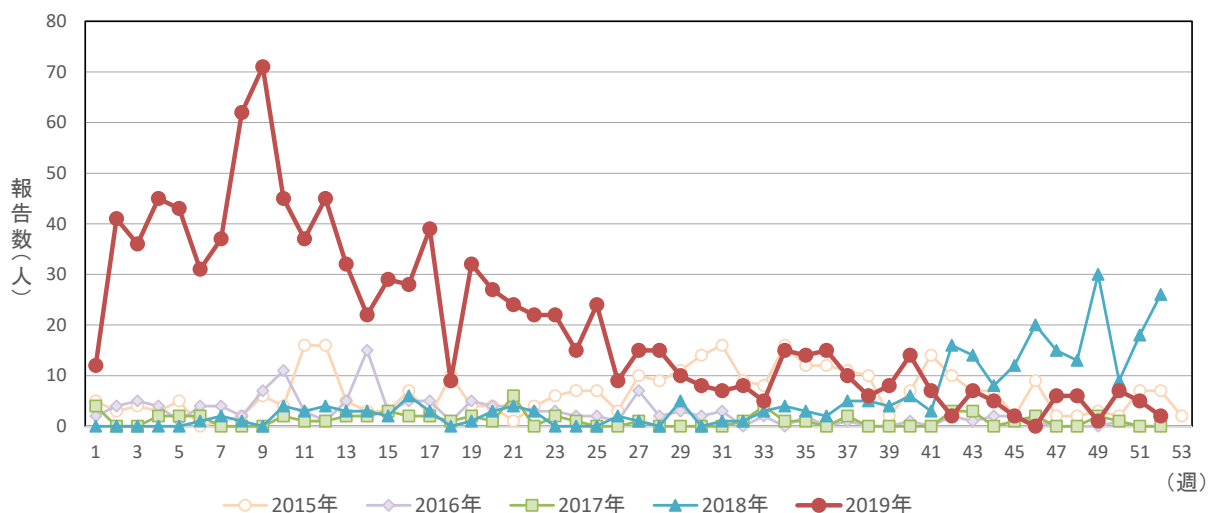
伝染性紅斑は、頬に出現する蝶翼状の紅斑を特徴とし、小児を中心にみられる流行性発疹性疾患である。両頬がリンゴのように赤くなることから、「リンゴ病」と呼ばれることもある。1月から7月にかけて報告数が増加し、9月頃最も少なくなるという流行パターンを呈する。

2019年沖縄県内の報告数は1,039人、定点あたり報告数は30.62人であり、過去10年で最も多い報告数であった。

沖縄県では、2019年第9週に定点あたり報告数が2.09となり、警報レベルの開始基準値2を上回った。その後、第13週に終息基準値1を下回り、徐々に終息していった。全国では警報レベルを上回ることにはなかった。

年齢階級別では、5歳が最も多く、全体の15.0%を占めており、次いで4歳が14.4%、6歳が12.0%と続いた。

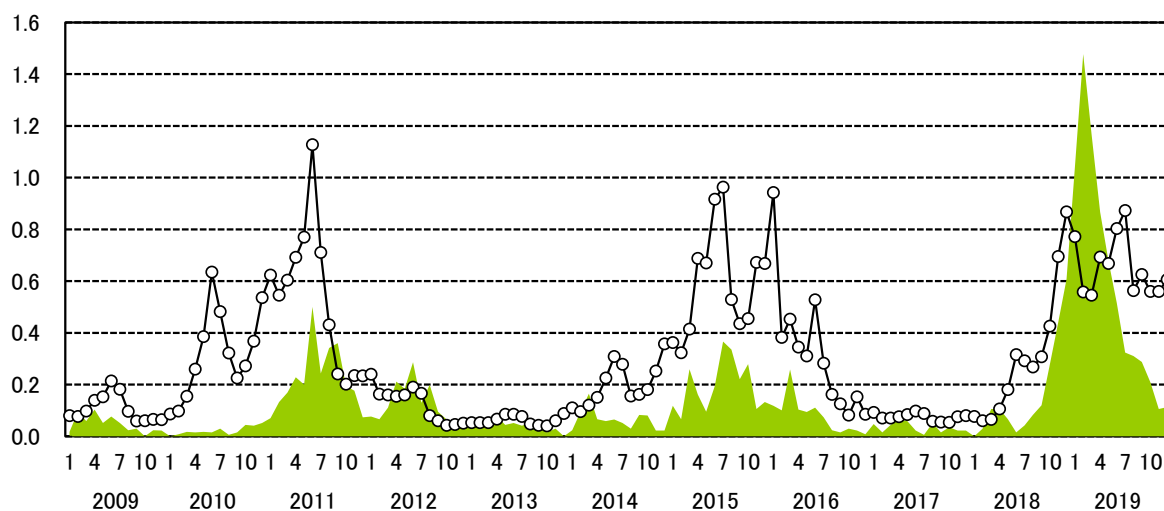
伝染性紅斑 過去5年の流行時期の比較



(人/定点)

年次別患者発生状況の推移

■ 沖縄県 ○ 全国

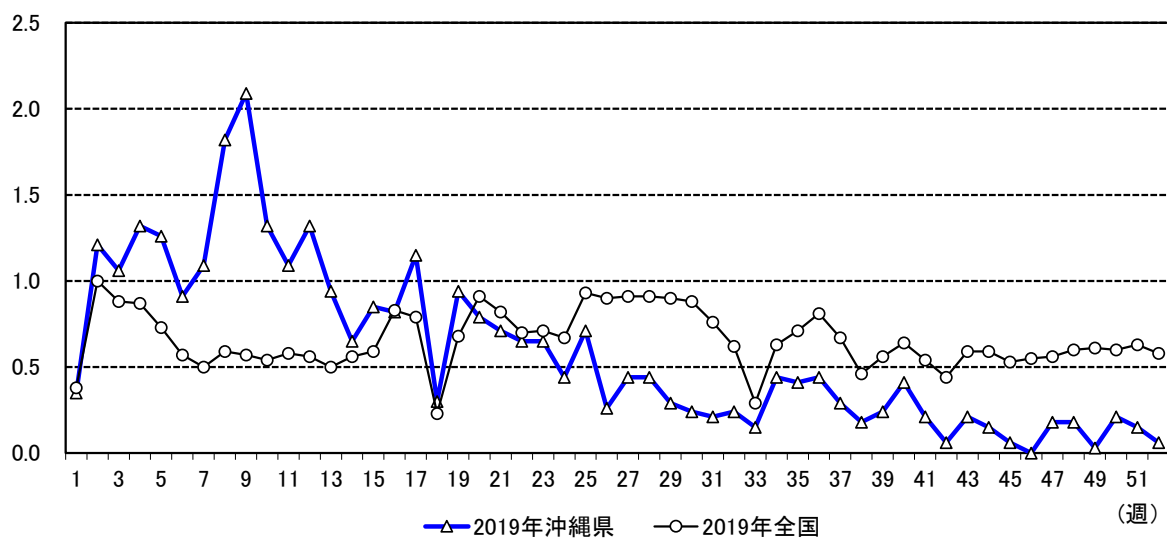


シーズン別の報告数合計： 伝染性紅斑

平均報告数	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年
372	352	138	60	269	1,039

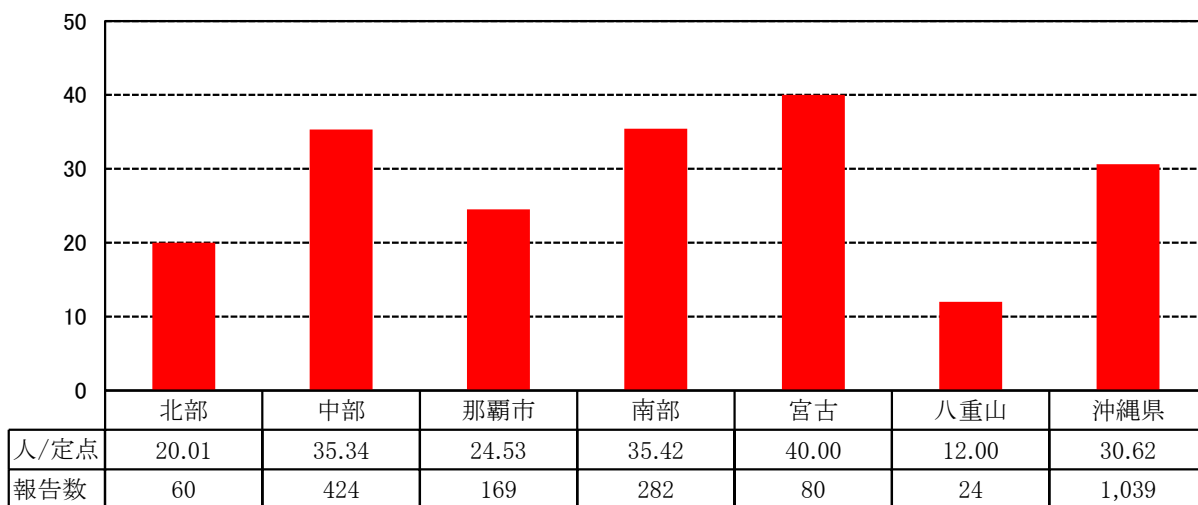
(人/定点)

伝染性紅斑 定点当たり報告数

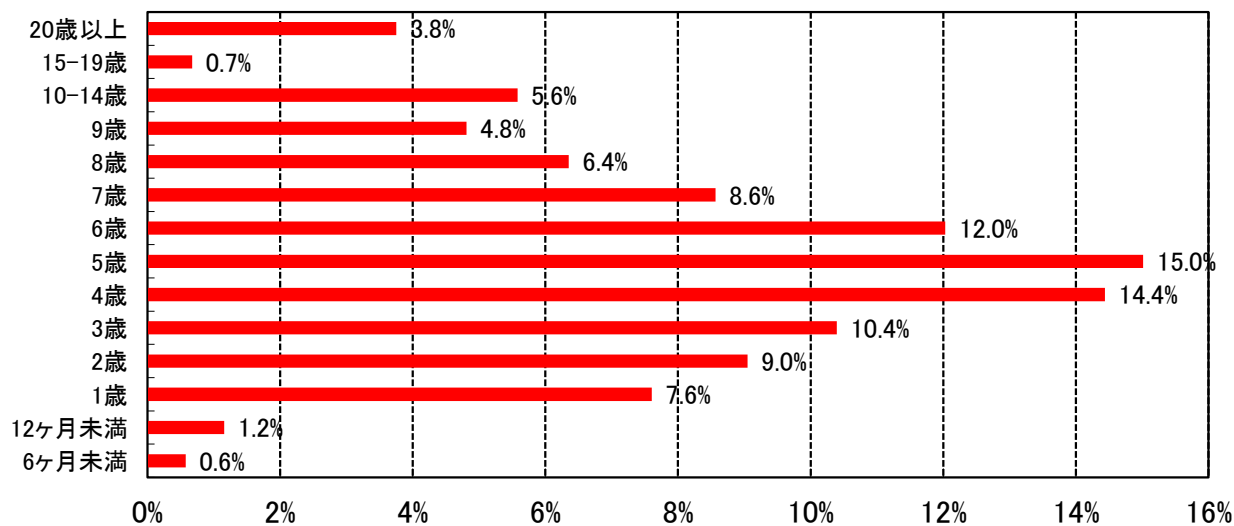


(人/定点)

保健所別発生状況（報告数及び定点あたり報告数）



年齢階級別割合（沖縄県）

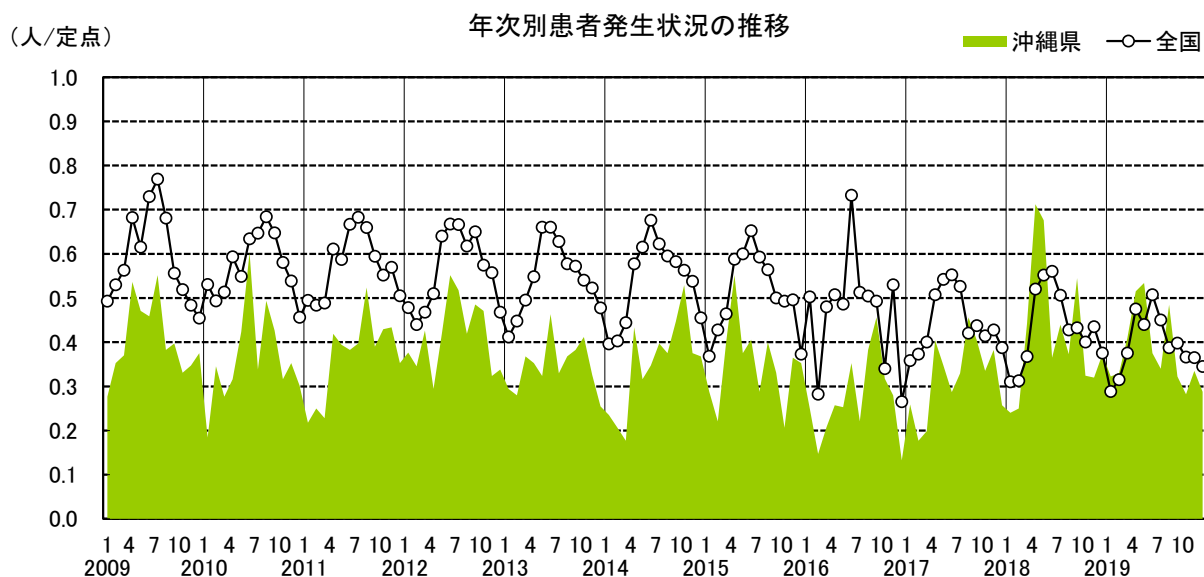
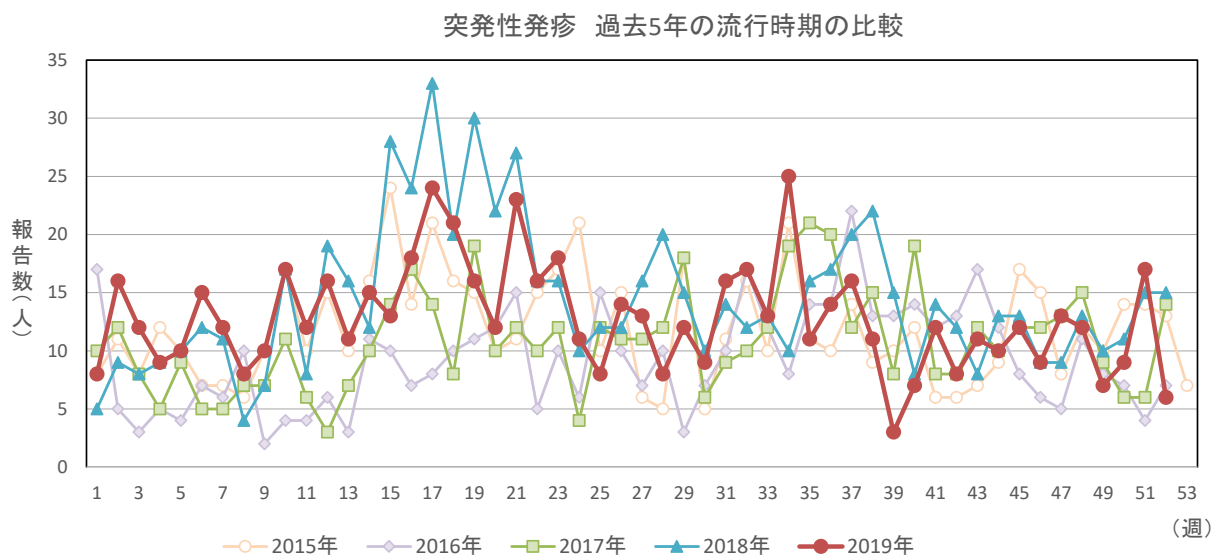


# ● 突発性発疹

突発性発疹は、乳児期に罹患することが多く、突然の高熱と解熱前後の発疹を特徴とするウイルス感染症で、予後は一般に良好である。原因ウイルスは、ヒトヘルペスウイルス6あるいは7であることが多い。

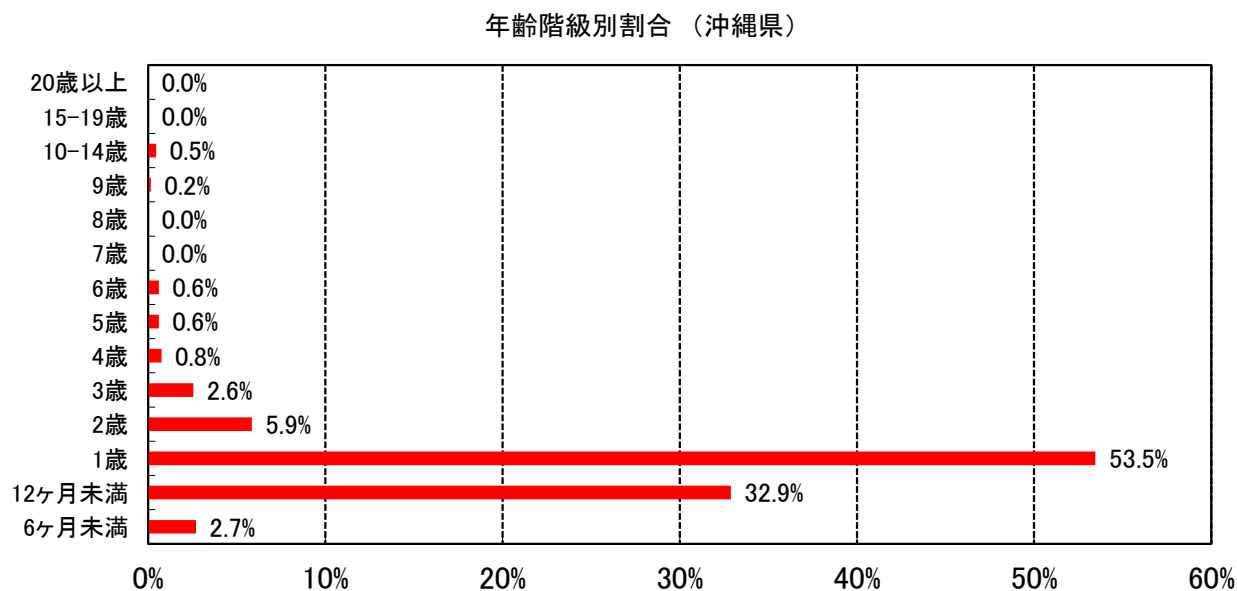
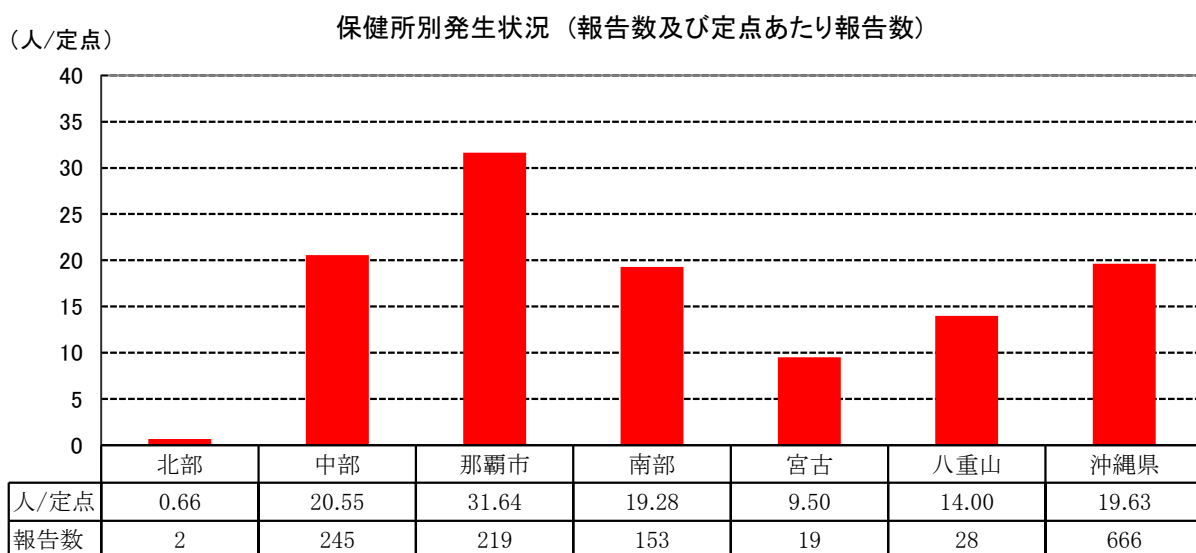
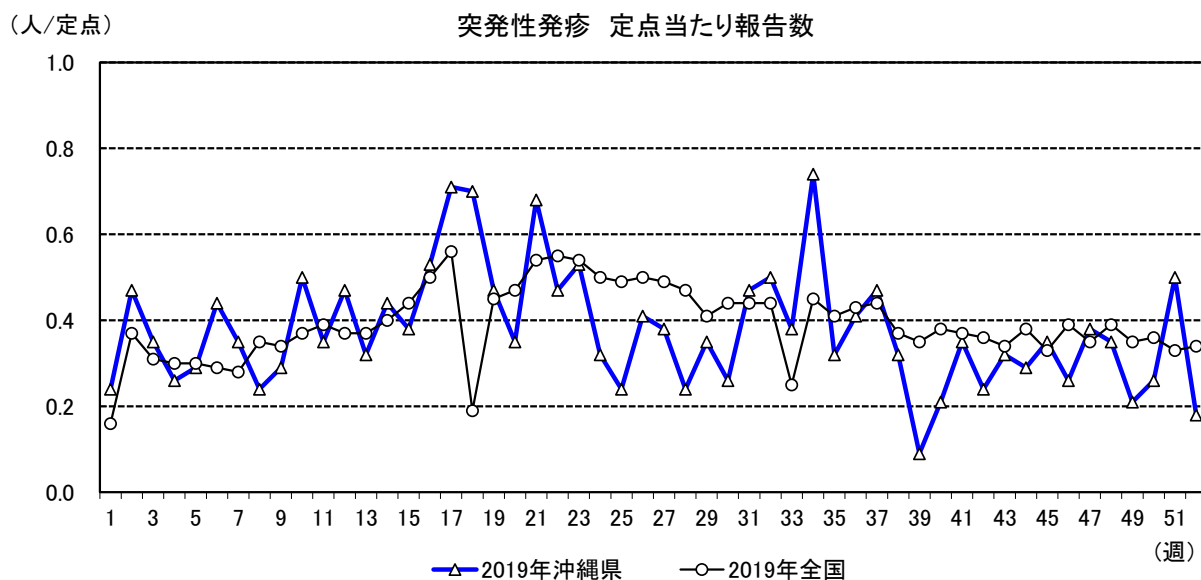
2019年沖縄県内の報告数は666人、定点当たり報告数は19.63人であった。

年齢階級別では、1歳が最も多く、全体の53.5%を占めた。



シーズン別の報告数合計： 突発性発疹

平均報告数	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年
618	632	480	565	747	666



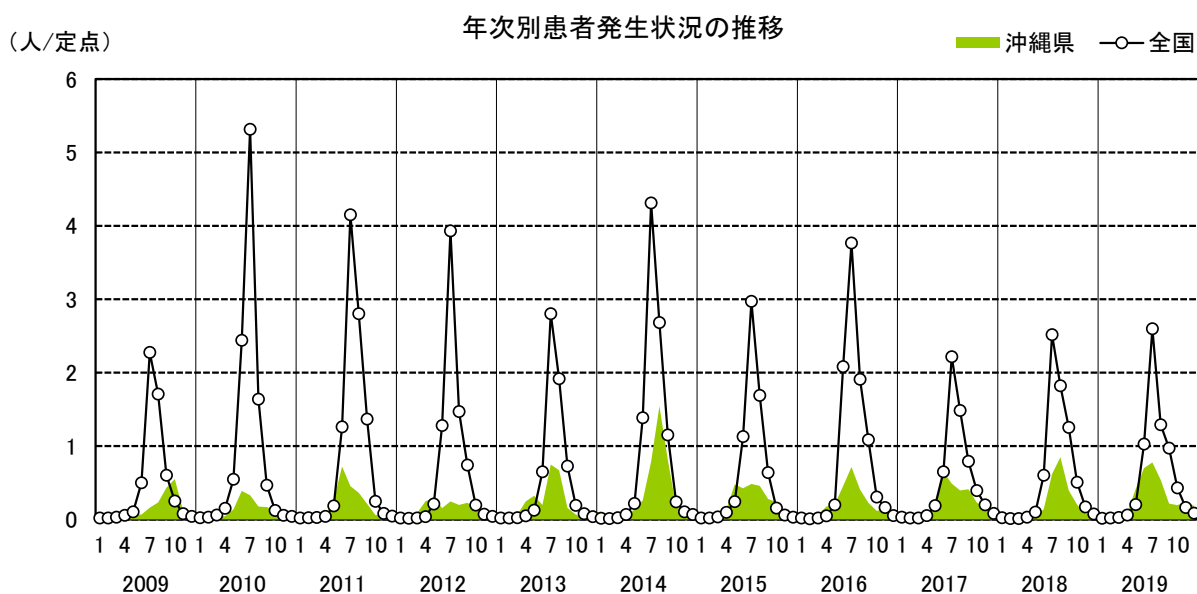
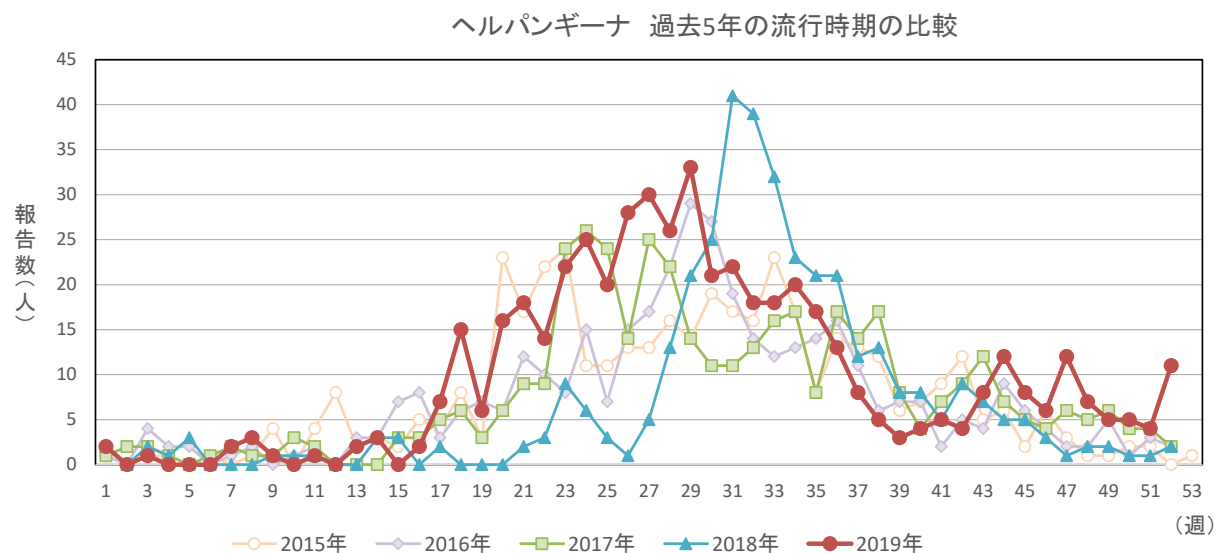
# ●ヘルパンギーナ

ヘルパンギーナは、エンテロウイルス属、特にコクサッキーウイルスA群を主原因とする感染症である。発熱と口腔粘膜の水疱性発疹を特徴とし、夏期に流行する夏かぜの代表的疾患である。

2019年沖縄県内の報告数は513人、定点当たり報告数は15.20人であった。

2019年は、沖縄県、全国ともに、警報レベルの開始基準値6を上回る週はなかった。

年齢階級別では、1歳の報告数が最も多く全体の39.2%、次いで12ヶ月未満が23.2%、2歳が13.5%と続いた。

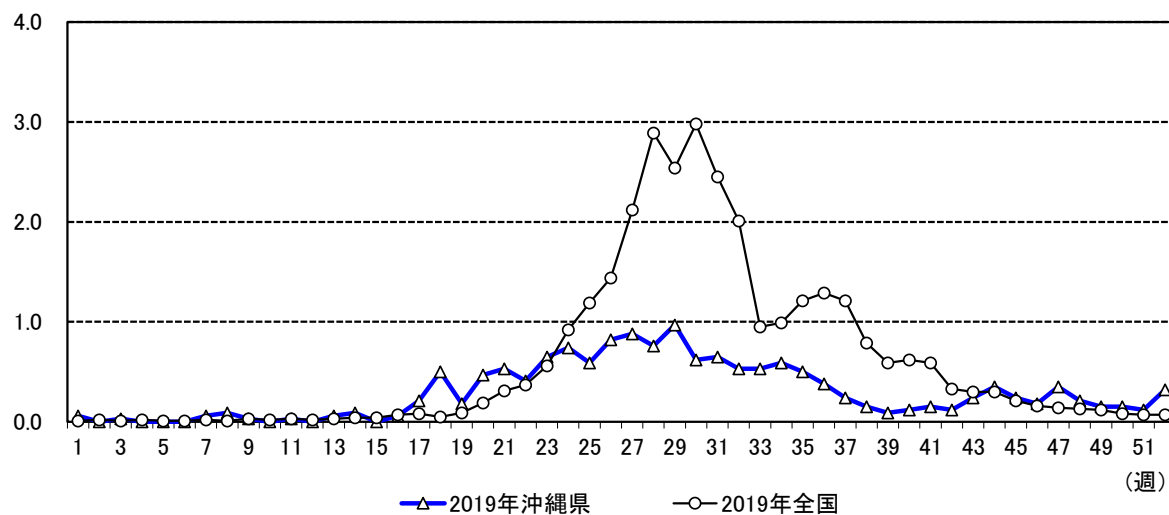


シーズン別の報告数合計： ヘルパンギーナ

平均報告数	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年
419	414	384	416	368	513

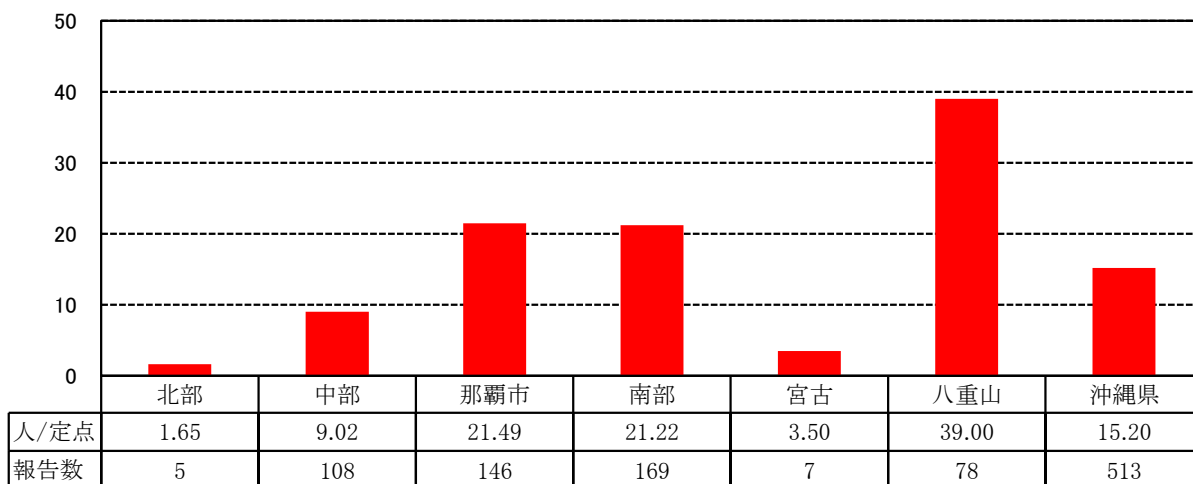
(人/定点)

ヘルパンギーナ 定点当たり報告数

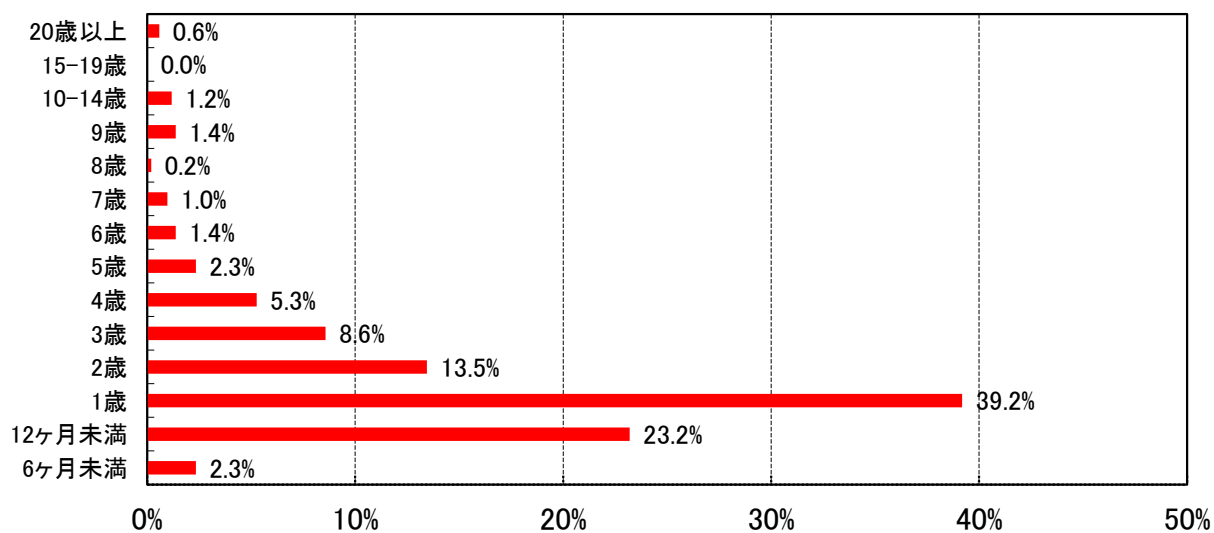


(人/定点)

保健所別発生状況（報告数及び定点あたり報告数）



年齢階級別割合（沖縄県）



# ●流行性耳下腺炎

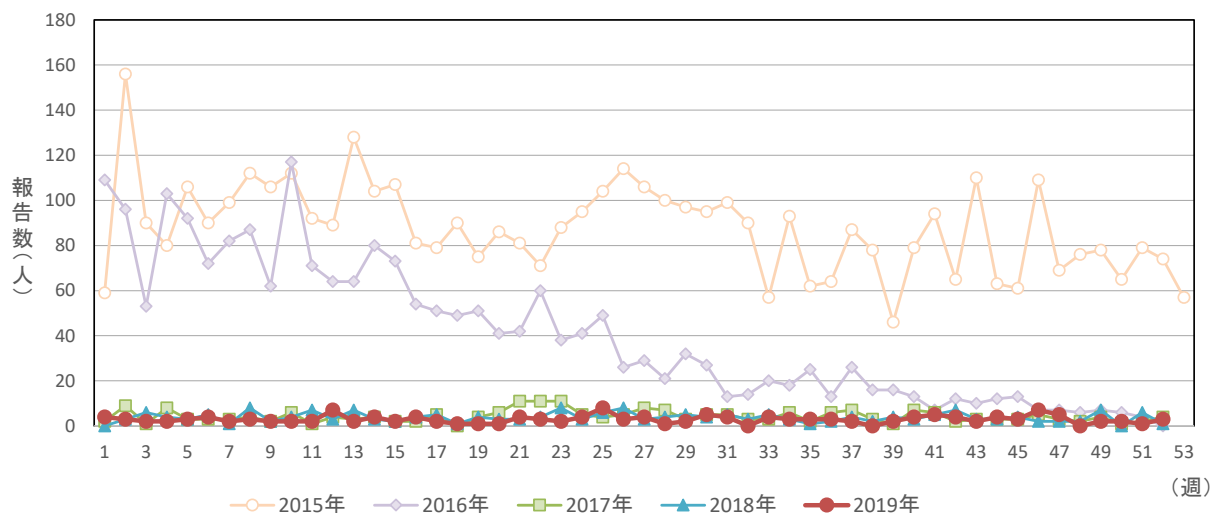
流行性耳下腺炎は、片側あるいは両側の唾液腺の腫脹を特徴とするムンプスウイルスによる感染症である。本疾患は全国でも毎年、3～4年周期での患者増加がみられており、本県でも概ね4年周期で増加が認められている。前回の増加期は2009年（2,295人）と2010年（3,530人）及び2015年（4,647人）と2016年（2,101人）であった。

2019年沖縄県内の報告数は152人、定点当たり報告数は4.56人であった。2015年以降は減少傾向にあり、2019年は過去10年で最も報告数が少なかった。

2019年は、沖縄県、全国ともに、警報レベルの基準値を上回る週はなかった。

年齢別では、10歳未満が多く、全体の82.4%を占めていた。また、20歳以上は全体の5.9%であった。

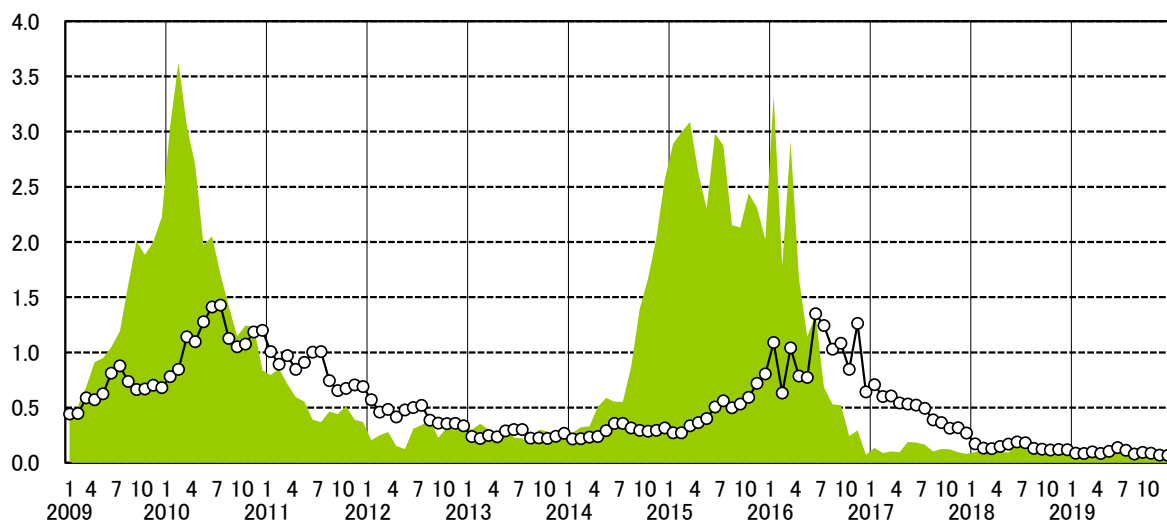
流行性耳下腺炎 過去5年の流行時期の比較



(人/定点)

年次別患者発生状況の推移

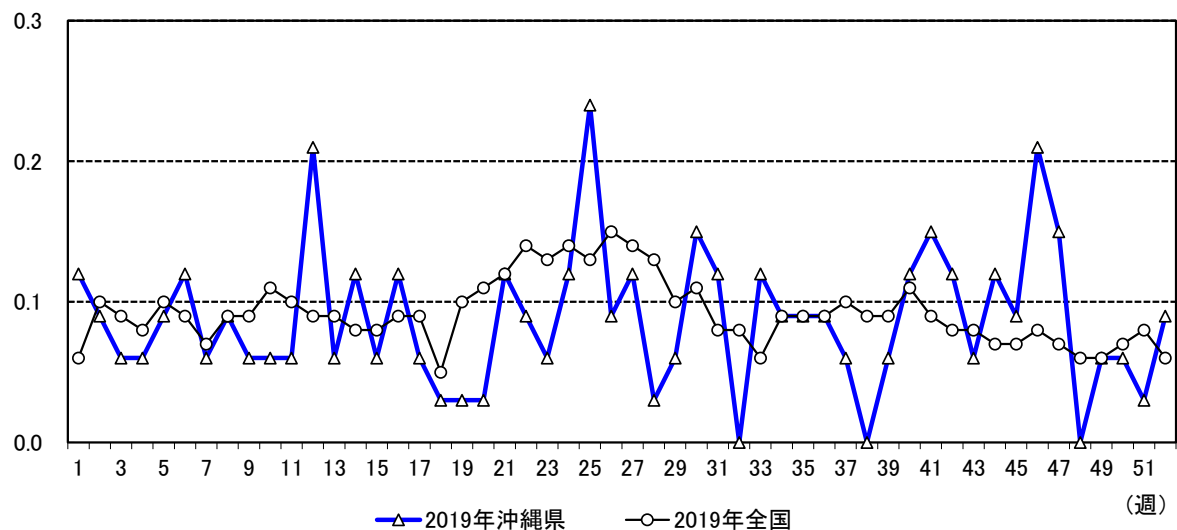
■ 沖縄県 ○ 全国



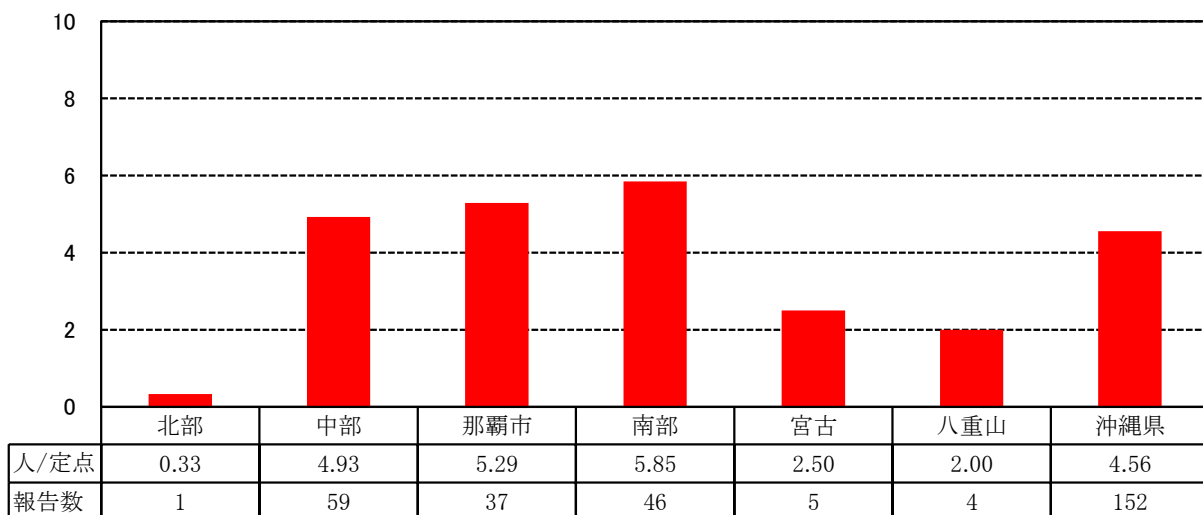
シーズン別の報告数合計： 流行性耳下腺炎

平均報告数	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年
1,464	4,647	2,101	223	197	152

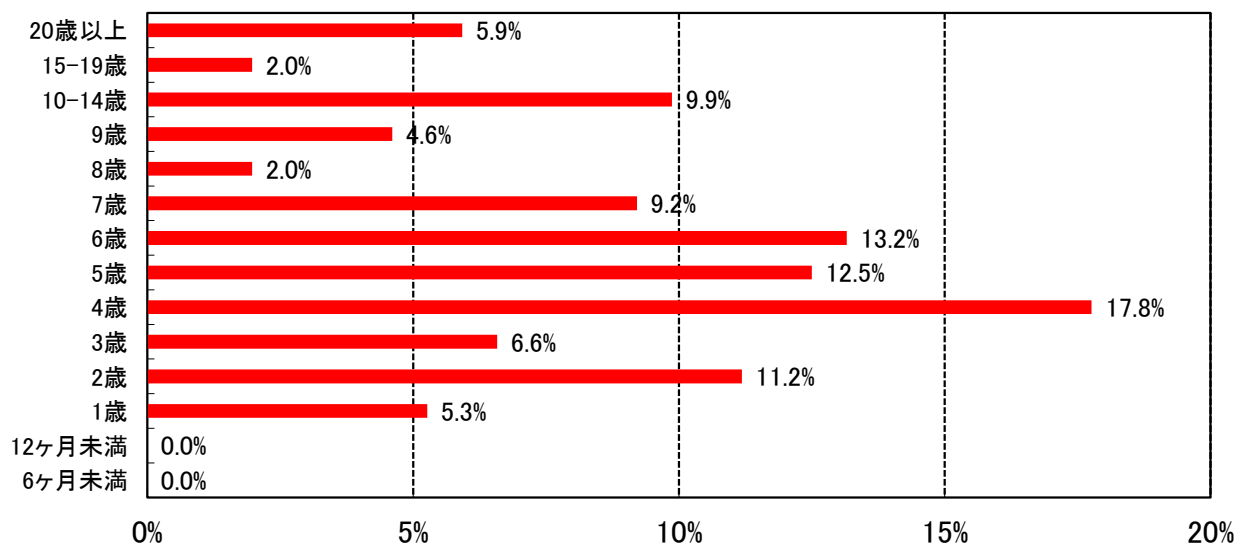
(人/定点) 流行性耳下腺炎 定点当たり報告数



(人/定点) 保健所別発生状況（報告数及び定点あたり報告数）



年齢階級別割合（沖縄県）



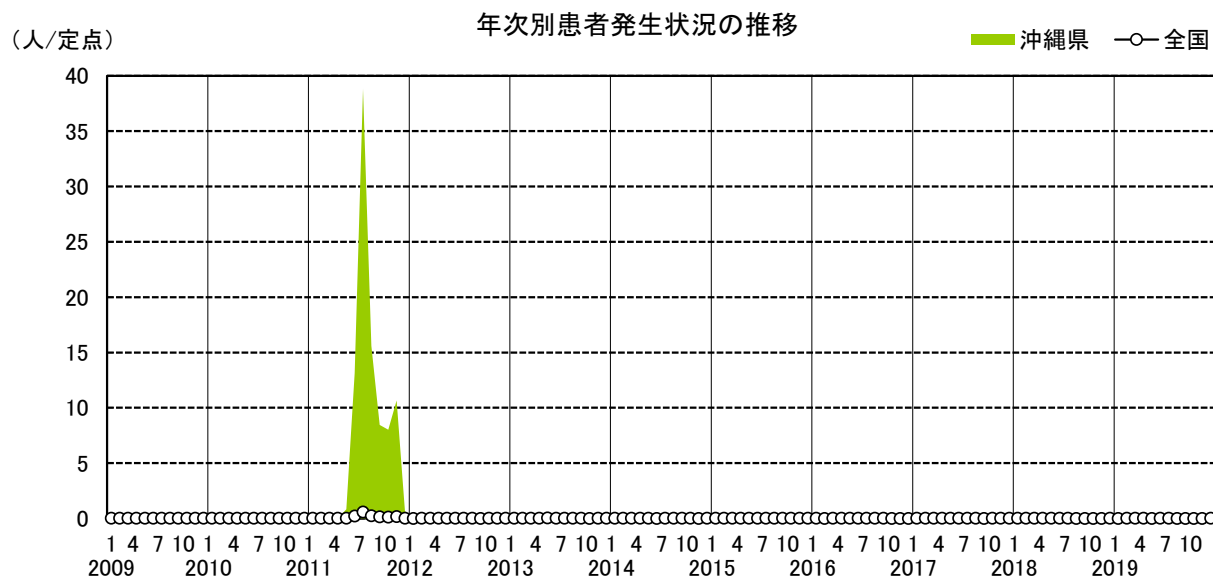
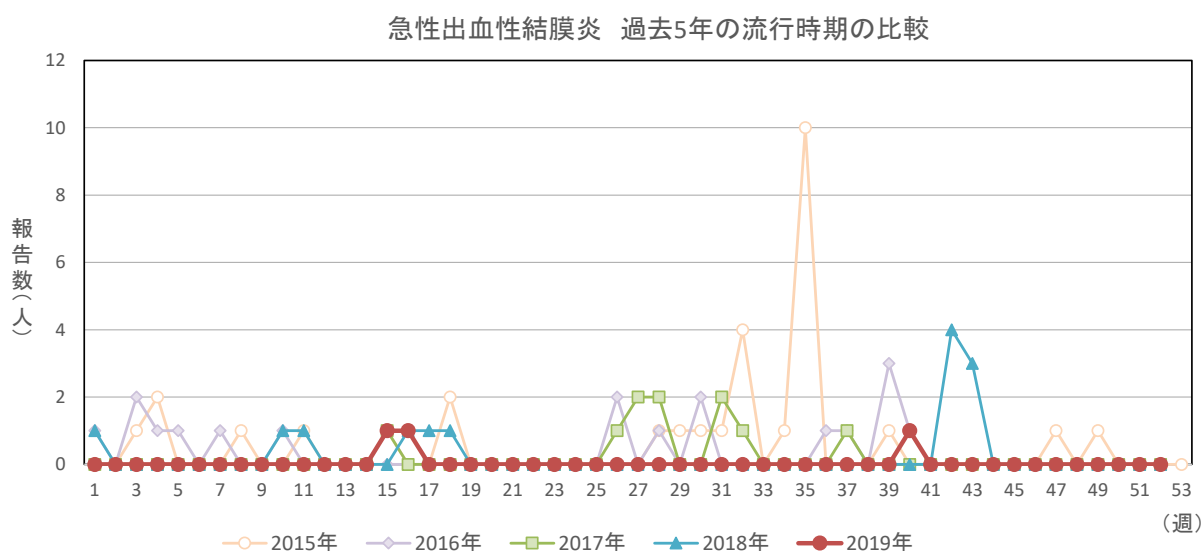
## (2) 眼科定点

### ●急性出血性結膜炎

急性出血性結膜炎（AHC）は、エンテロウイルス70型（EV70）とコクサッキーウイルスA24変異型（CA24v）を主要原因とする激しい出血症状を伴う結膜炎である。県内では2011年夏に流行した。

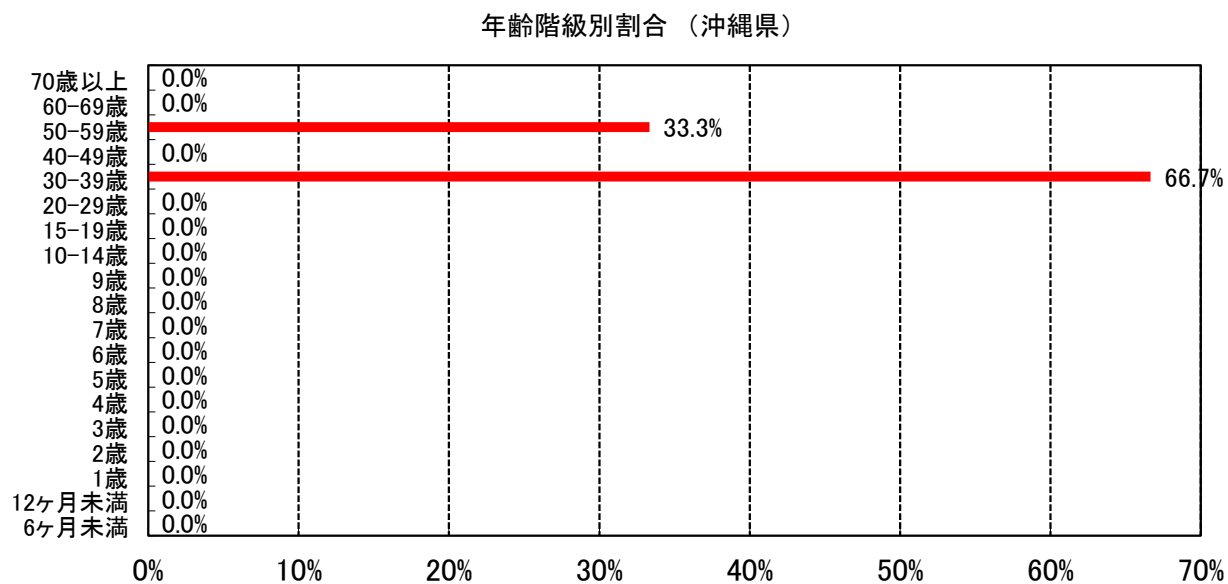
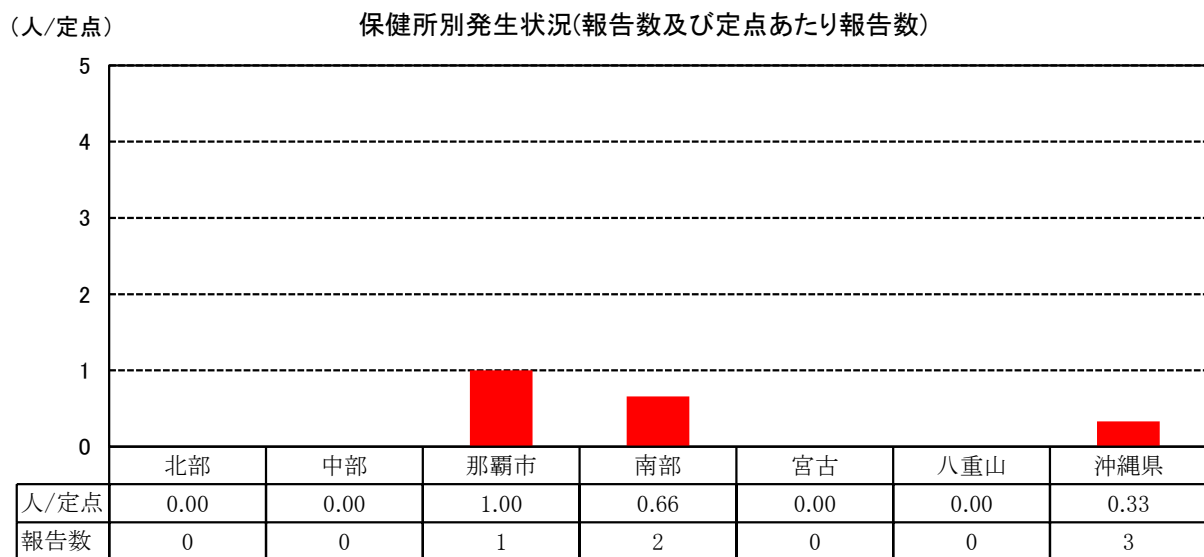
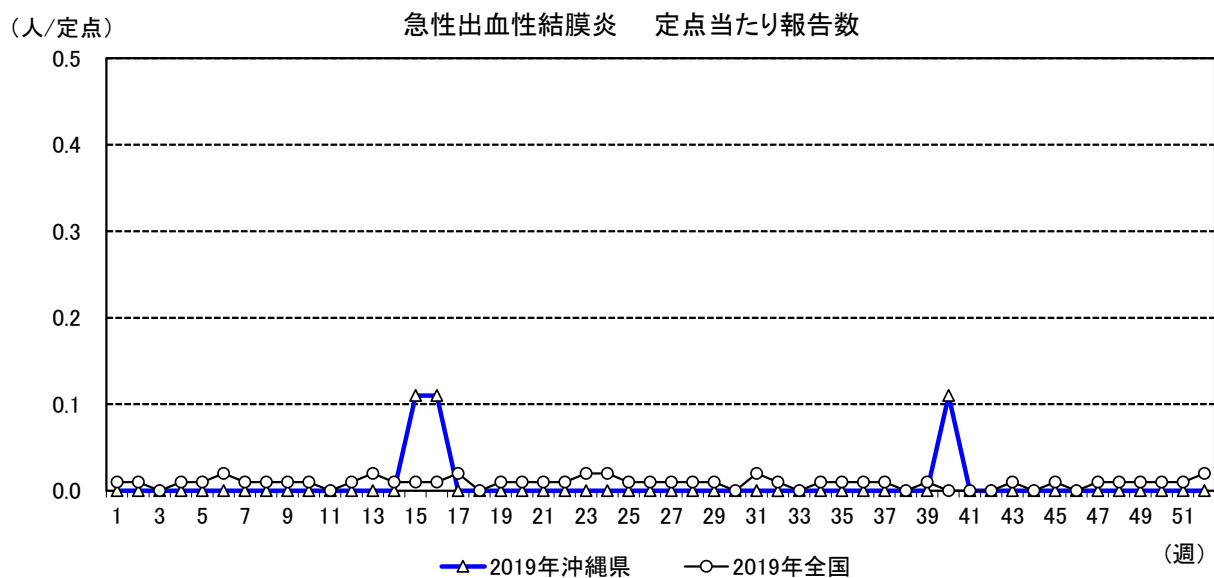
2019年沖縄県内の報告数は3人、定点当たり報告数は0.33人であり、過去10年で最も少なかった。2019年は、沖縄県、全国ともに、警報レベルの開始基準値1を上回る週はなかったが、保健所別では、第15週に那覇市で警報レベルの開始基準値を上回った。

年齢別では、30-39歳の報告数が最も多く、全体の66.7%を占めていた。



シーズン別の報告数合計： 急性出血性結膜炎

平均報告数	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年
15	30	18	10	13	3

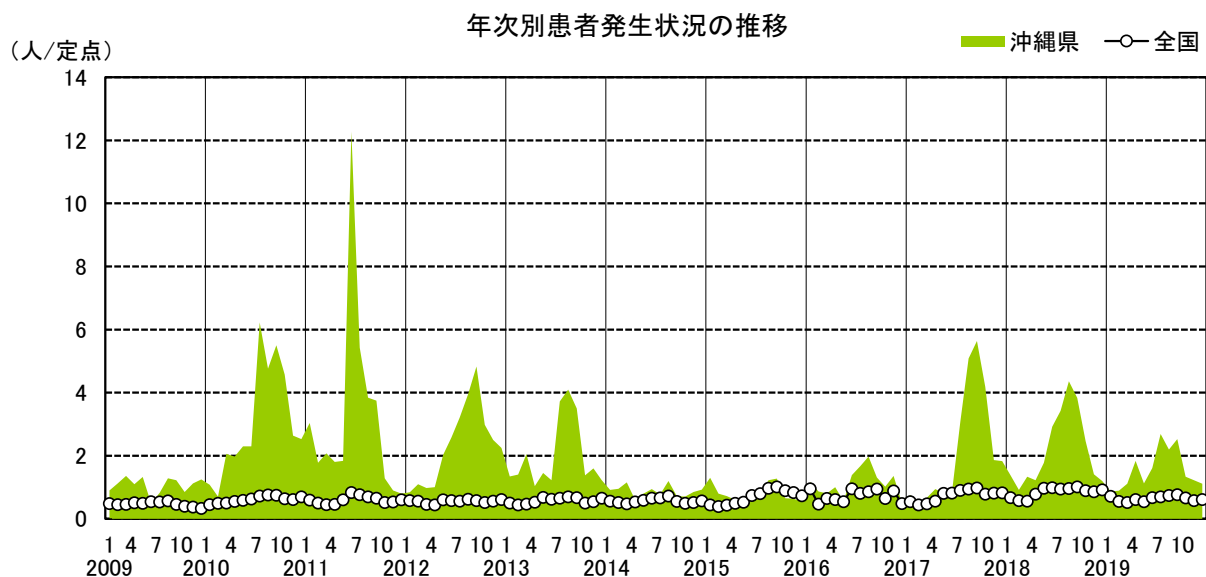
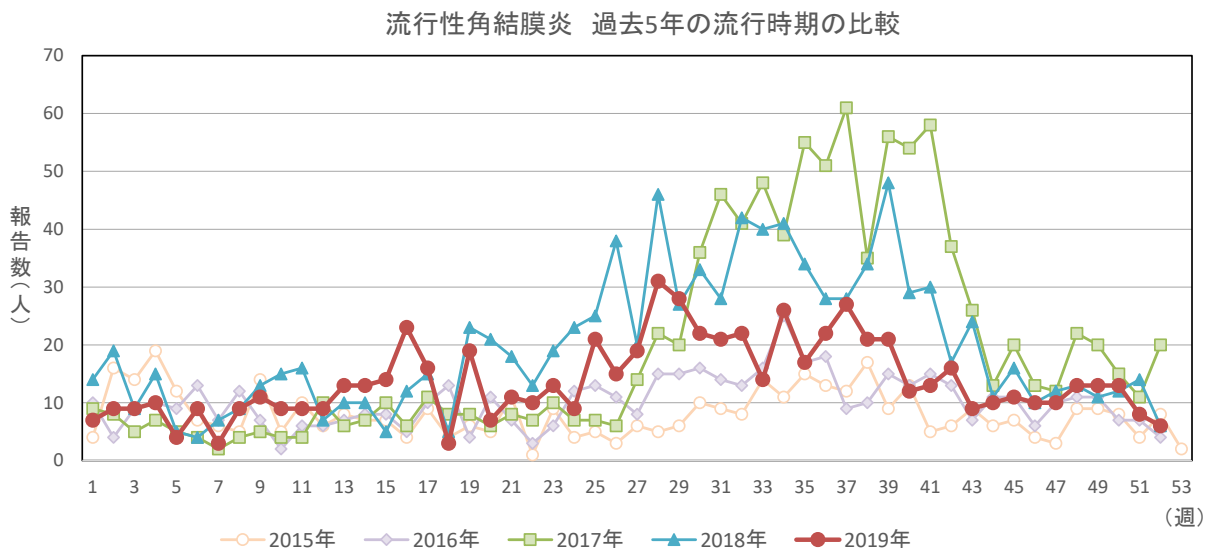


●流行性角結膜炎

流行性角結膜炎（EKF）は、アデノウイルスD種の8、19、37型等を原因ウイルスとし、流涙（なみだ目）・充血・眼脂（めやに）を主症状とする。家庭内、職場、病院などの人が濃密に接触する場所で流行しやすいとされている。

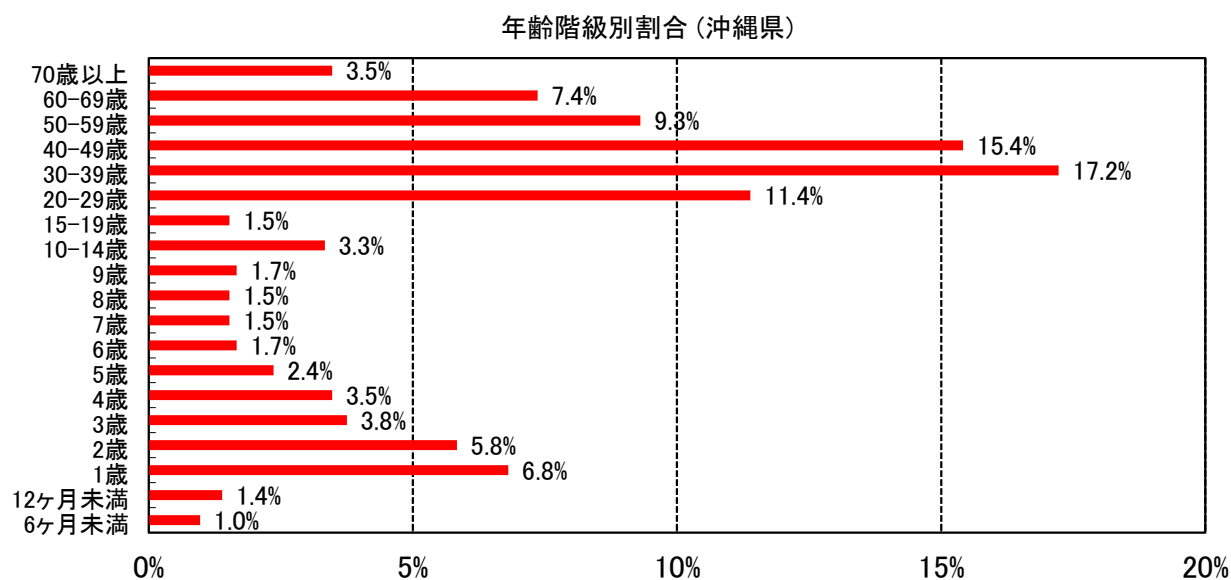
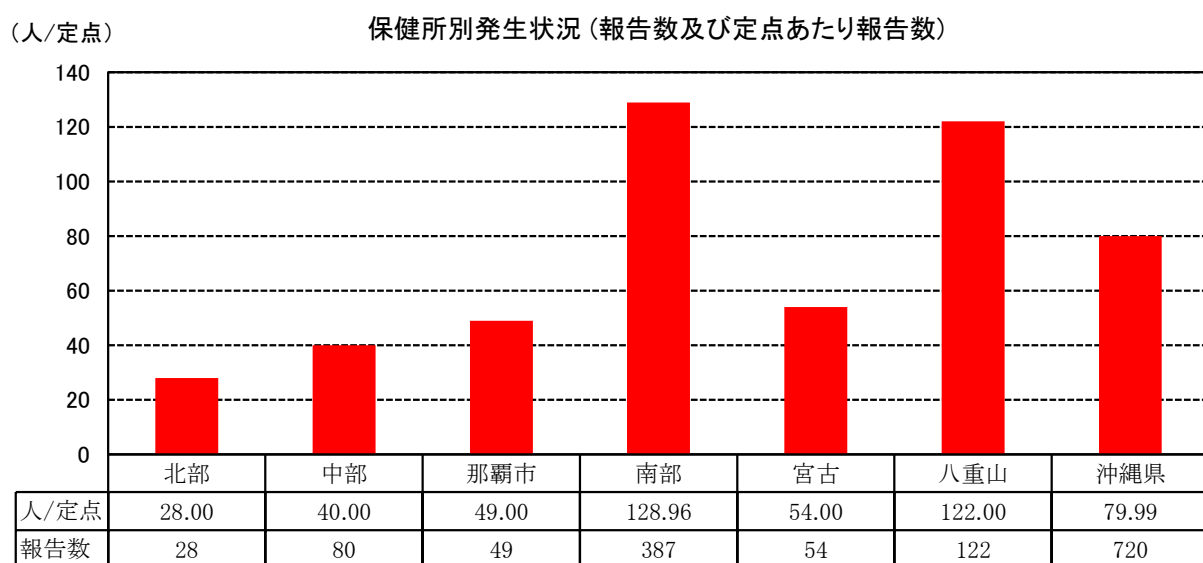
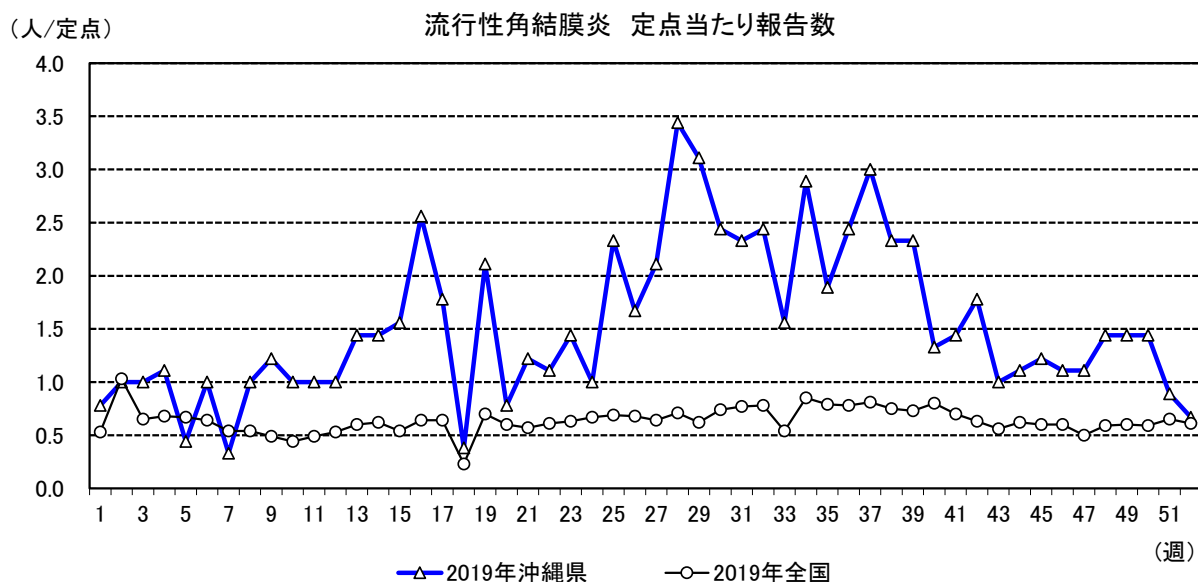
2019年沖縄県内の報告数は720人、定点当たり報告数は79.99人であった。2019年は、沖縄県、全国ともに、警報レベルの開始基準値8を上回った週はなかった。

年齢階級別では、乳児から高齢者まで幅広く報告された。



シーズン別の報告数合計： 流行性角結膜炎

平均報告数	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年
744	429	530	1,019	1,024	720



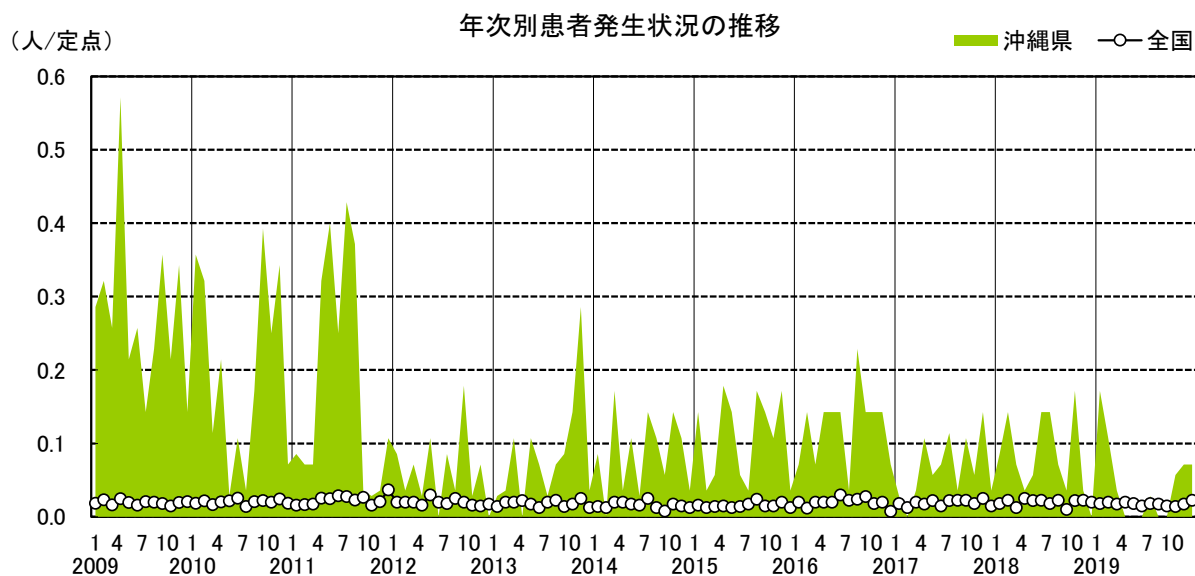
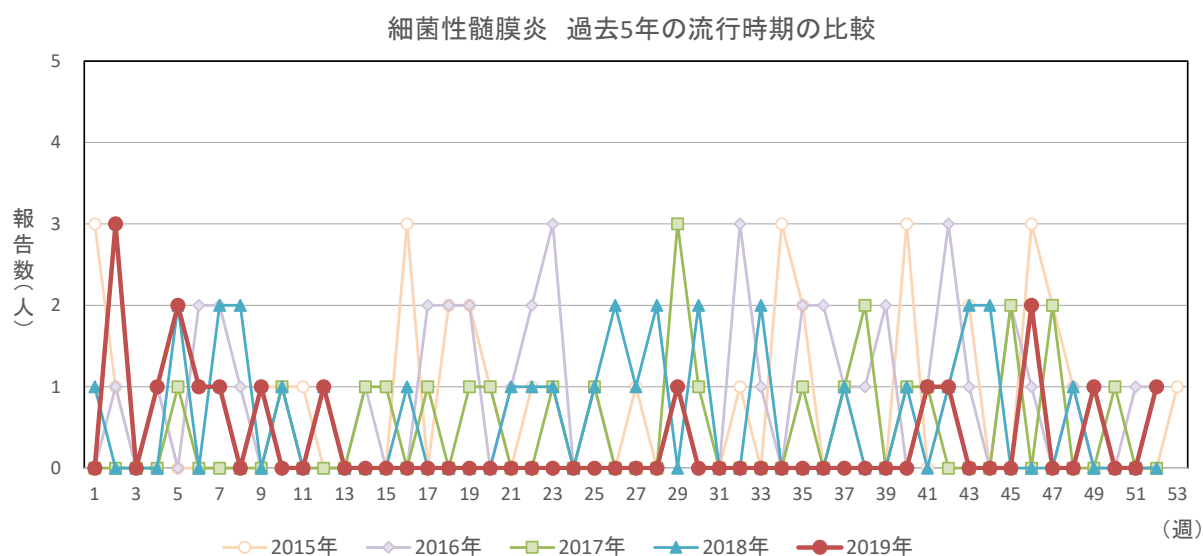
### (3) 基幹定点

#### ●細菌性髄膜炎

細菌性髄膜炎は、種々の細菌感染による髄膜炎の総称であり、多くは発熱、頭痛、嘔吐を主症状とし、進行すると意識障害や痙攣がみられる。季節性はなく、原因菌はインフルエンザ菌、肺炎球菌が多い。

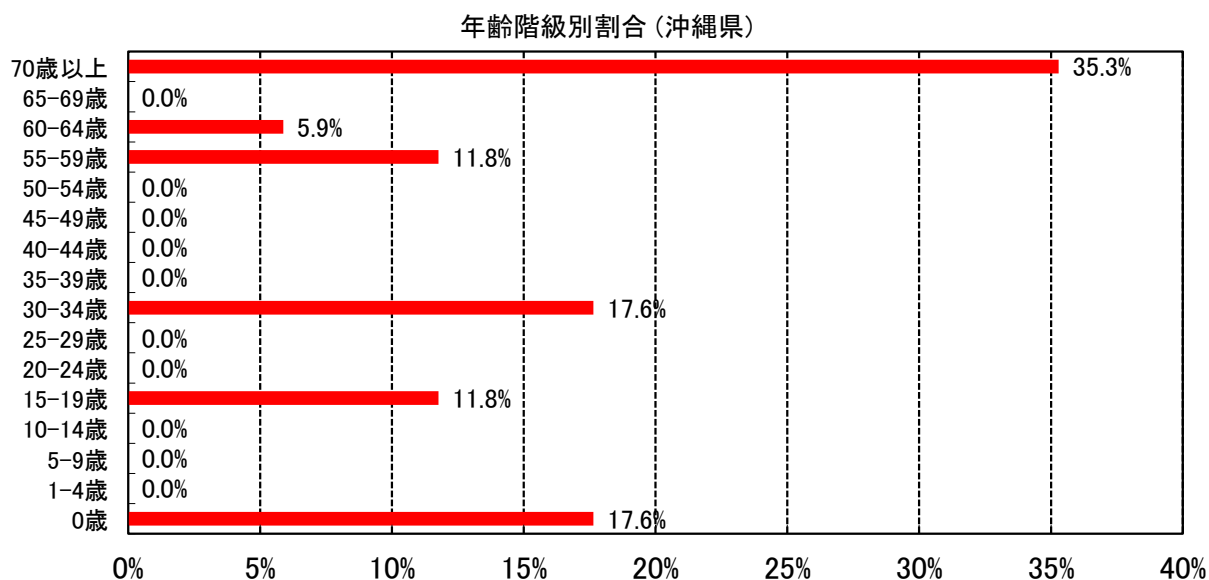
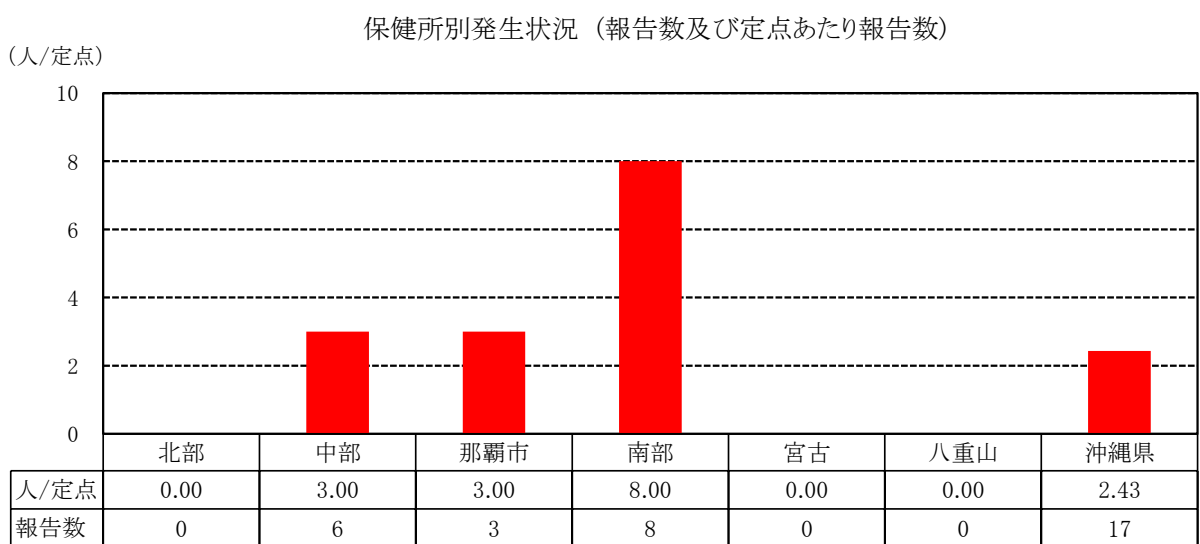
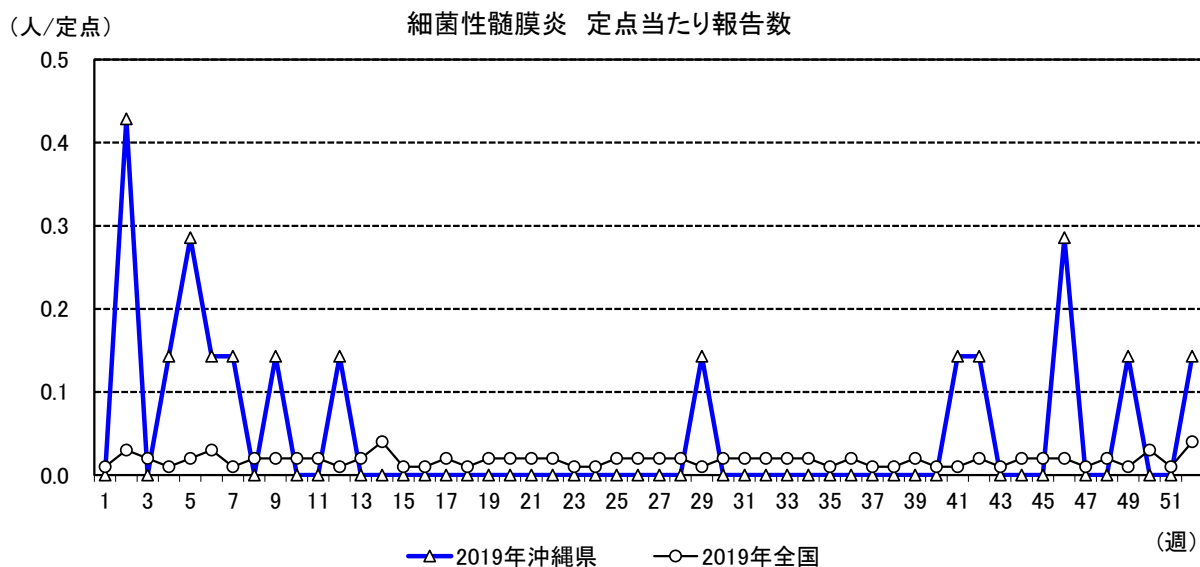
2019年沖縄県内の報告数は17人、定点当たり報告数は2.43人であり、過去10年で最も少なかった。

年齢階級別では、70歳以上の報告数が最も多く全体に占める割合が35.3%であり、次いで0歳と30-34歳の17.6%が続いた。



シーズン別の報告数合計： 細菌性髄膜炎

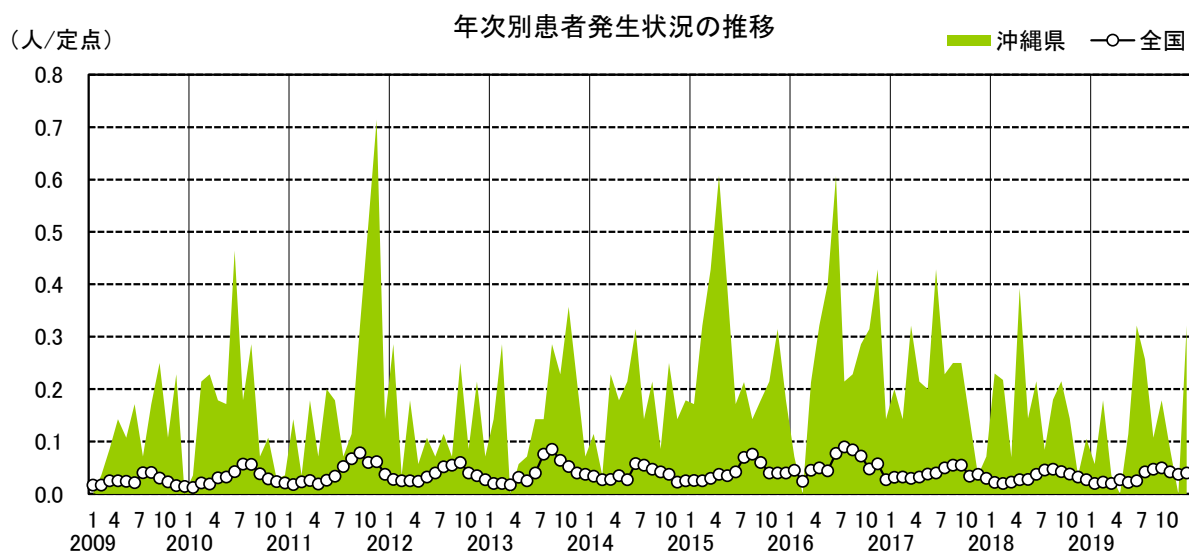
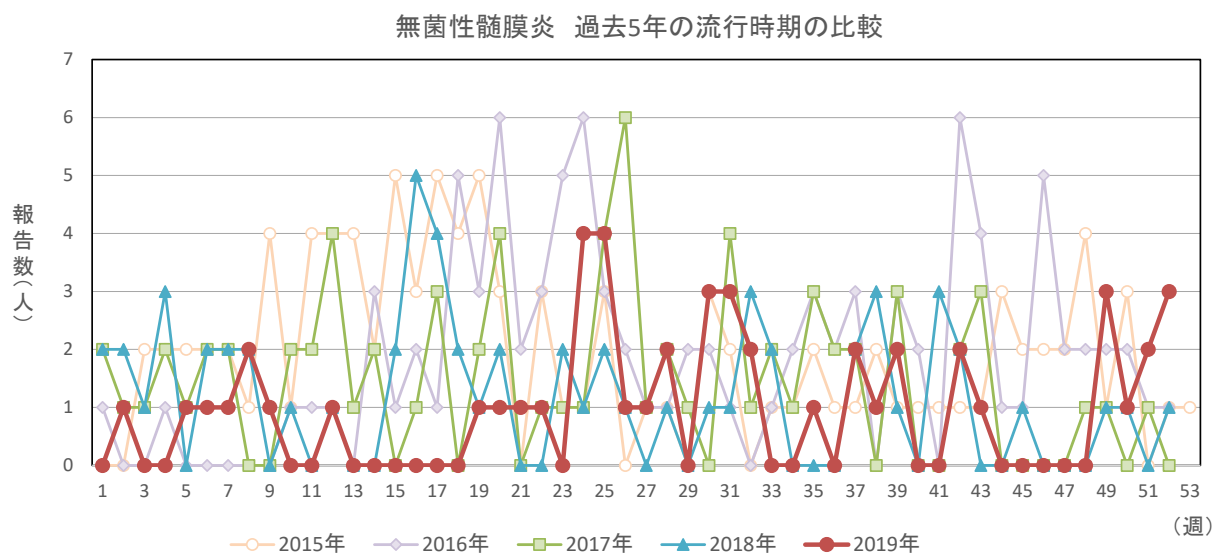
平均報告数	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年
32	40	46	24	31	17



# ●無菌性髄膜炎

無菌性髄膜炎は、多種多様な起因病原体があるが、全体の85%がエンテロウイルスによるものである。通常、発熱、嘔吐、頭痛を主症状とする。

2019年沖縄県内の報告数は50人、定点当たり報告数は7.14人であり、過去5年間の報告数は最も少なかった。また、北部、宮古、八重山保健所管内からの報告はなかった。年齢階級別の患者報告数では、幅広い年代で報告があった。

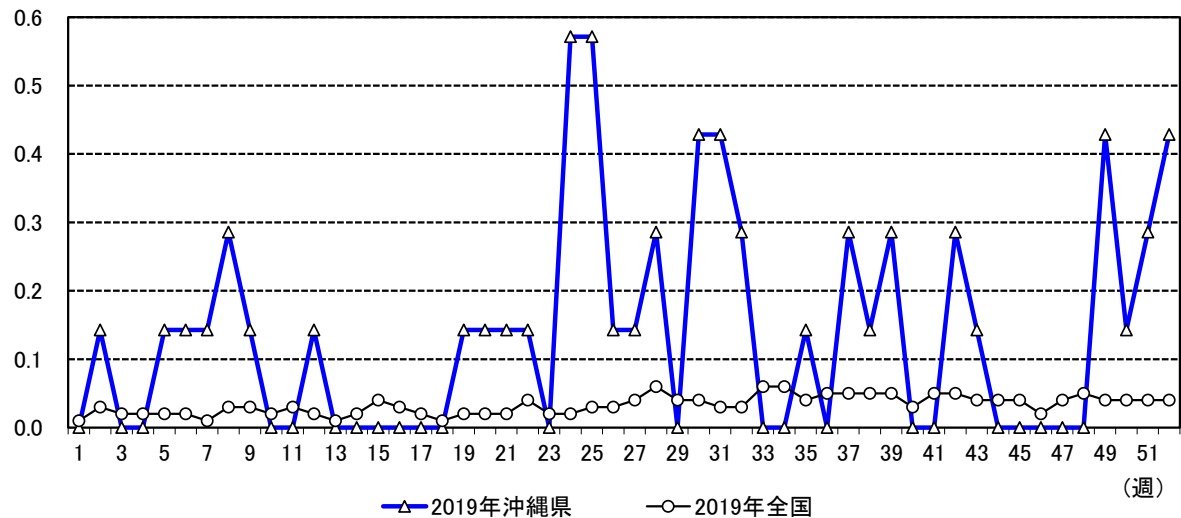


シーズン別の報告数合計： 無菌性髄膜炎

平均報告数	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年
77	102	97	75	61	50

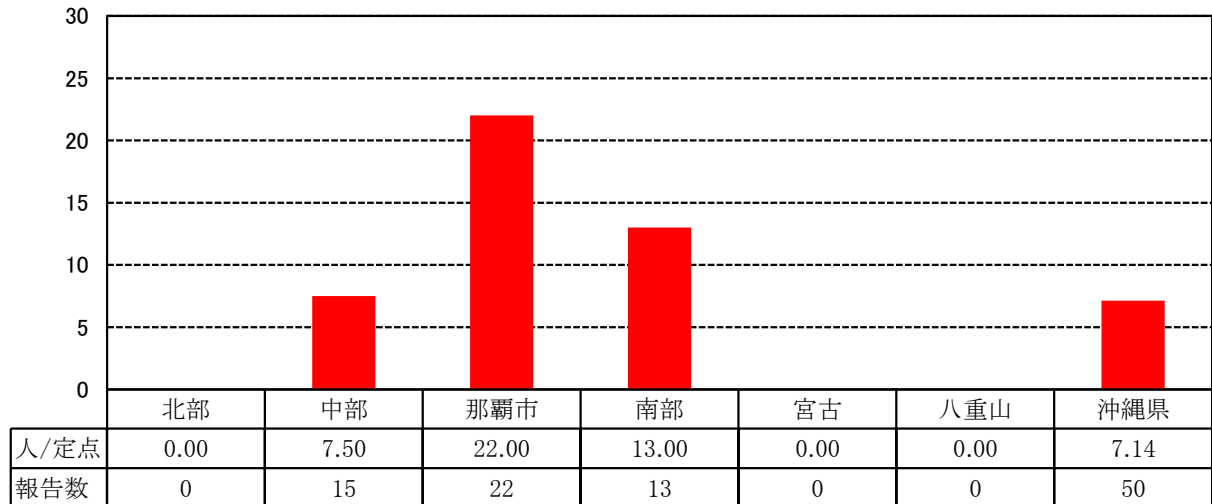
(人/定点)

無菌性髄膜炎 定点当たり報告数

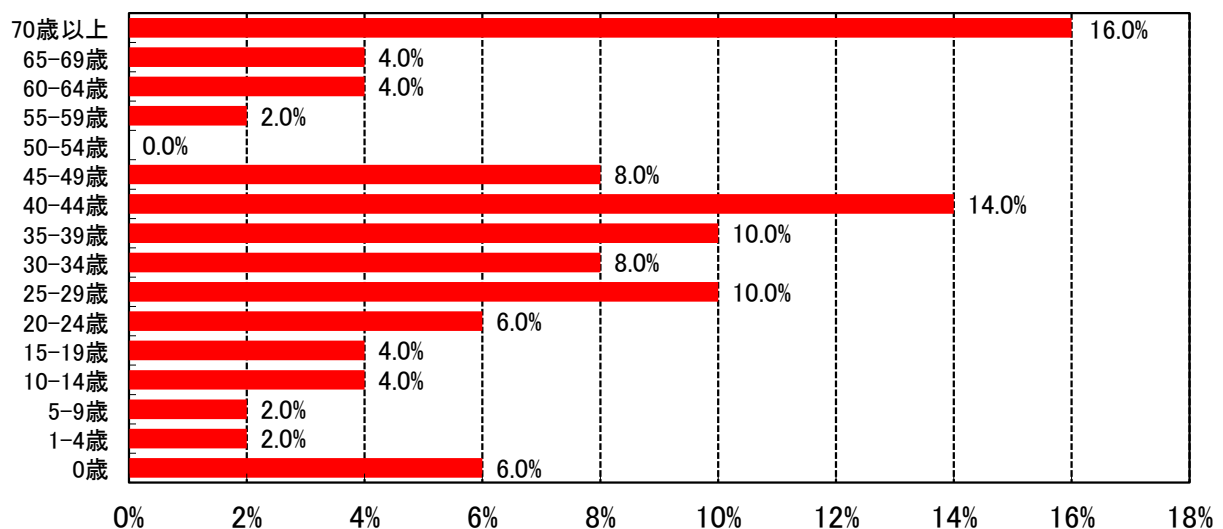


(人/定点)

保健所別発生状況（報告数及び定点あたり報告数）



年齢階級別割合（沖縄県）



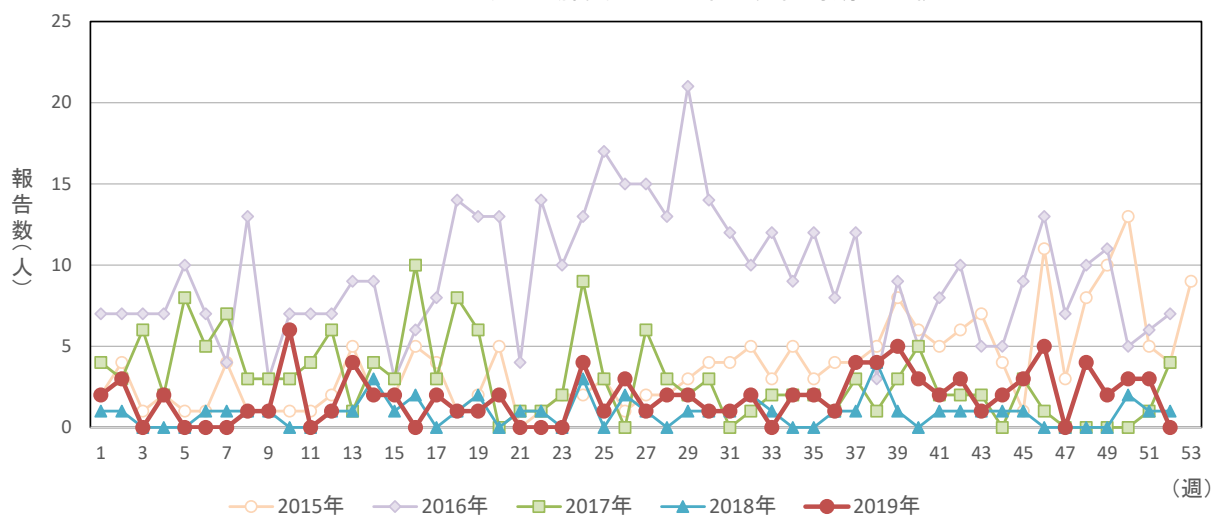
# ●マイコプラズマ肺炎

マイコプラズマ肺炎は、肺炎マイコプラズマによる呼吸器感染症である。晩秋から早春にかけて報告数が多くなり、罹患年齢は幼児期、学童期、青年期が中心である。感染の拡大は通常閉鎖集団などでみられるが、学校などでの短時間での暴露による感染拡大の可能性は高くなく、友人間での濃厚接触によるものとされている。

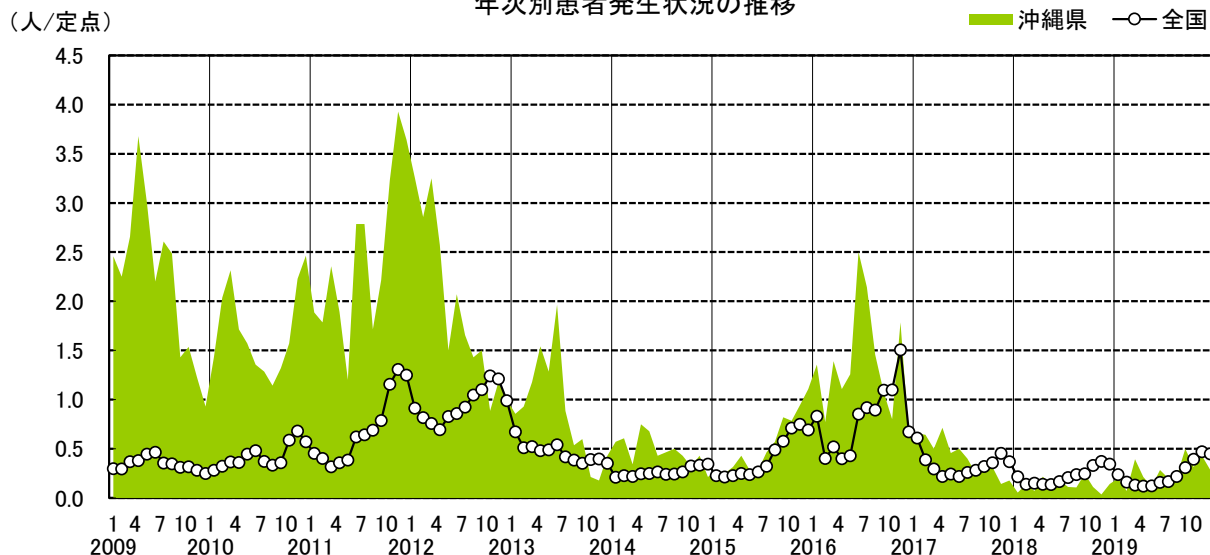
2019年沖縄県内の報告数は96人、定点当たり報告数は13.71人であった。保健所別では那覇市が41人、中部が46人であり、2つの管内で県全体の90%を占めた。

年齢階級別では、5-9歳の32.3%が最も多く、次いで1-4歳の28.1%、10-14歳の13.5%と続いた。

マイコプラズマ肺炎 過去5年の流行時期の比較



年次別患者発生状況の推移

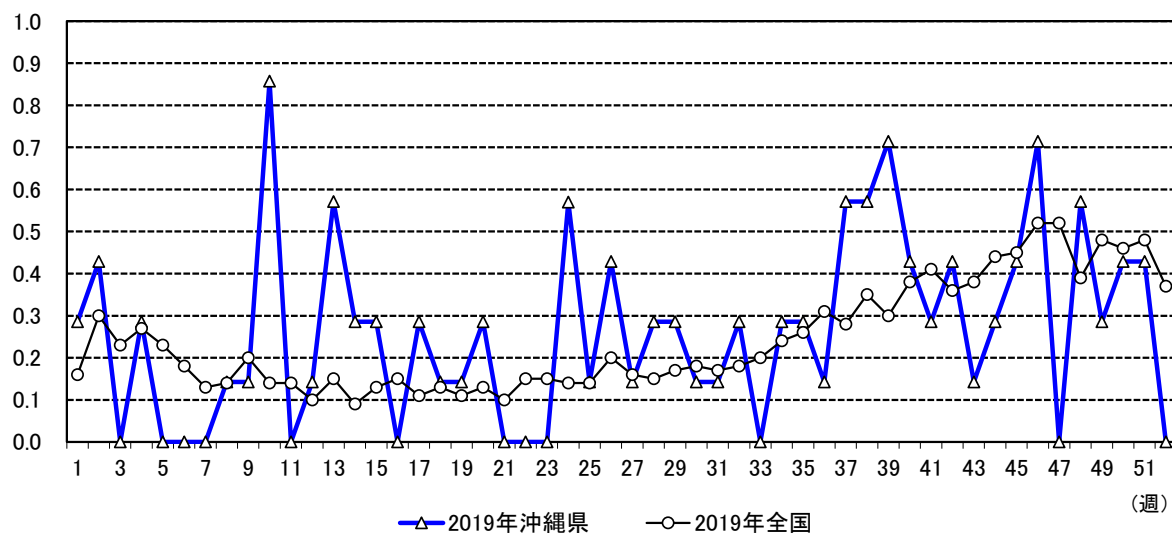


シーズン別の報告数合計： マイコプラズマ肺炎

平均報告数	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年
197	200	486	154	47	96

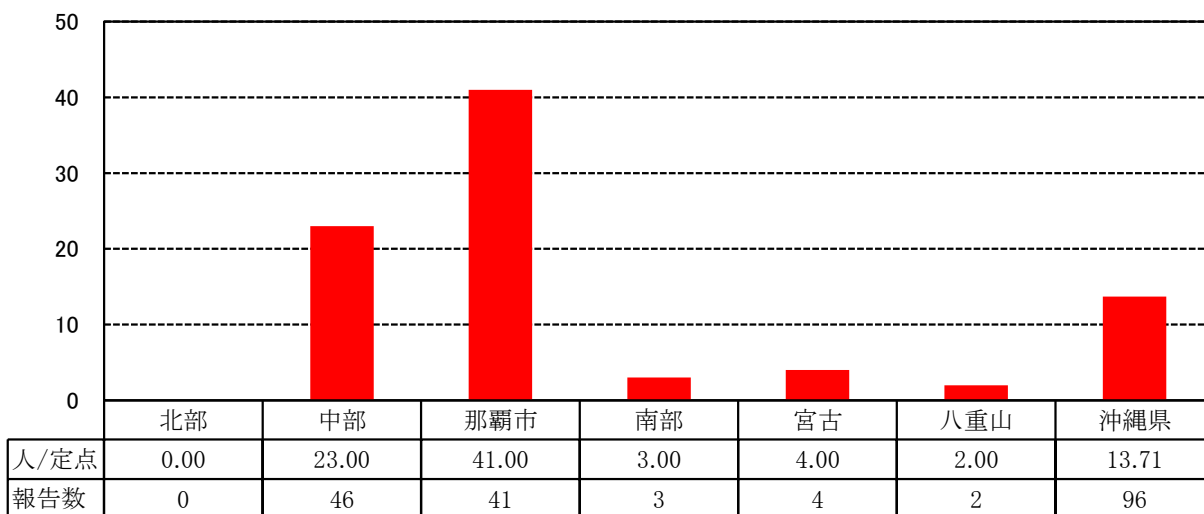
(人/定点)

マイコプラズマ肺炎 定点当たり報告数

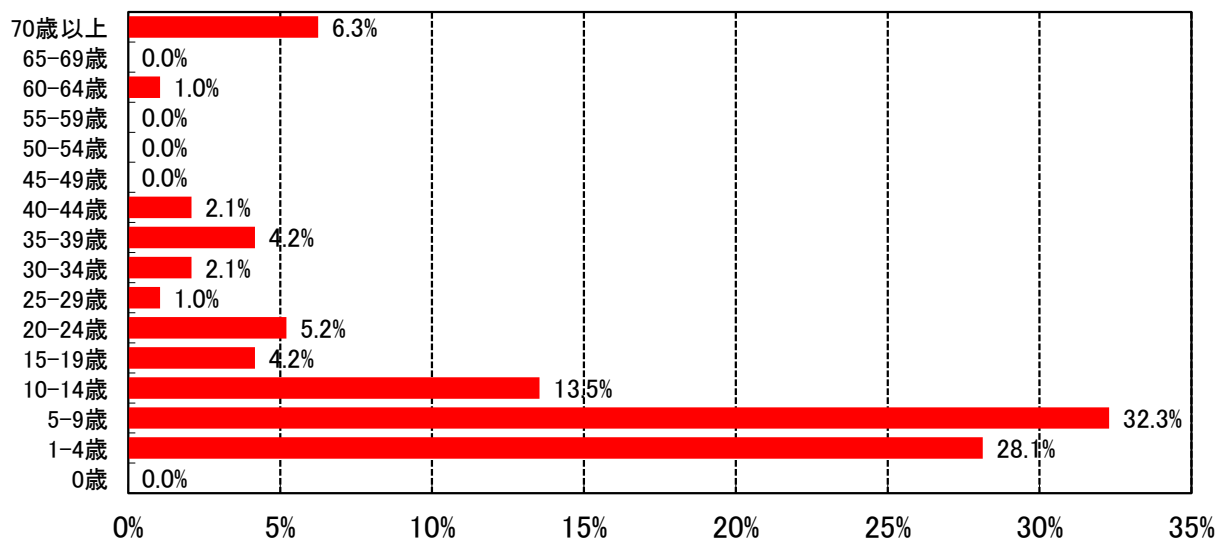


(人/定点)

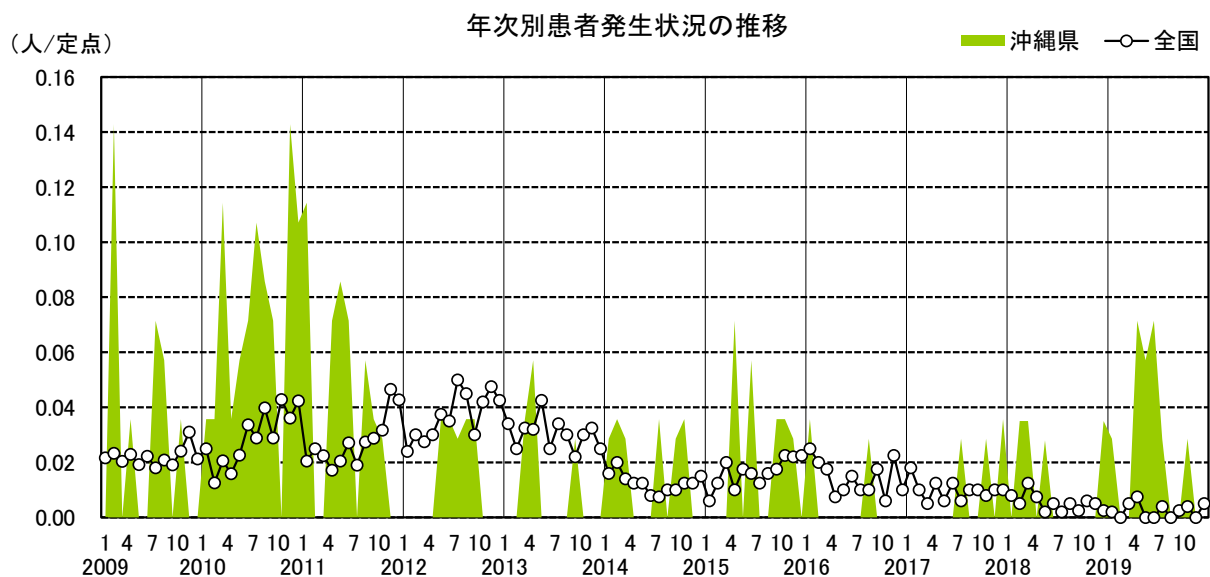
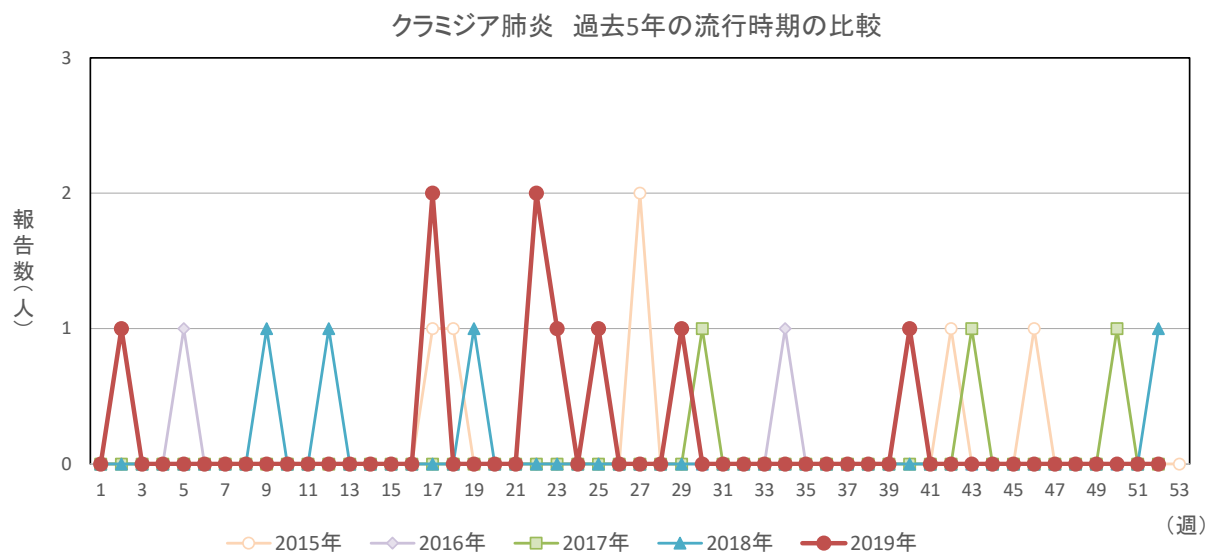
保健所別発生状況（報告数及び定点あたり報告数）



年齢階級別割合（沖縄県）

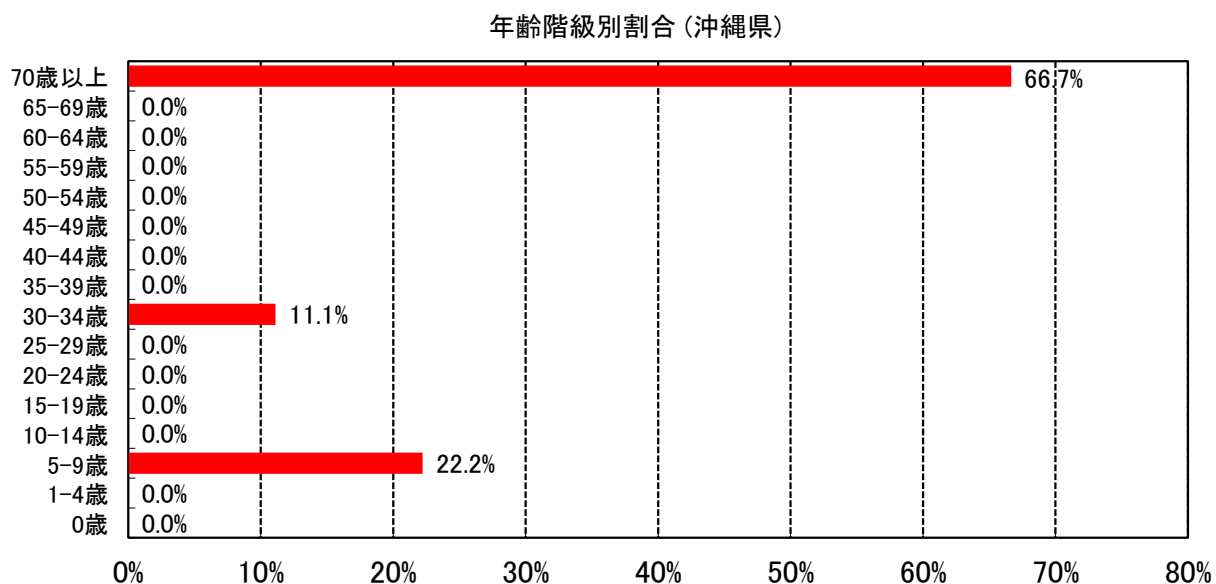
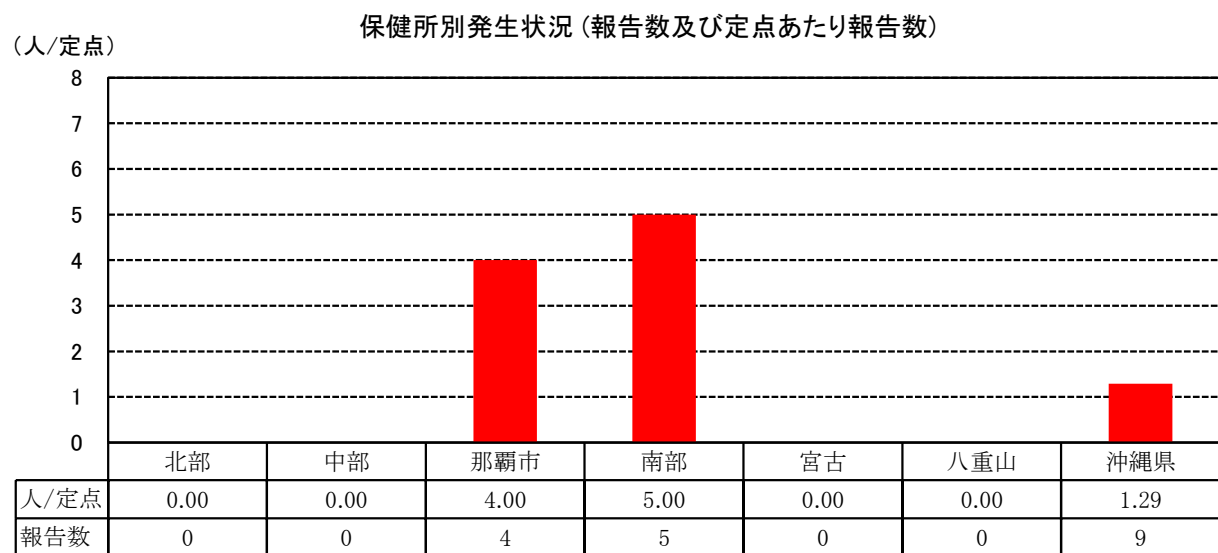
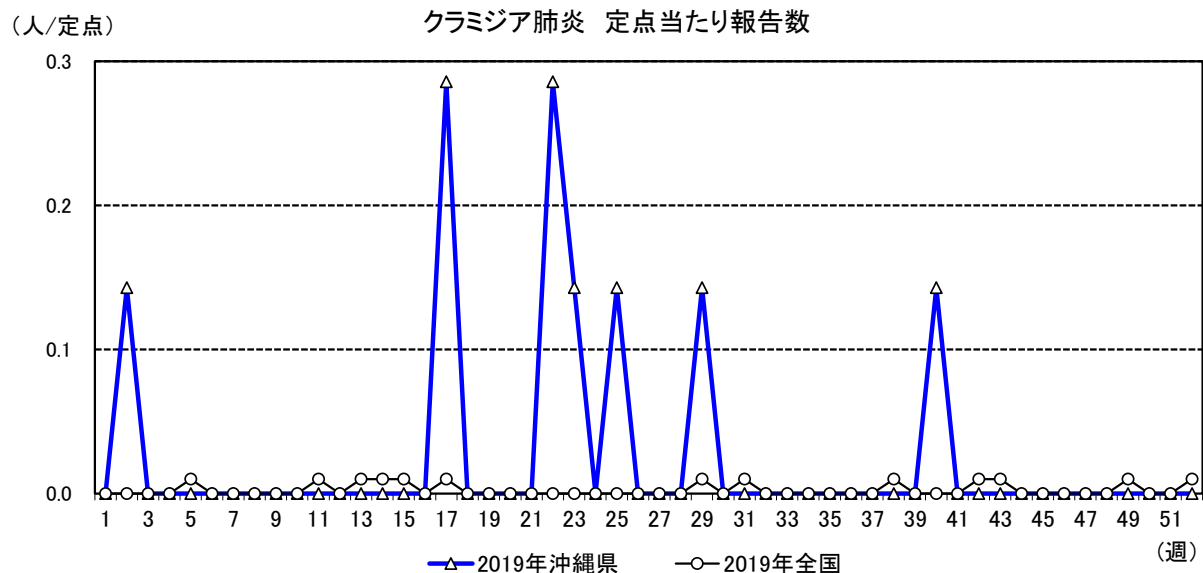


● クラミジア肺炎  
 クラミジア肺炎は、肺炎クラミジア、トラコーマ・クラミジアによる肺炎である。  
 2019年沖縄県内の報告数は9人、定点当たり報告数は1.29人であり、過去5年で最も多かった。  
 年齢階級別では、70歳以上が最も多く、6人（66.7%）であった。



シーズン別の報告数合計： クラミジア肺炎

平均報告数	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年
5	7	2	3	4	9

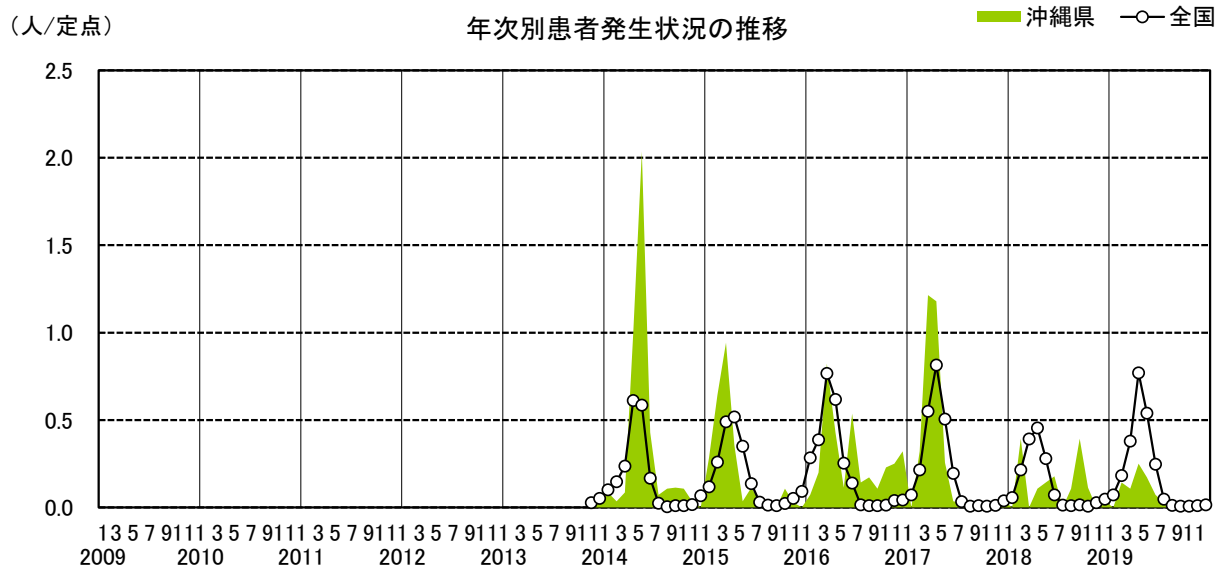
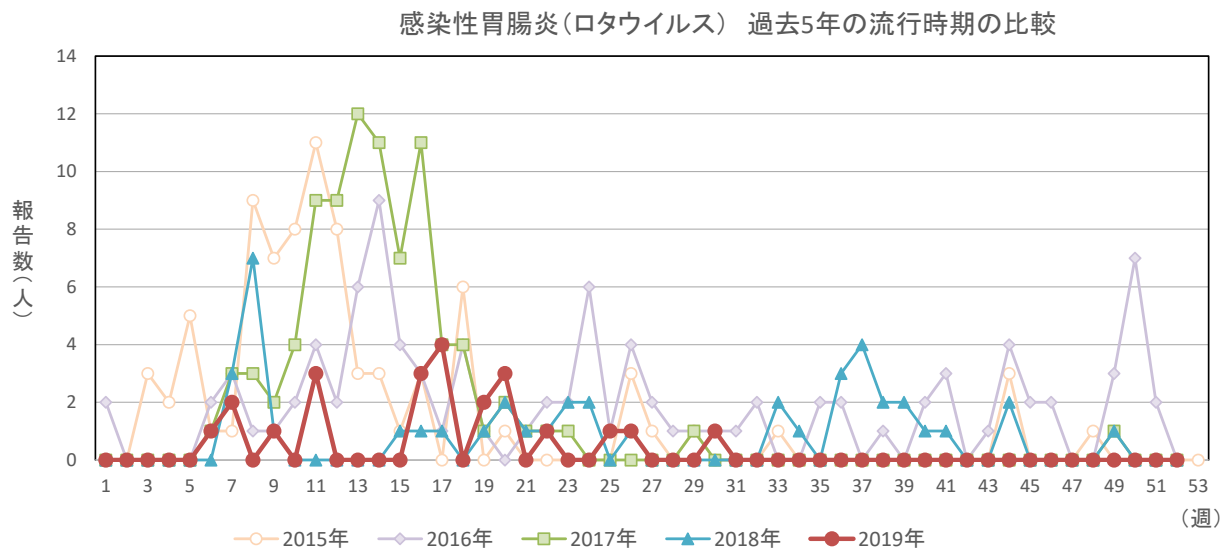


●感染性胃腸炎（ロタウイルス）

2013年（平成25年）10月14日から、ロタウイルスによる感染性胃腸炎が基幹定点の対象疾患に追加された。この改正により、感染性胃腸炎について、現行の小児科定点における届出に加え、基幹定点において迅速診断キットによりロタウイルスによる感染性胃腸炎と診断された症例を届出の対象とすることで、重症例を中心にロタウイルス胃腸炎の発生動向をより正確に把握することとなった。

2019年沖縄県内の報告数は23人、定点当たり報告数は3.29人であり、過去5年で最も少なかった。

年齢階級別では、10歳未満が全体の95.6%を占め、うち、1-4歳の報告数は56.5%と最も多くなった。

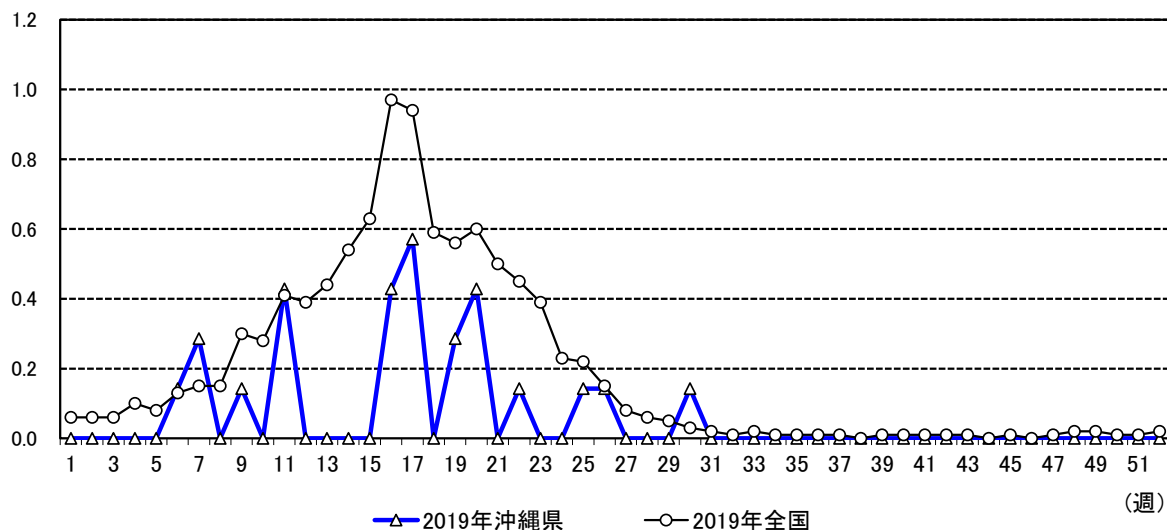


シーズン別の報告数合計： 感染性胃腸炎（ロタウイルス）

平均報告数	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年
67	82	100	88	43	23

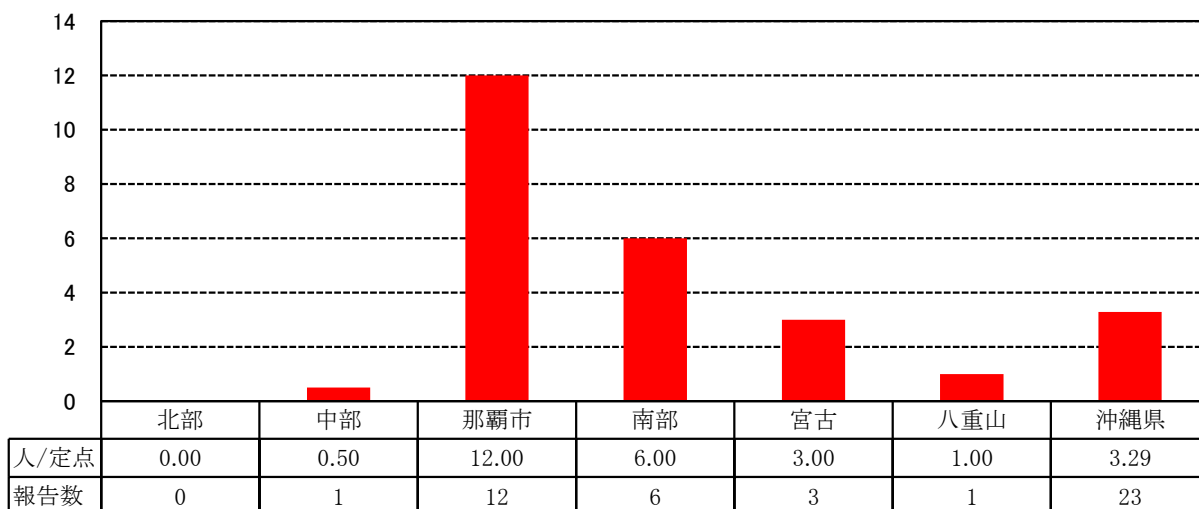
(人/定点)

## 感染性胃腸炎(ロタウイルス) 定点当たり報告数

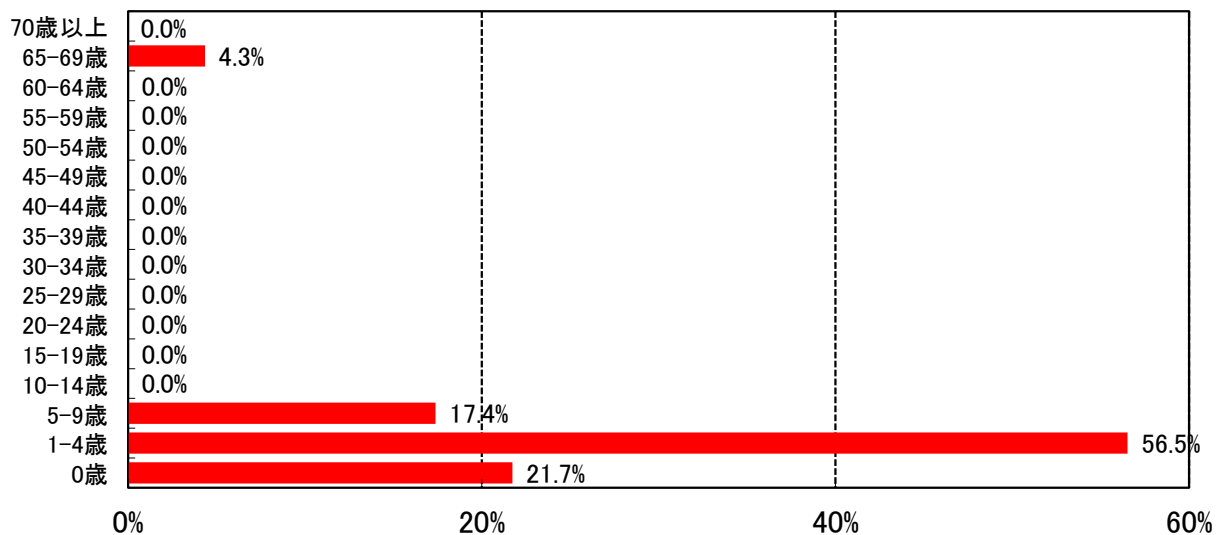


(人/定点)

## 保健所別発生状況(報告数及び定点あたり報告数)



## 年齢階級別割合(沖縄県)



MEMO

## 2 月報

### (1) 性感染症 (STD) 定点

沖縄県の性感染症 (STD) の 2015 年以降 5 年間の報告数は、2015 年 261 人 (男性 : 63 人、女性 : 198 人)、2016 年 204 人 (男性 : 86 人、女性 118 人)、2017 年 314 人 (男性 : 90 人、女性 : 224 人)、2018 年 409 人 (男性 : 90 人、女性 : 319 人)、2019 年 419 人 (男性 : 79 人、女性 : 340 人) であった。2019 年は前年より 10 人増加した。性別では、男性は前年より 11 人減少したのに対し、女性は前年より 21 人増加した。年代別では、20 代が最も多く、次いで 30 代であった。

2019 年の STD の内訳は、性器クラミジア感染症 258 人 (61.6%)、性器ヘルペスウイルス感染症 92 人 (22.0%)、尖圭コンジローマ 40 人 (9.5%)、淋菌感染症 29 人 (6.9%) であった。男女比 (男 : 女) は、性器クラミジア感染症 (1 : 5.0)、性器ヘルペスウイルス感染症 (1 : 7.4)、尖圭コンジローマ (1 : 2.6)、淋菌感染症 (1 : 1.1) であった。

なお、宮古および八重山は人口規模が小さいため、性感染症の定点医療機関は設置されていない。

#### ●性器クラミジア感染症

2019 年の沖縄県の報告数は 258 人、定点当たり報告数は 21.50 人であり、前年と比べて 2.49 人増加した。性別では男性が 43 人、女性が 215 人で女性の報告数が多く、女性は前年 (186 人) と比べて増加した。年齢別では、男女共に 20 代の報告数が最も多かった。

#### ●性器ヘルペスウイルス感染症

2019 年の沖縄県の報告数は 92 人、定点当たり報告数は 7.67 人であり、前年と比べて 1.42 人減少した。男性が 11 人、女性が 81 人で女性の報告数が多かった。

#### ●尖圭コンジローマ感染症

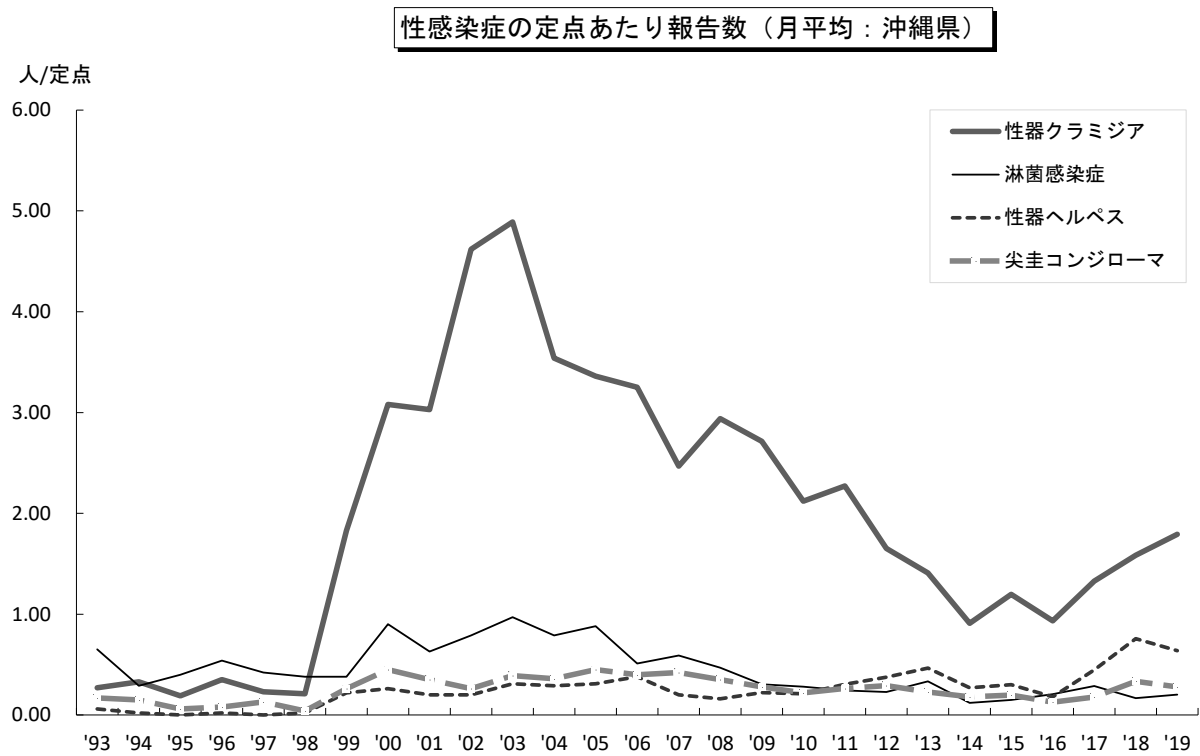
2019 年の沖縄県の報告数は 40 人、定点当たり報告数は 3.33 人で前年より 0.67 人減少した。男性が 11 人、女性が 29 人で女性の報告数が多かった。

#### ●淋菌感染症

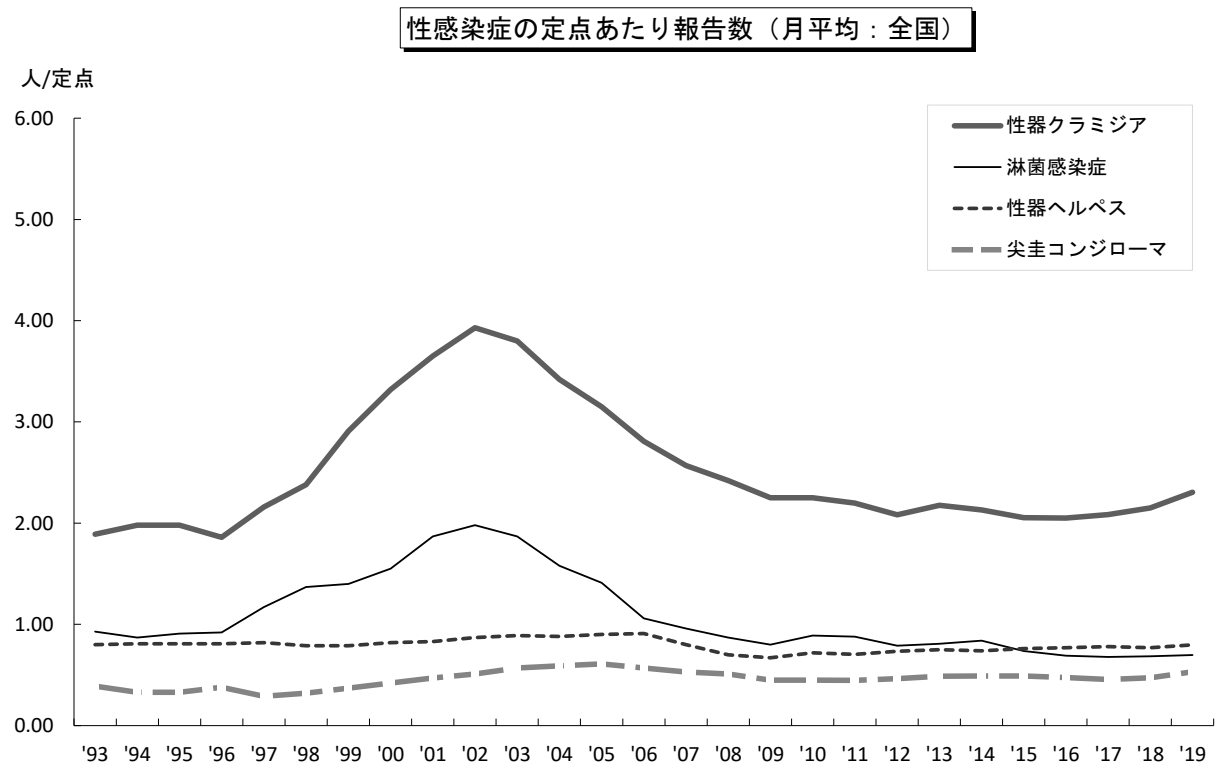
2019 年の沖縄県の報告数は 29 人、定点当たり 2.42 人であり、前年より 0.43 人増加した。男性が 14 人、女性が 15 人で男女ほぼ同数であった。

ア. 疾患別患者報告数の年次推移

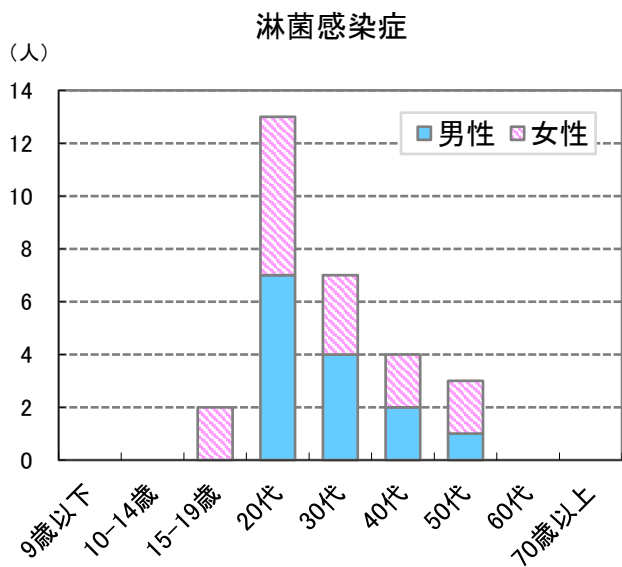
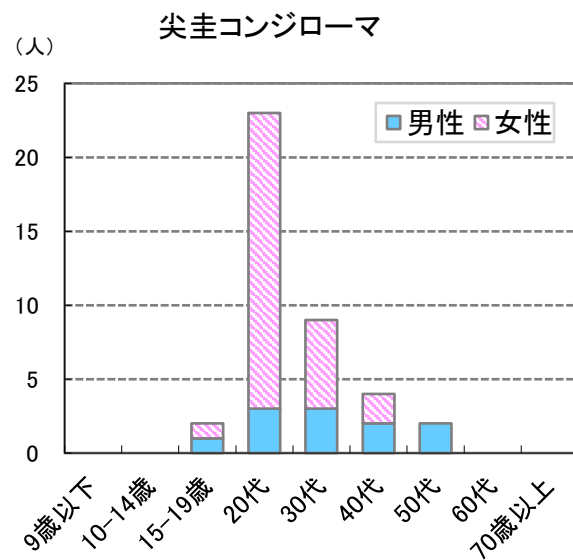
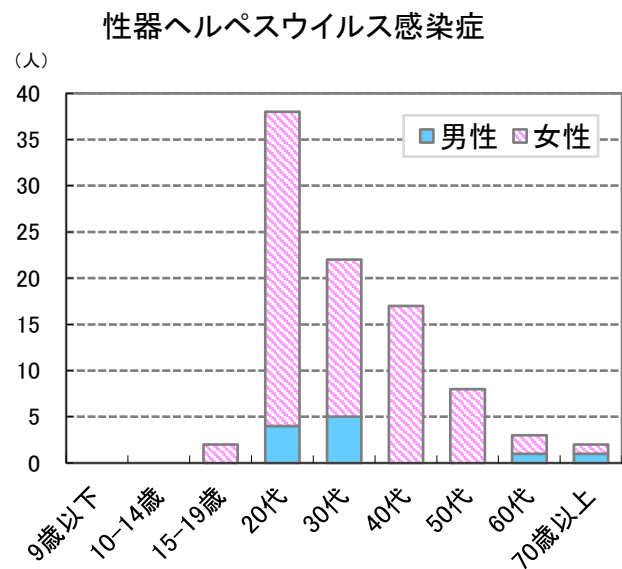
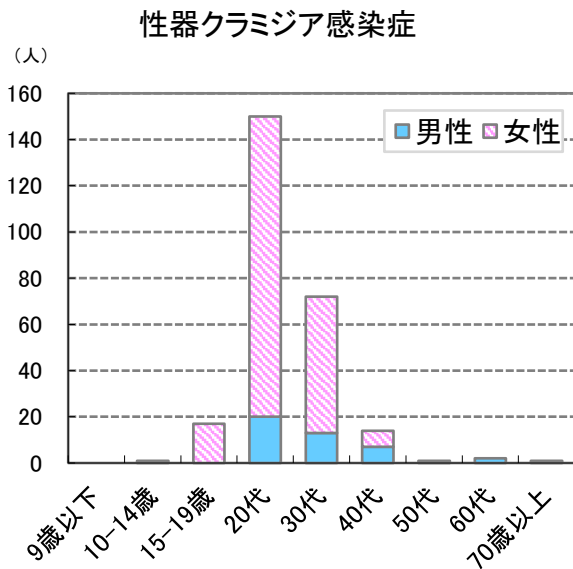
2019年12月末現在



2019年12月末現在



イ. 性別・年齢別患者報告数（沖縄県：2019年）



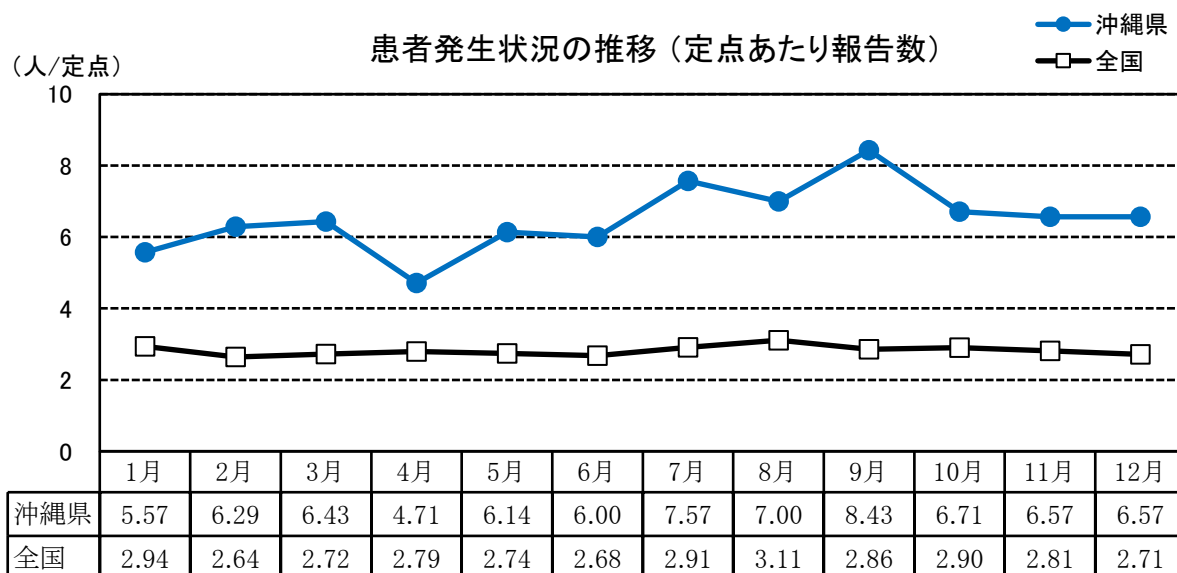
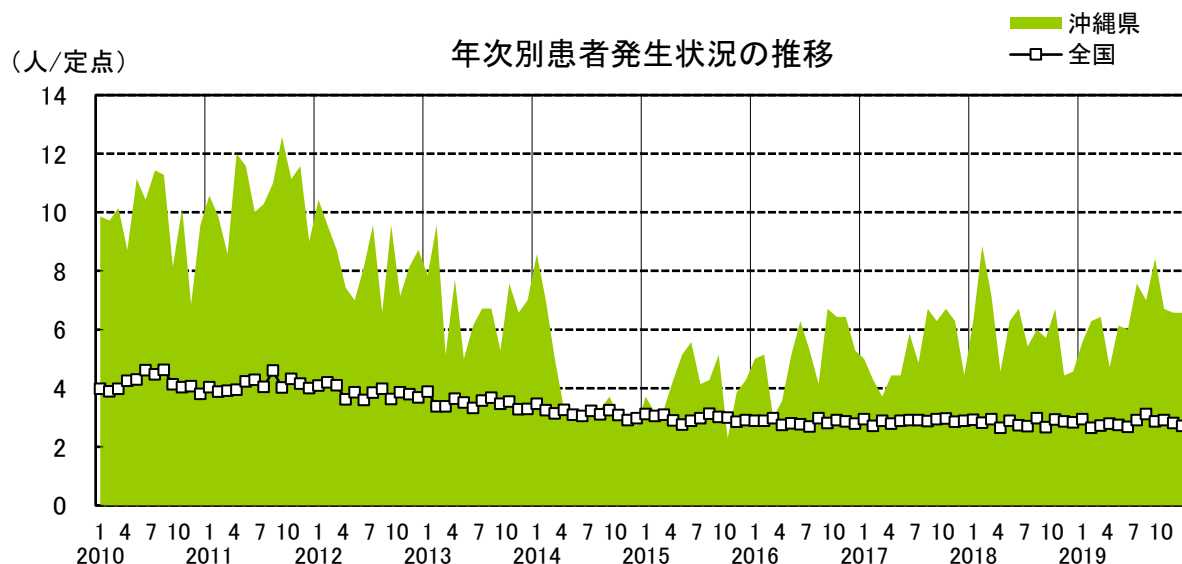
		9歳以下	10-14歳	15-19歳	20代	30代	40代	50代	60代	70歳以上	小計	合計
性器クラミジア 感染症	男性	0	0	0	20	13	7	0	2	1	43	258
	女性	0	1	17	130	59	7	1	0	0	215	
性器ヘルペス ウイルス感染症	男性	0	0	0	4	5	0	0	1	1	11	92
	女性	0	0	2	34	17	17	8	2	1	81	
尖圭 コンジローマ	男性	0	0	1	3	3	2	2	0	0	11	40
	女性	0	0	1	20	6	2	0	0	0	29	
淋菌感染症	男性	0	0	0	7	4	2	1	0	0	14	29
	女性	0	0	2	6	3	2	2	0	0	15	

## (2) 基幹定点(薬剤耐性菌)

### ●メチシリン耐性黄色ブドウ球菌（MRSA）感染症

メチシリン耐性黄色ブドウ球菌（MRSA）感染症は、メチシリンなどのペニシリン剤をはじめとして、β-ラクタム剤、アミノ配糖体、マクロライド剤など多くの薬剤に対し耐性を示すMRSAによる感染症である。

2019年県内での報告数は546人、定点あたり報告数は77.99人であり、2014年以降で報告数が最も多かった。本県の定点当たりの報告数は2015年11月以降、全国値を上回っている。

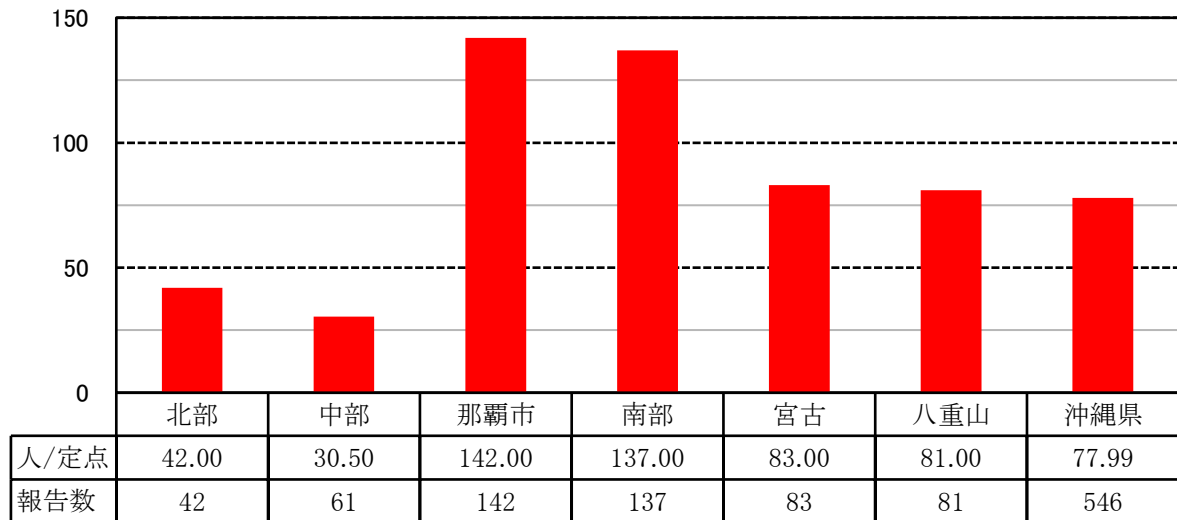


シーズン別の報告数合計：メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症

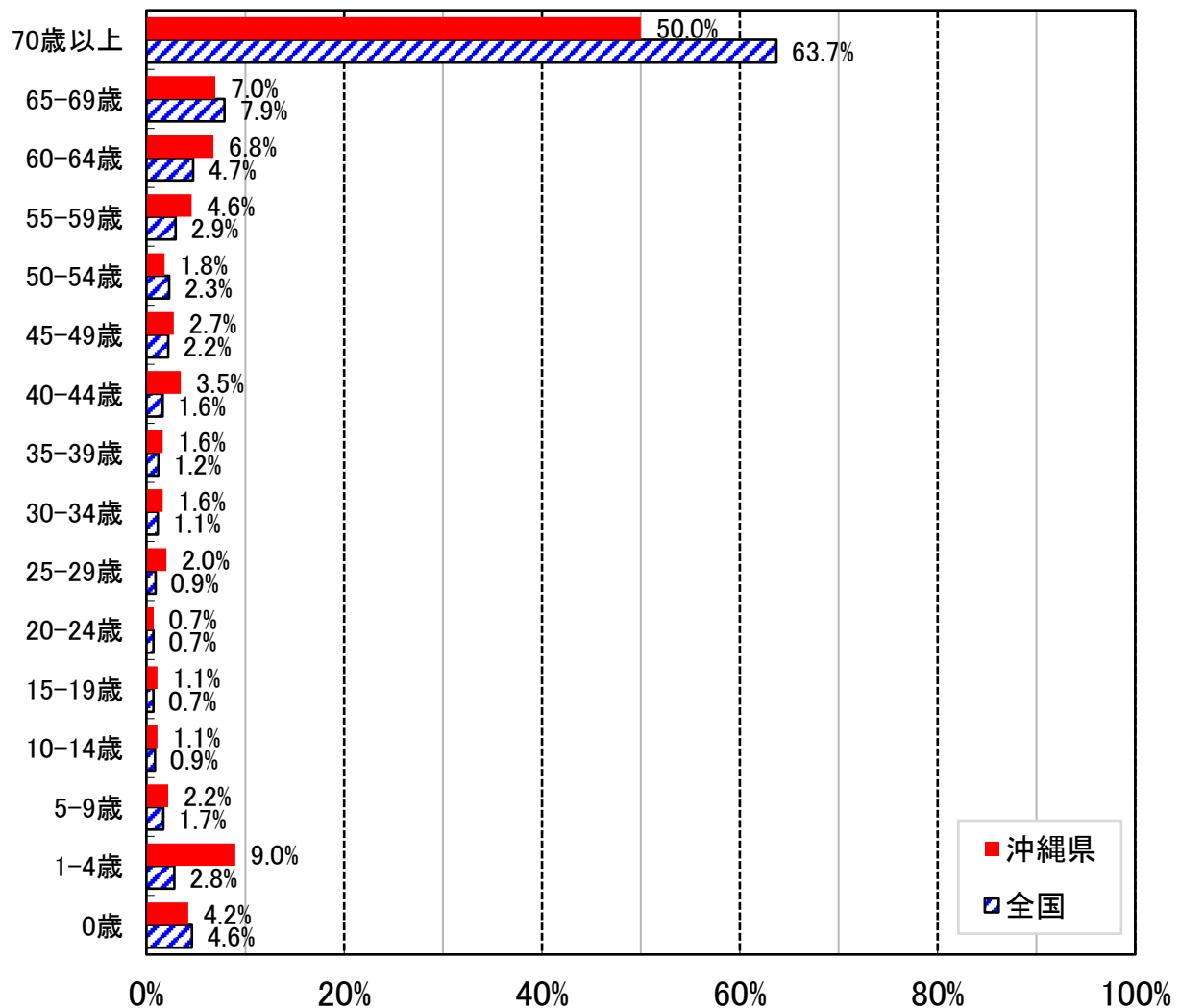
平均報告数	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年
455	344	437	441	509	546

# メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症 保健所別発生状況

(人/定点)



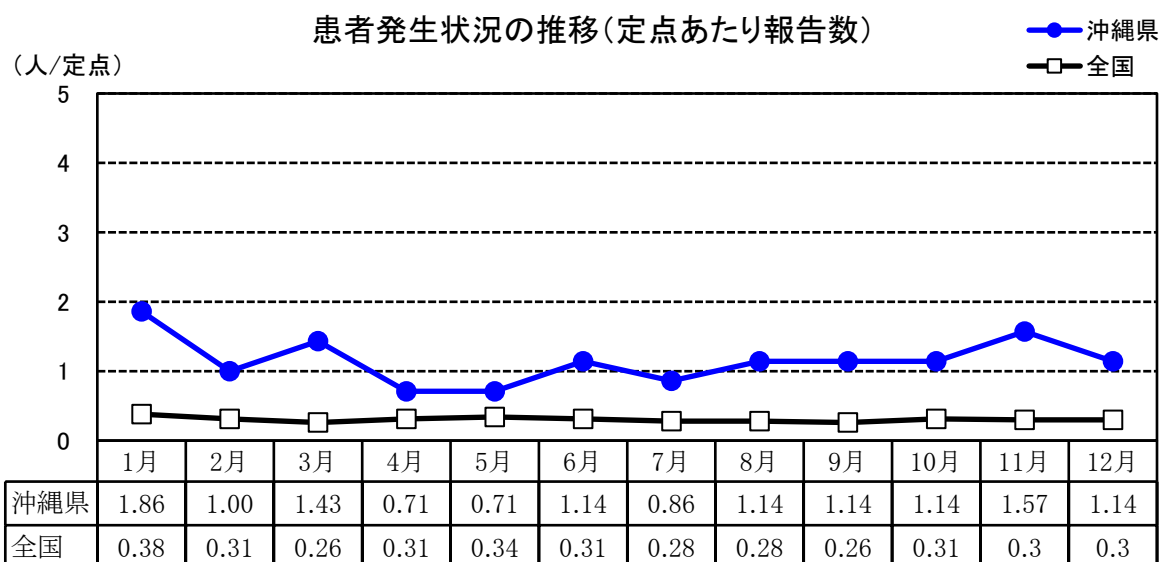
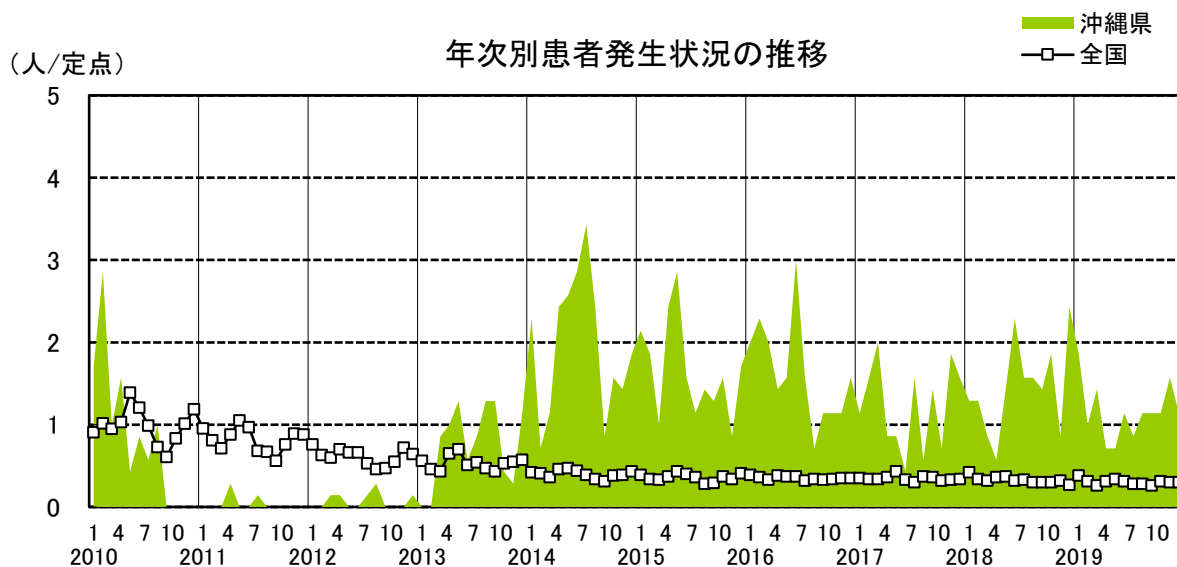
## 年齢階級別割合



● ペニシリン耐性肺炎球菌（PRSP）感染症

ペニシリン耐性肺炎球菌（PRSP）感染症は、抗生物質であるペニシリンに耐性を獲得した肺炎球菌である。通常は無症状であるが、小児の中耳炎や肺炎、高齢者の肺炎などの原因菌となって発症することがある。

2019年県内での報告数は97人、定点あたり報告数は13.84人であった。本県の定点当たりの報告数は2013年12月以降、全国値を上回っている。

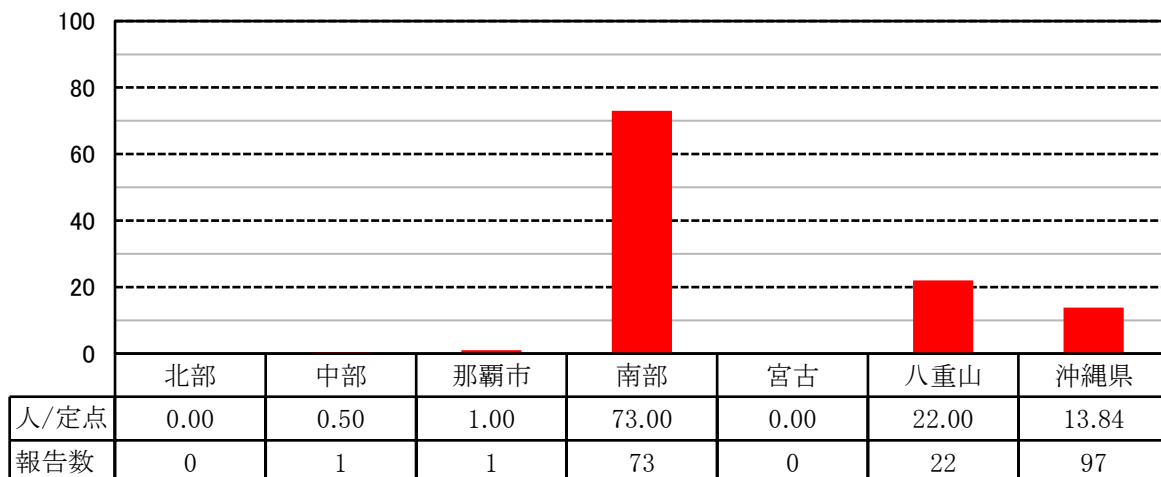


シーズン別の報告数合計： ペニシリン耐性肺炎球菌感染症

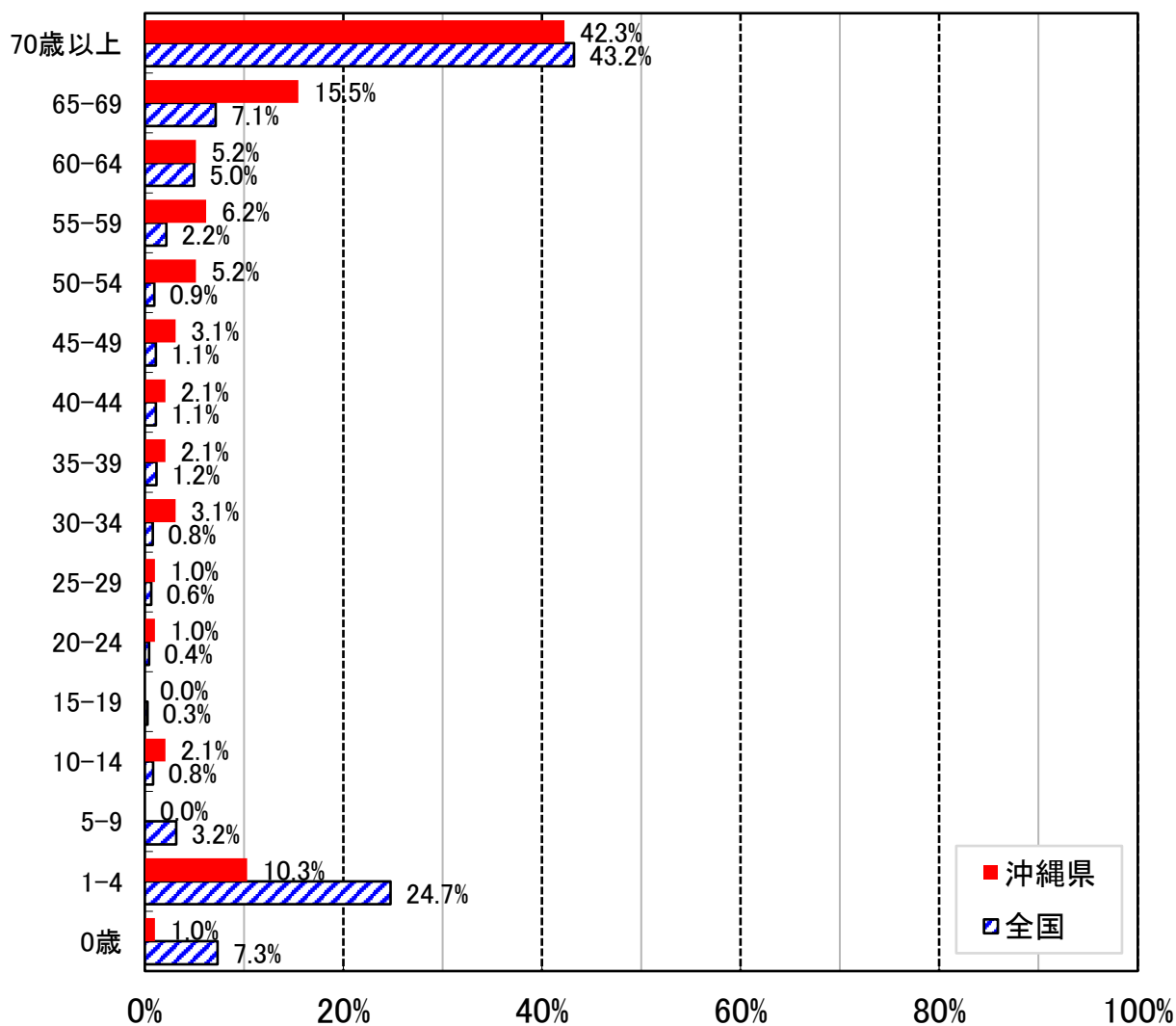
平均報告数	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年
119	139	137	102	122	97

# ペニシリン耐性肺炎球菌感染症 保健所別発生状況

(人/定点)



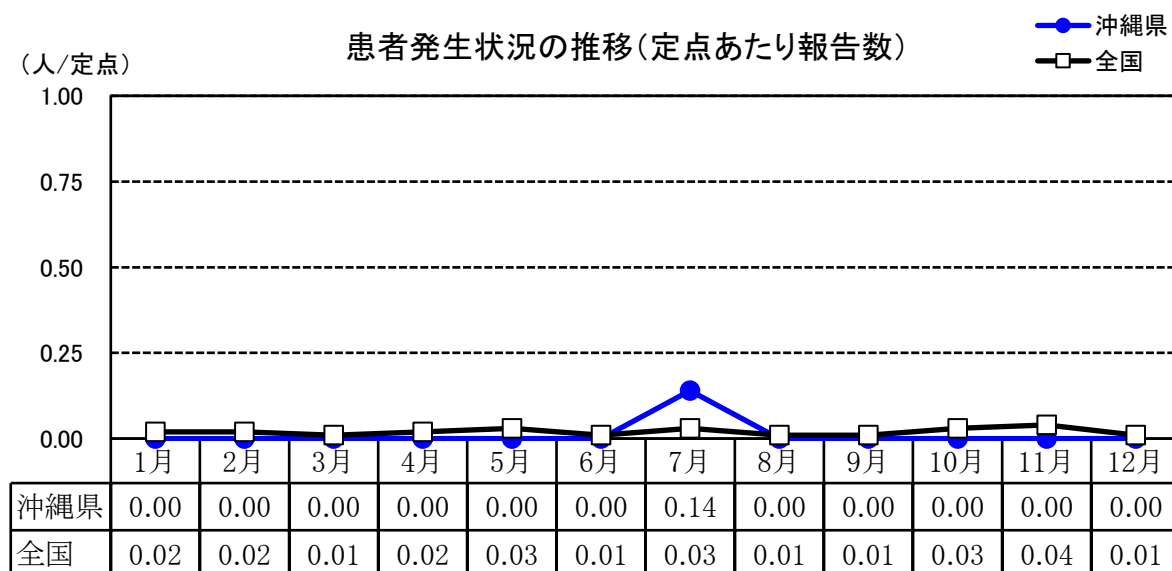
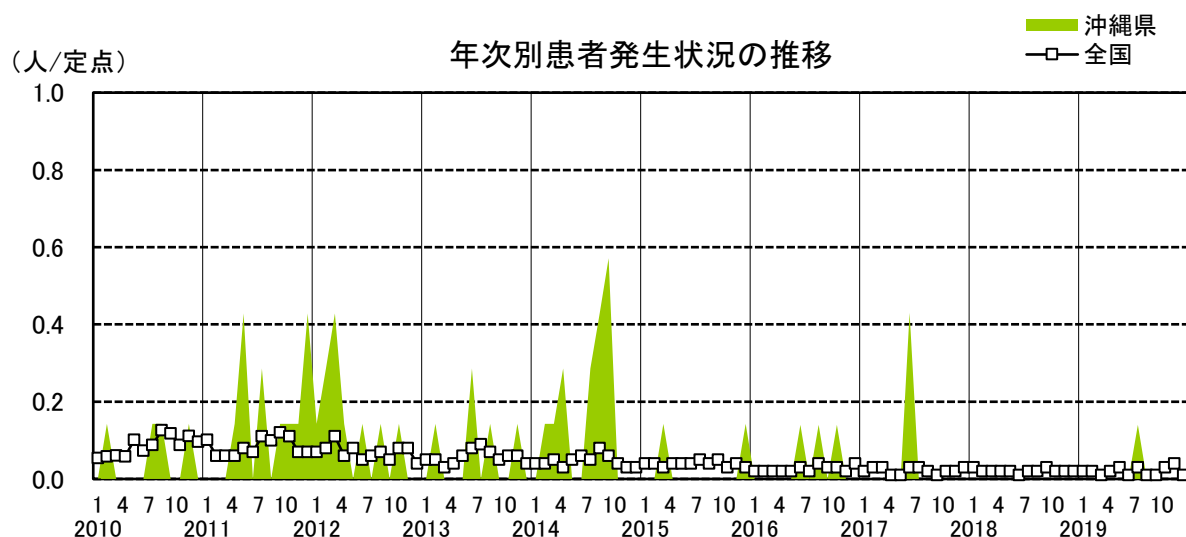
## 年齢階級別割合



# ●薬剤耐性緑膿菌感染症

薬剤耐性緑膿菌感染症は、広域β-ラクタム剤、アミノ配糖体、フルオロキノロンの3系統の薬剤に対して耐性を示す緑膿菌による感染症である。感染防御機能の低下した患者や抗菌薬長期使用中の患者に日和見感染し、敗血症や骨髄、気道、尿路、皮膚、軟部組織、耳、眼などに感染症を引き起こす。

2019年県内の報告数は1人、定点あたり報告数は0.14人であった。

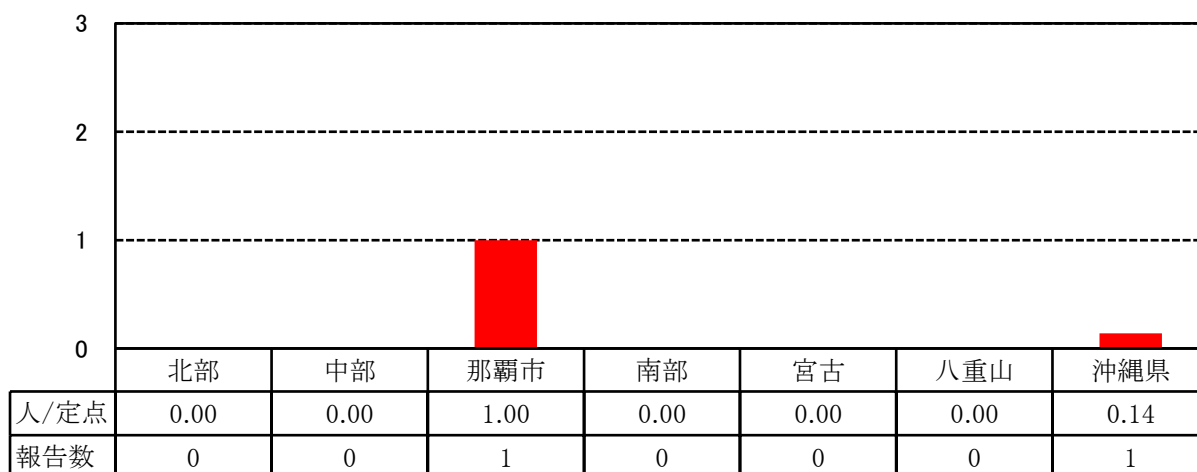


シーズン別の報告数合計： 薬剤耐性緑膿菌感染症

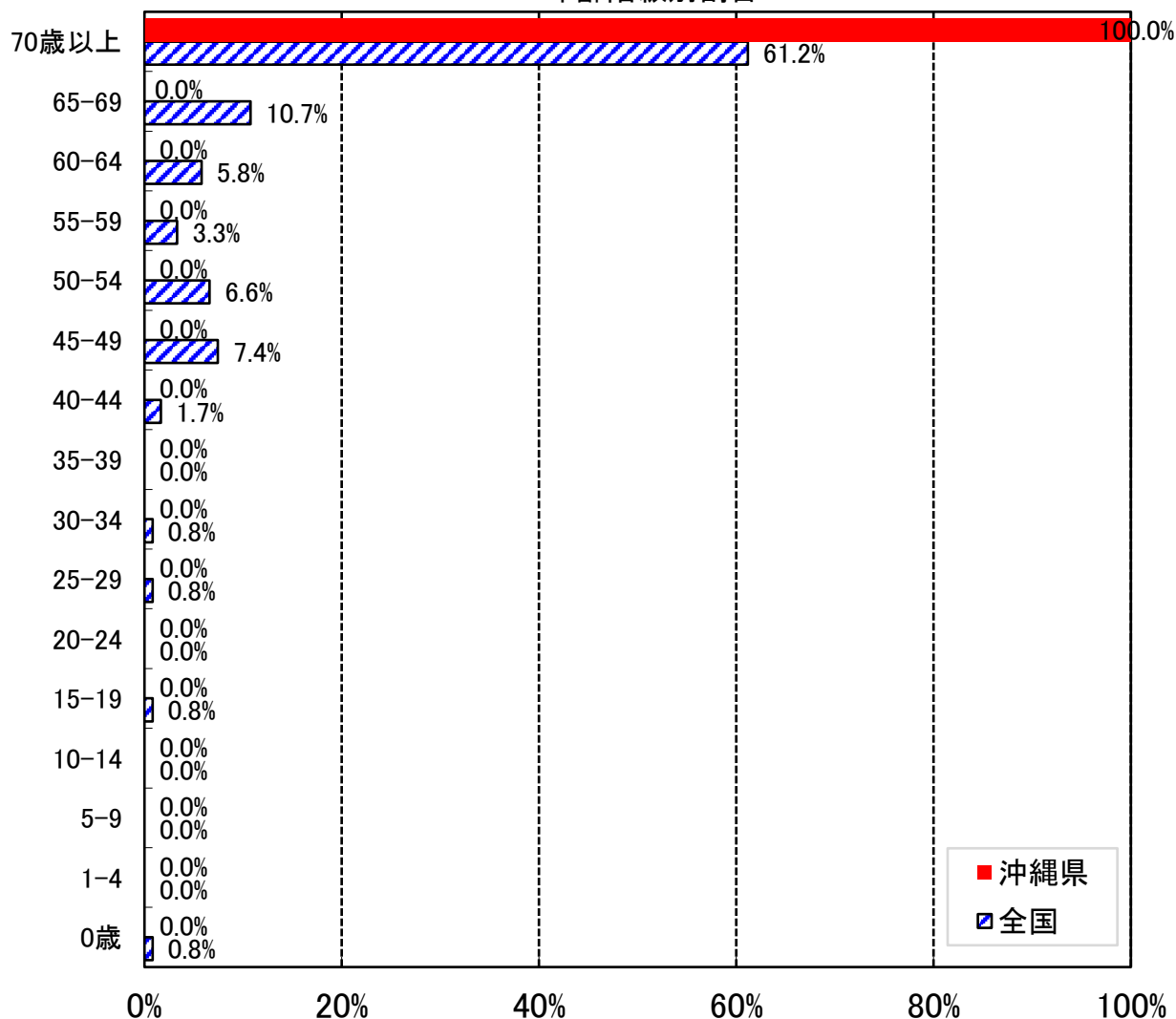
平均報告数	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年
2	2	3	3	0	1

# 薬剤耐性緑膿菌感染症 保健所別発生状況

(人/定点)



## 年齢階級別割合



MEMO